

明日に生きる

第 20 号

— 作文コンクール入選作品集 —



平成21年度

東京都産業教育振興会

表紙デザイン

若い私たちも進んでボランティア活動をしていきたいと思い描きました。年配の方との間で、互いに気持ちが通じ合った瞬間の喜びを表現しました。

東京都立葛飾商業高等学校
3年 渡邊 ちはる

明日に生きる

第二十号

— 作文コンクール入選作品集 —

明日に生きる

第二十号 — 作文コンクール入選作品集 —

目次

講評

よりよい生活・社会を目指して

中学校の部 選考委員長（大田区立大森第六中学校長）

税所 要章 1

選考を終えて

高等学校・専修学校の部 選考委員長（東京都立瑞穂農芸高等学校長）

岡本 利隆 2

表彰式の記念写真

中学校の部

ページ

最優秀賞	ものづくりの心	新宿区立西戸山中学校	二年	牧野 紗依	5
優秀賞	笑顔を見て	品川区立浜川中学校	三年	草野 里美	6
優秀賞	共生	大田区立馬込中学校	三年	内田 菜摘	8
優秀賞	未来をつくる技術家庭	練馬区立石神井中学校	三年	日原 雪恵	9
優秀賞	職場体験	葛飾区立立石中学校	三年	川端 友梨亜	11
優秀賞	十三才の私に出来る子育て支援	中央区立晴海中学校	二年	荒木 萌々	12
佳作	貴重な体験、パン屋さんでの三日間	新宿区立西戸山中学校	三年	萩原 晴菜	14
佳作	技術・家庭科の授業で学んだ事	新宿区立西戸山中学校	三年	羽角 和菜	15
佳作	パジャマづくりを通して学んだこと	新宿区立西戸山中学校	三年	後藤 裕子	17
佳作	物づくりから学んだこと	新宿区立西戸山中学校	三年	林 礼奈	18
佳作	将来の夢に向かって	文京区立第八中学校	二年	伊東 沙都美	20
佳作	働く大変さと喜び	墨田区立両国中学校	三年	青木 亮哉	21
佳作	職場体験で学び得たもの	墨田区立両国中学校	二年	増子 健太朗	23
佳作	将来の夢にむかって、今できること	品川区立浜川中学校	二年	大島 琴海	24

高等学校の部

佳作	働くことの楽しさ	大田区立南六郷中学校	二年	望月志保	25
佳作	白い箱	大田区立馬込中学校	三年	岡田稚菜	26
佳作	一日は一生	大田区立馬込中学校	三年	小楠由起子	28
佳作	自分の仕事に誇りを	大田区立馬込中学校	三年	根岸汀	29
佳作	一生懸命	大田区立馬込中学校	三年	山田実優	30
佳作	先生と園児のあいだ	大田区立馬込中学校	三年	横関美保	32
佳作	すみれ組の先生	大田区立馬込中学校	三年	池野遥	33
佳作	『小さな小さなものづくり』という				
佳作	ボランティア活動を知って	大田区立大森第六中学校	三年	藤平理沙	34
佳作	職場体験で	世田谷区立駒留中学校	二年	北岡樹	36
佳作	技術を通して学んだ事	葛飾区立立石中学校	三年	青山健一	37
佳作	技術と日常の関わり	葛飾区立立石中学校	三年	菅原大暉	38
佳作	職業体験で学んだこと	江戸川区立小岩第四中学校	三年	大賀美優	40
佳作	私の夢と希望	愛国中学校	一年	メントネンフィッコ	41
佳作	私の将来の夢	愛国中学校	三年	鈴木沙耶香	43
最優秀賞	看護とは何か	愛国高等学校	三年	神山未樹	45
優秀賞	農業体験で学んだこと	東京都立園芸高等学校	三年	阿部巧	47
優秀賞	私の進むべき道	愛国高等学校	三年	飯田さゆり	48
優秀賞	悔しさを振り返って	岩倉高等学校	三年	小向和樹	50
佳作	将来の夢	東京都立農産高等学校	一年	柏木亜美	51

佳	作	技能習得型インターンシップとともに	東京都立練馬工業高等学校	二年	二宮 早紀	53
佳	作	挑んだ電気工事士の資格取得	東京都立小金井工業高等学校	三年	加藤 将一	55
佳	作	私の在り方	東京都立江東商業高等学校	二年	山本 華己	57
佳	作	マーケティング部で学んだこと	東京都立江東商業高等学校	二年	横尾 有紗	58
佳	作	江東商業に入学して	東京都立忍岡高等学校	三年	寺澤 美咲	60
佳	作	作る喜び、作る楽しさ	愛国高等学校	三年	鈴木 千晶	61
佳	作	私を変えてくれたもの	愛国高等学校	三年	関谷 梨沙	63
佳	作	忘れてはならないこと	愛国高等学校	三年	田中 小麦	65
佳	作	大切なもの	愛国高等学校	三年	三浦 舞	67
佳	作	人のため、そして自分のために	岩倉高等学校	三年	佐藤 剛	68
佳	作	見られるということ	岩倉高等学校	三年	中川 拓也	70
佳	作	マイ・ドリーム	蒲田女子高等学校	三年	滝澤 祥恵	71
佳	作	言葉よりも大切なこと	蒲田女子高等学校	二年	手塚 美香	73
佳	作	私が福祉で学んできて				

専修学校の部

最優秀賞	体験で得た「ひかり」	青山製図専門学校	二年	藤田 紘子	74
優秀賞	仕事で得られるもの	ホスピタリティーズ専門学校	二年	関根 沙記	76
佳作	相手の立場に立つことの大切さ	東京エアトラベル・ホテル専門学校	二年	山下 奈都美	77

作文コンクール選考委員名簿

あとがき

よりよい生活・社会を目指して

中学校の部 選考委員長

税 所 要 章



中学校の部には、三十二校、百六十一編の応募があり、本年度は、特に優秀な作品が多く、最優秀賞一名、優秀賞五名、佳作二十二名となりました。

最優秀賞には、西戸山中学校の牧野紗依さんの「ものづくりの心」が選ばれました。技術・家庭科の授業で困っていたDVDの置き場所を解決するためのケース製作について書かれています。失敗を乗り越えながら友達に助けられたり、また友達を助けたりしながら、出来上がっていく楽しみ、家を持って帰り、設置したときの感動、家族に喜んでもらえた体験から、ものづくりについて考えた優れた作品でした。

優秀賞である浜川中学校の草野里美さんの「笑顔を見て」は地域のボランティア活動に参加して、誰かのために働いて、その人が笑顔になったり喜んでくれた体験を通して、看護師を目指すようになった過程が生き生きと描かれています。

優秀賞である馬込中学校の内田菜摘さんの「共生」は、デイケアセンターでのアットホームな施設内の交流を通して人の温かさを改めて知り心と心の関わりを大切にし支え合いな

がら生きていく共生について深く考えてくれたものでした。

優秀賞である石神井中学校の日原雪恵さんの「未来をつくる技術家庭」では、環境問題の解決には一人一人の意識を変えていかなければならないこと、私達が未来を築いて、後の世代へと繋げる必要があり、積極的に学び行動し未来をつくる人になりたいと書かれている頼もしい内容でした。

優秀賞である立石中学校の川端友梨亜さんの「職場体験」は、訪問看護の職場体験をする中で笑顔の大切さを知り、働くことの喜びや人のために役立つ仕事、やりがいや、仕事への誇りについて考え、少しでもよい未来を築いていけたら最高の人生が送れると抱負が述べられていました。

優秀賞である晴海中学校の荒木萌々さんの「十三才の私に出来る子育て支援」は、母が地域の子育て支援・相互援助活動で赤ちゃんを家で預かることになり、母の手伝いの体験から、人はたくさんの人に助けられて成長していくのであり、席を譲ったり、荷物を持ったり、声をかけたりと小さなことから始めていくことが子育て支援の第一歩であると結んでいます。

以上の他に、佳作にも優れた作品が数多くありました。どの作品にも、これからのよりよい生活・社会をつくっていくためには、どんなことをしたらよいかを真剣に考え、自分で実践していけることは何か、また、その実践が具体的であることが、本年度の作品の大きな特徴であったと思います。全体を通して、様々な困難を克服し力強く生きていこうとする姿勢が強く感じられました。頼もしく思うと共に、これからの社会を背負っていく生徒諸君にエールを送ります。

選考を終えて

高等学校・専修学校の部 選考委員長

岡 本 利 隆



最近の若者は、経済や社会、雇用情勢の変化から、様々な体験の機会や異年齢との交流が少なく、将来に夢や希望を持ちにくくなってきているなどとも言われています。そのような

中、就業体験に積極的に参加し、貴重な経験を得たことは、今後の将来において素晴らしい財産になったことと思います。このたびの作文コンクール、高校・専修学校の部に寄せられた作品一〇五点はどれも、職業現場での実践的な体験を通して、学ぶこと、働くことへの誠実で積極的な態度が見られました。さらに、若者らしく、まっすぐに感動し、自己の至らない点について反省するとともに、将来への希望と意欲の漲った作品が多く見られたことも嬉しく思います。

特に、入選作品は、責任ある職務を受け持つことにより、職場の一員として責任を自覚し、仕事への期待と不安が感じられました。また、担当した職務一つ一つのきめ細かな思いや、自分なりに考えた対応等が描写されており、本人の意欲や心の動きが手に取るように伝わり、読み手を感動へと引き込む力のある作品でした。

高校生の部の最優秀賞、愛国高校の神山さんは、相手を思う気持ちはすべての出発点である。看護とは、患者の思いを

知ることであると、実習を通して確信した力強い作品でした。優秀賞、愛国高校の飯田さんは、看護実習で全介助の必要な患者を担当し、日々の看護を通して、その意義を確信し将来への意欲を高めたものでした。

岩倉高校の小向さんは、鉄道実習中に発生したトラブルに、何もできなかった悔しさから、将来、鉄道の仕事を通して満足のいくサービスを追及したいとの決意が感じられました。

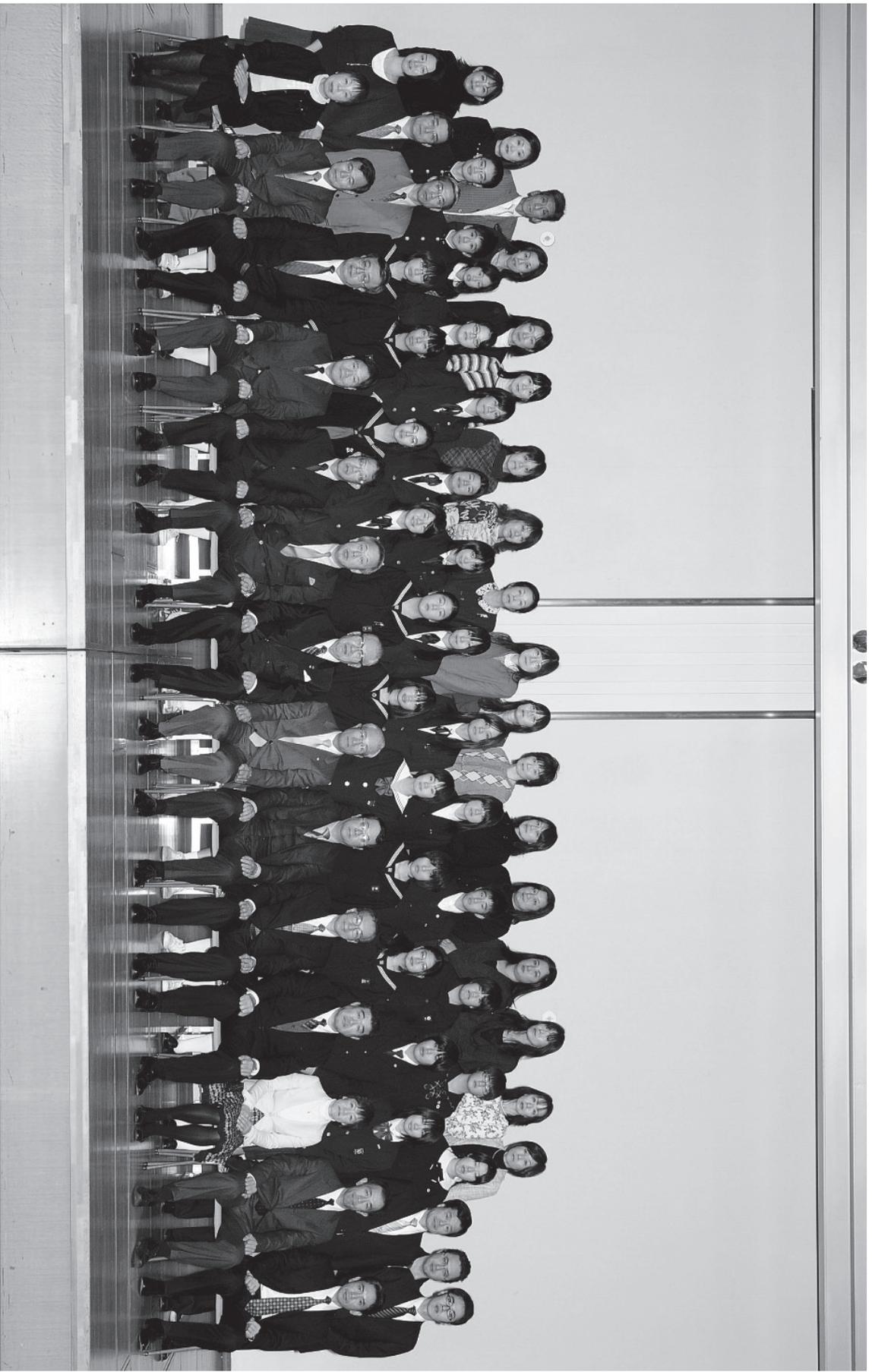
園芸高校の阿部さんは、農業実習を通して農業の奥深さと経営の広範さを知り、農業で生きると決意した力強いもので農業経営への期待が感じられるものでした。

専修学校の部の最優秀賞、青山製図専門学校藤田さんは、日本文化・建築の繊細さを実感したことから、地域社会の風景や習慣、慣習への考察を深め、学習・地域文化・生き方が繋がった作品で次代への確かな展開が感じられるものでした。

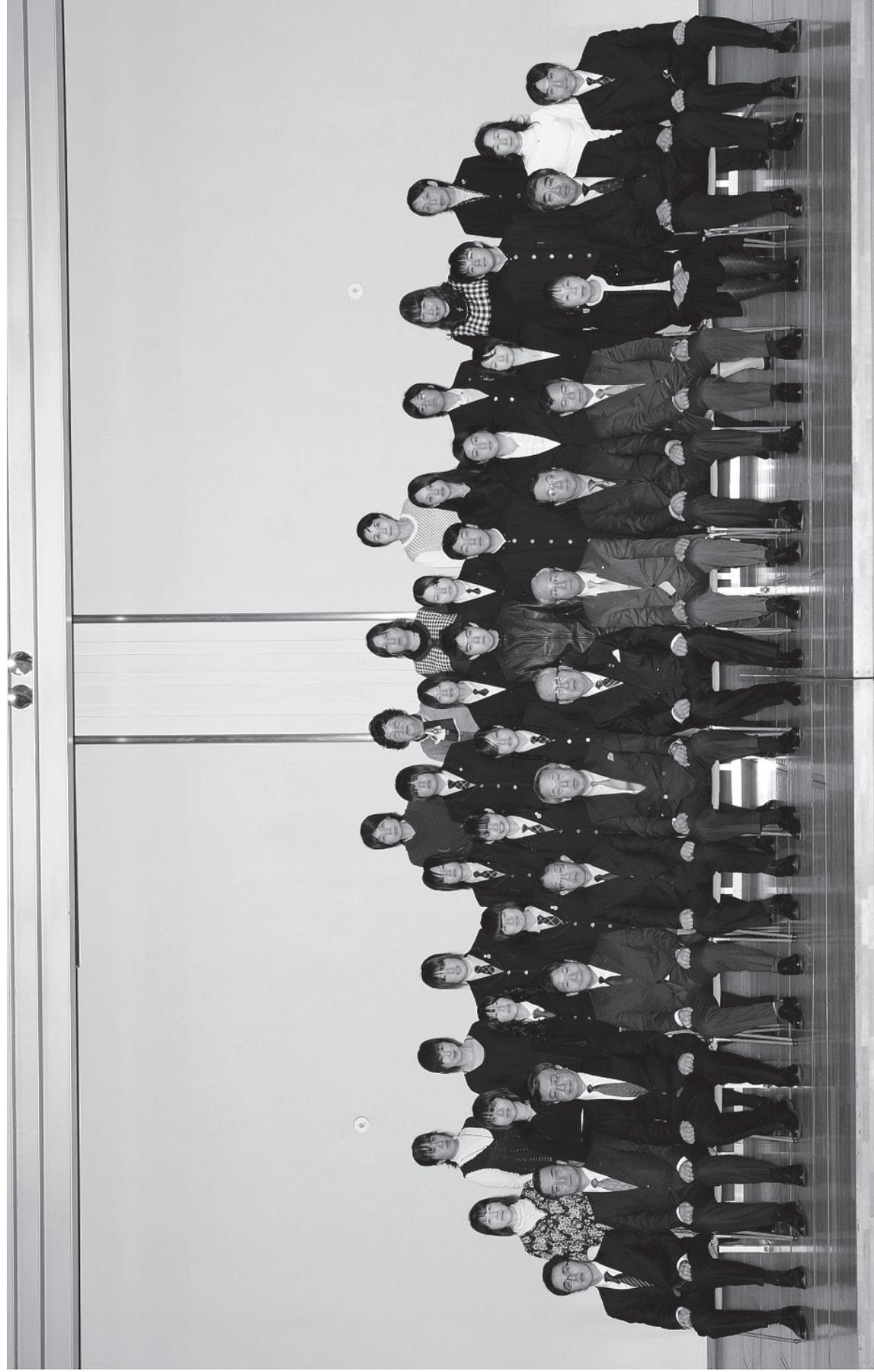
優秀賞、ホスピタリティリズム専門学校関根さんは、仕事は、自分次第で結果を出せるだけでなく、新しい自分を見つけることができ、自信とやりがいを持つことを学んだ、意欲と期待が感じられるものでした。

今後に向けた課題を申し上げますと、体験したことの記述で終わり、心の動きが表現されていない作品が比較的多く見られました。自ら学んだことや感動したことを、将来にどのようなにつなげるのか、といった表現をするようにして下さい。そして、提出前に見直すことも大切なことです。

最後になりましたが、作文の応募を通してご協力頂きました各校の先生方に感謝申し上げます。



平成21年度 作文コンクール表彰式（中学校の部） 12月22日 東京都産業教育振興会



平成21年度 作文コンクール表彰式 (高等学校・専修学校の部) 12月22日 東京都産業教育振興会

中学校の部 最優秀賞

ものづくりの心

新宿区立西戸山中学校 二年

牧野 紗 依

私が中学一年の時、技術の時間に、限られた材料で一から考え設計し、自分でつくる、という授業が行われました。その時、ちょうど家にDVDが増え、DVDケースの置き場所に困っているところでした。そこで、私はDVDケースが丸ごと入る、DVDラックをつくることにしました。

まずは、「設計図を描く」という課題が出ました。しかし、いざ描こうとすると、まずDVDケースの縦幅と横幅の長さや高さを測ったり、全部でいくつあるかを数えたりするところから、始めなければなりません。すると、決められた材料では、大きさや板の枚数が足りないことがわかり、その時点で既に、様々な問題が生じました。それでも、姉にアドバイスをもらいながら、わくわくした気持ちで設計図を描きました。

次に、その設計図を基に、実際に作業をしていきました。実際の作業がとても大変だということは、以前の技術の授業で、先生が描いた一つの設計図を基に、全員同じものをつくった時に、身をもって体験していました。しかし、自分で設計したものとなると、つくる最中の楽しさも、格別だったような気がします。

作業中にも、設計図どおりにつくっているのに、計算ミスをしていて、板の長さが足りなかったり、穴を開けようとしているのに、なかなか開かなかったりと、色々な予想外の事態が発生しました。けれども、友達を頼るにも、つくっている作品そのものが違うので、同じものをつくった時のようにはいきません。そこで、友達を頼れる部分は助けてもらい、私も友達を助けられる部分は助けるといった風に、友達と助け合いながら、頑張っつづくっていきました。

自分の作品が段々出来上がっていくのは、見ていてとても楽しかったのですが、一番楽しかったのは、木材でつくってきた各部品を釘でつなぎ合わせる、接合の作業です。ほぼ設計図どおりの形になっていくので、はやく完成させたくて、作業がどんどん進みました。実際に完成した作品を家に持ち帰り、その中にDVDケースを入れた時、母は、「すごい！」ととても感動してくれました。あらかじめ大きさを測ってつくったのですから、当たり前と言えば当たり前なのですが、実際にぴったりとDVDケースがおさまった光景には、確かに自分も感動しました。何より、母だけでなく、父も、またさらには二人の姉にも喜んでもらったことが、とても嬉しかったです。

技術の先生も褒めてくれたのは、私がこのDVDラックを縦長につくった点についてでした。先生は、棒材を切らずに、縦に利用するという発想がユニークだという理由で、褒めてくださいました。また母は、縦長につくれば、場所をとらなくて良いという理由で、褒めてくれました。

今、そのDVDラックは、当然のように我が家に置かれ、

すっかりリビングになじんでいます。時々それを見て、つくった時の事を思い出すと、つくづく「ものづくり」は大変で、それでいて楽しいものだということを感じます。

「ものづくりの心」で家の中を見回すと、私には全ての「もの」が、とても愛おしく感じられてくるのです。もちろん、機械で作られている「もの」も少なくはありませんが、それを設計し、第一号をつくったのは人間なのだと思うと、やはり愛着がわいてくるのです。それに、その「もの」を作る機械も、元を辿れば人がつくっているわけです。

たとえば机や椅子などといった、いかにもつくられている「もの」だけでなく、扇風機やコンピューターなどにも、私は親しみが持てるようになりました。たとえばそれをつくる工程が機械的だったとしても、何かを一からつくった経験があると、「もの」に愛着がわいてくるのです。こういう感情は、言葉で説明しても納得しにくいものかもしれませんが、これこそ「ものづくりの心」だと、私は思っています。

こうして考えると、今までより何倍も「もの」が愛おしくなり、大切にしよう、と思えてくる私です。



中学校の部 優秀賞

笑顔を見て

品川区立浜川中学校 三年

草野里美

私は、よく地域のボランティア活動に参加しています。

私がボランティア活動を始めようとしたきっかけは、友達に誘われて面白そうだと思ったからです。最初は、遊び気分で参加していましたが、その時参加したお祭りのボランティアは、地域の文化センターでやるというものでした。私は、体育館でやるゲームの担当になりました。季節は夏で、もちろんクーラーなどなく、すごく蒸し暑くて、来たばかりだというのに、すぐに帰りたくなってしまいました。でも、ボランティアをしている保護者の方たちはみんな笑顔で、大して働いてもいけないのに弱音を吐くのは早いと思いました。そして、私はボランティアの手伝いに来ているのだから、もっと率先して働こうと思いました。

気持ちを切り替えて働くと、余裕をもてるようになり、周りを見ることもできました。一生懸命働いて、今まで気づかなかったことも見えるようになりました。それは、お祭りに来てくれた子ども達の笑顔です。私は、景品係をしていたのですが、ゲームを遊び終えた子ども達が私の前に来て、私が景品を渡す時、みんな笑顔で景品を受け取り、そして一言「ありがとう」と言って帰って行くのです。その時、私はボラン

ティアに参加してよかったと思いました。その言葉を聞くと、さっきまでのつらい気持ちがあうように吹き飛び、「よし、この先も頑張ろう」と、元気が出てきました。

お祭りが終わり、保護者の方々が最後に、「今日はお疲れ様でした」と言ってくれて、好きで自分は参加しているのに、お礼まで言われるなんて少し恥ずかしいような気持ちになりました。最初は、あまり楽しくないと思っていましたが、終わると何ともいえない達成感を得られ、参加して本当によかったと思いました。そこで初めて、朝の暑くて大変な中でも、保護者の方々が笑顔でいられた理由が分かりました。

ボランティア活動は、大変な部分もたくさんあるけれど、終わった後の達成感や感動、そして来てくれたお客さんがみんな笑顔になると、自分達も自然に笑顔になれるので、私は参加して本当によかったと思いました。

私は、将来の夢やなりたい職業がありませんでした。そんな時に、このボランティア活動のことを思い出しました。誰かのために働いて、その人が笑顔になったり、喜んでくれると、私もやった甲斐があったなと思えるような職業に就きたいと思いました。

それは、看護師です。看護師は、とても大変な職業だと思います。患者さんがいて、その人の病気や怪我を治すというのは命に関わることなので怖いのです。でも、病気が治った時に、患者さんに喜んでもらえるのと、とても嬉しいと思うし、やってよかったと思えるので、とてもやりがいのある職業だと思います。

私の母が以前入院した時に、その病院の看護師がとても献

身的に看病してくださったようで、母は快適に過ごせたので、私はその病院の看護師にとっても感謝しています。だから、私も誰かから感謝されるような看護師になりたいと思いました。看護師になるためには、看護専門学校や看護大学等で看護師になるための課程教育を受けた後、国家試験等の資格試験に合格しなければ看護師免許を取得できません。だから、私は今からしっかり勉強しなければいけないと、改めて知りました。

私が看護師になりたいと思ったのは、もう一つ理由があります。それは、日本に医療や介護を必要とする高齢者が多いことです。

日本は今、少子高齢化社会で比較的看護師になる割合は増えているけれど、高度な医療を提供したり、介護などに必要な看護師が不足していたりするので、少しでも力になりたいと思ったからです。

私一人が頑張ったところで、この看護師不足が解消されるわけではないけれど、少しでもプラスになればいいと思っています。

私は、地域のボランティア活動を始めて、将来の夢を見つけれられ、そして、今の看護師がどのような状況なのか少しでも分かったのでよかったです。でも、第一は、日本に少しでも笑顔を増やせたらいいと思っています。



共生

大田区立馬込中学校 三年

内田 菜 摘

『高齢化社会』最近、ニュースでよく聞く言葉です。三年生になって社会科でも、この言葉を習いました。しかし、実際にお年よりの方を多く目にするということは、あまりありませんでした。それは、私たちが普段高齢者の方々と接する機会がなかったからです。

今回の職場体験で、私がお世話になったところは『デイケアセンター』といって高齢者の方で、一人歩行が困難な方が、朝から夕方まで、お風呂に入ったり、体の運動を高める機能訓練をしたり、昼食をとったりする場所です。行き帰りは車の送迎があります。

私が今回の職場体験で得たことは、世の中の社会事情を実際に肌で感じる事ができたこと、人との交流の大切さを学ぶことができたことです。

今まで、私は福祉に関する知識がほとんどありませんでした。今、注目されている『高齢化社会』にも興味がありませんでした。しかし、職場に行くと初めに感じたことは、高齢者が多いということでした。施設内に入れる利用者の定員が三十六名なのに対し毎日、三十三から三十六名の方々が利用している状態でした。一つの机に六名がけで座り、施設も小さいので正直、窮屈そうに思えました。利用者の方々の会話を耳を貸すと、「人数が定員いっぱいだから、どこか別の施設に移されてしまう。」といった声も聞こえました。

朝の通勤中にも『高齢化社会』を感じる事がありませんでした。デイケアサービスでは車で送迎するところがほとんどです。朝歩いていると、デイケアサービスと車体に書かれた車がバスと同じくらいの割合で走っているのを見て驚きました。高齢者が増えていること、介護が必要とされていることを深く感じました。

私が特に印象に残ったことは、働く人々が笑顔で優しいことと、利用者の高齢者の方が前向きなことです。職場で働く方々は、利用者の方に優しいのはもちろんですが、とてもフレンドリーな感じで家族のような雰囲気です。冗談を言って笑わせていました。施設内は心地よくアットホームでした。すると自然と利用者の方も優しい気持ちになるのでしょうか。高齢者の方は、生き生きして前向きなように感じました。午後のレクでは、みなさんニコニコしながら楽しそうに過ごしていて、私は元気をもらいました。

デイケアに来る方は、歩くことが困難な人や家族が昼間にいない人なので、日頃人と接することが少なくなりがちです。にぎやかな大家族のような施設の空間は、利用者の方にとって、笑顔でいられるところで利用者の方から笑顔をもらって、職場の方にとっても大切なお仕事だと思えました。私も職場にいる時は、利用者の方の孫のような気持ちでした。

職場の方が、
「ここにいると、おおらかなおじいちゃん、おばあちゃんばかりだから、優しい気持ちになれるんだよ。」
と言っていました。

「大勢で机を囲んでご飯を食べると、おいしいのよね、毎回ここへ来るのを楽しみにしているの。」

と利用者のおばあちゃんが話してくれました。

お互いが、人との交流の中で、明るく前向きな気持ちになれたり、楽しい気持ちになれることは、とてもいいことだし、大切なことだと思いました。たくさんの方が住む、この世界、日本、地域で、人との交流が無くなれば、孤立してしまう人がでて、助け合いの輪が崩れてしまうと思います。

日本は世界最高水準の長寿国であり、今後は少子化が進み、西暦二〇二五年には国民の三人に一人が高齢者という、世界に例をみない「高齢化社会」になろうとしています。

みんなが暮らしやすい社会にするために、人との心の関わりを大切にして、支えあいながら共生できたらいいと思います。

職場体験を通して、人の温かさを改めて感じることができ、社会の様々なことに興味が持てるようになったことを感謝しています。



未来をつくる技術家庭

練馬区立石神井中学校 三年

日原雪恵

「技術家庭？」

一年生のころ、初めての時間割表を見て、思わずつぶやいた一言です。英語は入学前から注目していたし、美術や数学は名称が変わっただけだし……。そんな中で、「技術家庭」だけはどんな授業か想像できませんでした。家庭は小学校の家庭科のことかな？ 技術って何のことで、どんな授業をするんだろう？ 分からないことばかりで、初めての授業が楽しみでも不安でもありました。今考えるとすごく昔のことのようですが、当時はとても緊張していたのを覚えています。

さて、そんな危ないスタートを切った私でしたが、この二年間と少しの授業を通して学んだことはたくさんあります。

例えば、料理です。私は不器用なので、料理は全然できませんし、買い物に行ったりする機会もほとんどありませんでした。しかし、魚の鮮度の見分け方や美味しいみそ汁の作り方など、二年間で様々なことを学びました。こういうことを考えて毎日食事を作っているのかと、両親を改めて尊敬しました。突然料理の腕が上がったわけではないけれど、習ったことを生かして、少しずつでも手伝いをしていこうと思っています。

技術科では、パソコンの基本的な作業についてや木材加工、金属加工をやりました。その中で一番楽しく、興味深かつ

たのがパソコンの使い方でした。私は機械を使うのが苦手
で、パソコンはあまり使ったことがありませんでした。け
れど、基礎をゲーム等を通じて楽しく学習していくうちに、自
分でももっと色々なことをしてみたいと思うようになりまし
た。まだまだ分からないことばかりですが、パソコンを上手
く使って、学習に役立てられるようになりたいです。

私が今まで技術家庭を学んできて感じたのは、技術家庭は
日常生活に役立つ、身近な科目だということです。例えば、
数学や理科はその考え方を使うことはあっても、直接日常生
活に出てくることはほとんどありません。それらに比べて、
技術家庭は習ったことをどんどん普段の生活に生かすこと
のできる科目だと思います。

技術科なら、パソコンの使い方や学ぶことで、分からない
ことをすぐに調べられたり、メールで情報交換をしたりする
ことができます。又、身の回りの製品のルーツを知ること
で、直したり再利用を工夫したりもできるようになります。

家庭科はさらに身近です。服を買ったり、直したりする
ときや、料理をするとき等、かなり頻繁に日常生活に登場し
ます。「高校に行ったら、当番を決めて二人分お弁当作るん
だよ。」と、以前母に言われました。お弁当作りは、簡単
なようで難しいものです。栄養のバランスや見た目の色ど
り、冷めてもおいしいかどうか等、考えなくてはならな
いことがたくさんあります。けれど、一年生のころ習った
献立のたて方や、二年生で習った地域の食材や食文化に
ついての知識を活用して、おいしいお弁当が作れるよう
に頑張りたいです。

技術家庭は生活をつくる科目です。テストで満点でも、日

常生活に生かせなければ、宝の持ち腐れになってしま
います。習ったことをどう使うかで、私達の暮らしは
大きく変わってくるでしょう。どうすれば有意義に
使えるのかを考えていきたいです。

そして、忘れてはならないのが「未来をつくる」とい
うことです。今、地球温暖化やゴミ問題等、様々な環
境問題が起こっています。そのほとんどの原因は私
達人間です。どうしてそんなことが起きてしまっ
たのか……。それは、これまでの人間が豊かな生
活に慣れすぎて、物を大切にしなかったからでは
ないでしょうか。モントリオール議定書や京都議
定書など、近年、世界全体がやっと環境問題を何
とかしようとして取り組み始めています。しかし、
一人一人が意識を変えていかなければ、解決は困
難でしょう。そのために、技術家庭をしっかりと
学ぶことが大切です。技術家庭の教科書にはよく
「環境」というマークがでてきます。その内容は
大抵身近で、簡単なことです。しかし、そのよう
な小さなことを本当に実行している人は、はたし
てどのくらいいるのでしょうか。「面倒くさい」
や「別に私一人ぐらいやらなくても平気」では
なく、一人一人が、未来をつくるのは自分だとい
う自覚をもって行動するべきです。

私達の今の豊かな生活は、これまでの人々が努
力して作り上げた技術によって支えられていま
す。それならば、これからは私達が未来を築
いて、後の世代へとつなげる必要があるのでは
ないでしょうか。

今を楽しみ、豊かに生きるためにも、未来を
しっかりと築いていくためにも、私達は今
自分にできることをしっかりとや

らなくてはなりません。今、私達にできることは、正しい知識を身につけるためにしっかり学び、学んだことを生かして行動することだと思えます。「技術家庭」の学習を通して、学んだことや考えたことを実行してみる。それが、私達にできる最も大きなことではないでしょうか。

これからも、積極的に学び、行動していこうと思います。そして、「未来」をつくれる人になりたいです。



職場体験

葛飾区立立石中学校 三年

川端友梨亜

私は二年の夏に、未来に向けて働く喜びや社会の厳しさなどが少しでも分かるようにと、いわゆる「職場体験」という形で働きに行きました。私たちの前の学年までは、一日きりの体験だったらしいのですが、私たちの学年からは一週間に増えました。挨拶や打ち合わせを含んでいるため、実際に勤務したのは三日間だけでしたが、とても貴重な体験となりました。

私の勤務先は介護関係のところでした。そこは、「訪問看護」と「デイサービス」というものを両方やっている職場でした

が、私たちの仕事内容は、「訪問看護」に重点が置かれていました。

仕事、と書きましたが、介護はお店やコンビニなどで商品を売ったり並べたりと、誰でもできる、といった類のものではないので、訪問先について行って、見学をさせてもらいました。見学へ行く時は、伺うお家一件につき生徒一人という形で行ったので、初日はとても不安でしたが、連れて行って下さる看護師さんや、理学療法士さんが、仕事について色々話して下さったので、とても勉強になりました。そもそも私は、「訪問看護」という仕事があることすら知りませんでしたし、理学療法士なんて聞いたこともなく、どういう仕事をしているのか全く見当が付きませんでした。けれど、仕事場に行く途中にそういった説明も聞くことができ、また、その後実際に現場を見ることができたので、大体理解することができました。

訪問看護をお願いしている患者さんは、やはり自分一人では病院などに行けない方で、私が見た中だけでも色々な方がいました。大体はもう一人では歩けないため、足がとてむくんでしまっていました。それを、マッサージしてあげたり、一緒にリハビリをしたりするのが理学療法士さんです。主に見ているだけの私も時々声をかけてもらって、患者さんのむくんでしまった足を実際に触らせてもらったり、歩行器具をつけて家の周りを歩く患者さんのリハビリなどの手伝いをさせていただきました。また、看護師さんについていた時は、患者さんの入浴を見学することができました。全ての場面を通じて気付いたのは、理学療法士さんや看護師さんは、患者

さんに愛情を持って接していたことです。どんな些細なことにも気を配って、優しく笑顔で話しかけ、そして一生懸命働いていました。そういえば、私は初めての出勤日に職員の方から、

「あなた達の一番の仕事は、笑顔でいることよ。」

と言われて、少しきよとんとしていたら、

「若い子達の笑顔を見るだけで、お年寄りの方たちは元気がもらえるから。」

と言ってくれました。「訪問看護」の患者さんには、話すことが難しい方もわりといたのですが、「デイサービス」に来ていた方たちは、本当にみんな楽しそうにお話をしてくれました。その時の私は、大した仕事をしていないにも関わらず、やりがいを感じました。自分達の今の暮らしを作り上げてきてくれた方々のために誠心誠意働くこの仕事は、とても重要であると同時に、こいこい仕事だな、と思いました。

患者さんのお家へ向かう途中で、

「どうして、この職場に体験しに来たの？」

と聞かれましたが、私は将来の夢などが全然決まっていなかったため、たまたまで少し申し訳なくなりました。しかし、職場体験を通じて、働くことの喜びなどを学ぶことができたので、これからじっくりと自分が本当にやりたい仕事を探していきたいと思います。そして、将来大人になった時には、どんな形でも、人の役に立つ仕事、そして自分がやりがいを思い出し誇りを持てる仕事をしたいです。社会人として、労働の義務を果たし、次の世代へ少しでもよい未来を築いていけたら最高の人生を送ることができると思います。

十三才の私に出来る子育て支援

中央区立晴海中学校 二年

荒 木 萌 々

私は今年の四月、十三才で叔母さんになりました。十二才違いの兄のところの子供が産まれたからです。その時初めて産まれたばかりの赤ちゃんを抱っこしたのですが、柔らかくて、小さくて、可愛くて、毎日でも家にいてほしいと思いましたが。それから私は、赤ちゃんが大好きになりました。

それと前後して、母は中央区のファミリーサポートセンターの子供を預かる活動を始めました。これは地域の子育て支援の、相互援助活動です。

時々家で子供を預かることになり、学校から帰ると赤ちゃんがいることもありました。それが嬉しくて、赤ちゃんを家で預かる日は早く学校から帰りたくてたまりませんでした。

夏休みに入って、朝から長い時間赤ちゃんを預かることもありました。私は母の手伝いで赤ちゃんの世話をしたり、一緒に遊んだりしました。ある時、部活から帰ってきて次の日のプールの支度をしていたら、プールカードがボールペンでいたずら書きされていました。学校に提出するものだったので、いくら赤ちゃんが書いたとはいえ腹が立った私は、母に「なんで私の部屋に赤ちゃん入れるのよ。プールカードが汚なくなっちゃったじゃん。」

と文句を言ったりもしました。

それから段々、赤ちゃんが思い通りにならないということ

がわかってきました。小さい赤ちゃんはミルクをあげても、オムツを替えても泣きやまないことがあるし、大きい子は目を離すと台所で勝手にお釜を開けたり、パソコンをいじったり、電話のボタンを押してどこかにかけてしまいます。口で言って聞いてくれるわけもなく、想像以上のいたずらに疲れてしまいました。結局、母の手伝いをする口で言っておきながら、赤ちゃんより先に寝てしまうという始末です。

子育てがこんなに大変なのかということ、身を持って知ることが出来たのはとても良かったと思います。一時間、二時間だけでもこれだけ疲れるのだから、自分がお母さんになつたらどうなるのか想像するだけでも怖いのです。

それと同時に、私たち三人の兄弟を育てあげた母の偉大さを痛感しました。

私は、二人の兄と年齢が大きく離れています。だから、私の赤ちゃんの頃は兄たちが風呂に入れてくれたり、おむつを替えてくれたり、私の面倒をよく見てくれたそうです。でも末っ子で育った私は、あまり小さい子とふれあう機会がありませんでした。だから、これからは先日産まれたばかりの甥の世話を進んで行い、兄夫婦にお返しが出来たら、と考えています。

「将来は何になりたいの。」

とよく聞かれます。今の私はその質問に対して胸を張って、

「保育士や幼稚園の先生になりたい」

と答える自信はありません。でも、やってみたい職業の一つになったことは確かです。

赤ちゃんとのふれあいを通じて、人間はたくさんの人に助

けられて成長していくことが改めてわかりました。だから私も誰かの成長の手助けをする一人になれたらいいなと強く思っています。

今、社会問題になっている少子化、産科医、小児科医不足などは、国の子育て支援が十分にいきわたっていないから、というのも理由の一つではないかと思えます。そういった問題は、私たちが何かをして大きく変化することはないでしょうが、少しでも楽に子育てがしやすくなるようお手伝いなら出来ます。

例えば、バスや電車の中で子連れの人を見かけたら席をゆずったり、荷物を持ってあげる。遅くまで外で小さい子が遊んでいたら、

「一緒に帰ろうね。」

と声をかけてあげる。ものすごく小さい事だけど、そういう小さいことから始めていくことが、私たちに出来る子育て支援の第一歩ではないかと思えます。

私が将来お母さんとなって子育てするころまでには、子育てのしやすい社会になっていてほしいです。



中学校の部 佳作

貴重な体験、パン屋さんでの三日間

新宿区立西戸山中学校 三年

萩原晴菜

初めての職場体験。パン屋さんでは、一体どのような仕事を任せてもらえるのか、お店の人の足でまといになっただろうしようと、前の晩、少し不安になりました。そして、当日、緊張して扉を開けると、焼きたてのパンの香りが店いっぱいに広がって、なんだか気持ちほぐれていきました。店長さんは忙しそうでしたが、はじめにいろいろと説明してくれました。見回すと、みんなきびきびと動いています。

私をはじめに任されたのは、拭き仕事です。トレーやトンダなどをよく拭いて、消毒しました。少しでも、汚れがついていたり、パンくずが付いていたらやり直しです。さすがに食べ物を扱っているだけあって、そのお店は衛生面には特に気を配っていました。店の隅々まで掃除されていて、お客さんが目にしないところまできれいにしてありました。それを見て、私も気が引き締まりました。小さな仕事かもしれませんが、私にとっては初めて任された仕事です。食べ物を売っているお店で働いているんだ、という自覚を持って丁寧に行おうと思いました。その後、焼きあがったパンを、袋に入れたり、ラップで包んだり、いろいろな仕事をさせてもらいました。お店の人が一生懸命焼いたパンなので、落としたり、

つぶしたりしないよう、細心の注意を払うことが必要でした。そして、中でも一番大変だったのは、長く焼いたパンを半分に切ることです。切った表面がでこぼこになっていたり、形がくずれてしまうと売り物にならないからです。そんなプレッシャーをかかえながら、パンにすーっとナイフを入れた時は、思わず「あっ。」と声をあげてしまいました。恐る恐る切り口を見てみると、思ったよりきれいに切れていたの、ほっとしました。お店の人も「全然大丈夫。上手だよ！」と声をかけてくれました。今になって考えてみれば、私たちに少しでも多くの体験をさせてあげよう、という配慮があったからに違いありません。また、こうして人材を育てているのだと思いました。

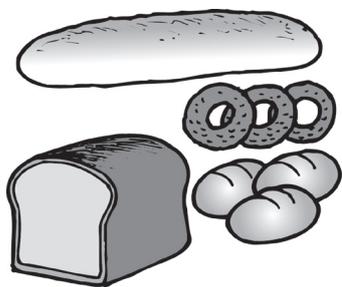
最初のうちは、何から何まで初めてのことばかりで、教えてもらったり、注意されたりとなかなか思うようにはできませんでした。しかし、そんな時でも分かりやすく指導して頂き、だんだんとコツがつかめてくるようになりました。

そしてもう一つ、試作品を味見するという貴重な体験もできました。お店は常に、よりおいしいものを追求して、日々勉強しながら新しいもの作りに取り組んでいるのです。今まで気軽に食べていたパンですが、店頭に並ぶまでには、いろいろな工夫や研究があって出来るものだとよく分かりました。満足のできるパンが作れた時、その達成感はとても大きなものだと思います。お客さんにおいしいと言われたら、なおさらのことではないでしょうか。

私もこの職場体験で、お客さんに声をかけて頂くということがあります。レジの横で一生懸命にパンを詰めていた時

のことです。夢中でその作業をしていたので、分からなかったのですが、お客さんは私を見ていたのでしょう。「体験学習なの？大変そうね。がんばってね。」と声をかけてくれたのです。恥ずかしいような、照れくさいような気がしましたが、とても嬉しく思いました。

私は、たったの三日でしたが、この職場体験で働くことの大変さと、楽しさを感じました。学んだことも、いろいろとありました。それは、小さな事でも真剣に取り組むこと、常に向上心を持って仕事をすることです。社会に出ても、はじめから自分のやりたいことはできないかもしれないかもしれません。まずはどんな仕事でも、与えられたら完全にやりとげる。信頼され、評価されてこそ、最終的に大きな仕事を任されるのではないのでしょうか。また、現状に甘えることなく、学ぶ姿勢を忘れないでいることも大切です。これから先、どんな仕事についても、それだけは心に刻んで取り組んでいきたいと思えます。



技術・家庭科の授業で学んだ事

新宿区立西戸山中学校 三年

羽 角 和 菜

私が技術・家庭科の授業を通して学んだ事、それは、物の大切さだと思う。

今、私達の生活には物があふれていて、必要なものがあれば簡単に手に入れる事ができる。スーパーマーケットやコンビニエンスストア、実際にお店まで足を運ばなくても、ネット通販などを使ってでも買う事ができてしまうほどに便利な世の中になった。だから、何か必要な物がある時、たとえそれが自分で作れるものであっても「自分で作る」という選択肢を選ぶ人は、少ないと思う。それ以前に、これを選択肢の一つとして考える人が少ないかもしれない。そう思えるくらいに簡単に必要な物が手に入る便利な世の中になったと思う。便利なのはいい事だけれど、簡単に手に入れられる分、物を大切に扱つかわれない人が多い気がする。もし、壊れてしまってもまた新しいのを買えばいい、そんな風に考えてしまっていないでしょうか。私は、そう思っていたし、そこには自分で直してみる、という考えはなかった。けど、そんな物のあつかいをしてしまっている私にも、大切にあつかって、何度も直して使っている物がある。それは、人にもらった物と、自分で作ったものだ。自分で買ったものとは違って、人からもらったものは、その人が自分の為を選んでくれたものだから、と大切にしようと思える。それから、自分で作ったもの、自

分で作った物には、一つ一つエピソードがある。中でも、中一の時に編んだマフラーは、今でも気に入って使っている。このマフラーは選択授業の家庭科で作ったもので、生まれて初めて棒編みで編んだマフラーだった。悩んで迷って決めた大好きな毛糸を使い、友だちと一緒に先生に教えてもらって一生懸命編んだのを覚えている。作っている間の思い出がある分他の物よりも愛着があって、大事にしてきた。普段の生活でものづくりをしなくても、授業で一つものを作るだけでも、少しものに対して大切にしようと思えてくる。

もう一つもの作りの授業で印象に残っているものがある。それは、中二の時の技術の時間で、小さな本棚を作った時だった。それまでの、私のもの作りのイメージは、どちらかというと裁縫や編み物のような家庭科のようなイメージが強かったので本棚を作る、という事は考えた事もなかった。私にとつての本棚は、買ってくるものでしかなくて、私みたいな人が作れる物という意識がなかった分、作るといわれた時は驚いたし、本当にできるか不安だった。でも、先生の説明通りに作業を進め、設計図を書く事から始まり、ニスを塗って終わるまで、本当に最初から最後まで自分で本棚を作った。最初は不安な気持ちで作業をしていたけど、形ができてくるにつれて楽しくなってきた。完成した時はちょっと感動した。少しゆがんでいて、上手に出来たとは言えないけど嬉しかった。今まで買っていたものだったから、どんな風に作られていたのかとか、どんなもので作られていたのかなんて知らなかったし、知ろうと思った事がなかった。でも、授業で実際に作って出来るまでの事を知って、一つ作るのにも大変

な作業だったんだなあ、そんな事を考えるともう少し大事にしようと思えた。私は勝手に本棚は買うものだと思っていた。けれど一生懸命がんばれば作れるものだった。もしかしたら、自分の手で作れないものなどないんじゃないか、そう思えた。小さくていびつだけど本棚を作ってる間、ものづくりの楽しさと大切さを少し学べた。

一つ一つの授業で学ぶ事や思う事は少ない。だけど、授業を受けただけ、ものを作っただけ、ものに対して学ぶ事が、思う事が増えてくる。ある授業では、生活の中でのものの役割を知って、別の授業ではものの構造を知った。そうやってものについて少しずつ知っていく、思い、感じていく事で物の大切さを理解していく。技術・家庭科の授業ってそういうものだと私は思う。今の私達は、ものなしじゃきつとうまく生きていけない。だから、いくらでも代わりのものがある中で、一つ一つのを大切にしよう、そう思う事が大切なんだ。私は、技術・家庭科の授業でその事を学んだ。



パジャマづくりを通して学んだこと

新宿区立西戸山中学校 三年

後 藤 裕 子

私は、選択家庭科の授業で、パジャマをつくりました。選択家庭科でパジャマをつくると聞いたとき、私が最初に思ったのは、「私には無理だ」ということです。なぜなら、普段の家庭科の授業で、ミシンを使って簡単なエプロンをつくったことはありましたが、服をつくったことは、それまでに一度もなかったからです。それに、ミシンを使うのも、あまり得意ではありませんでした。また、裁縫に限らず、ものをつくるといふことに対して、苦手意識がありました。だから、授業がはじまったときは、不安な気持ちでいっぱいでした。

そしてやはり、パジャマづくりは苦労の連続でした。

パジャマのデザインを考えるとところからはじまり、採寸、しるしつけ、裁断と、いきなりはじめてのことばかりで、とても戸惑いました。また、布を縫う前の段階で、こんなにくさんの作業があるなんて、全く知りませんでした。

その後のミシンで縫う作業も、それまでにつくったことがあるものとは違う点が多く、すごく苦戦しました。

布のサイズは大きく、形は曲線もあり、複雑でした。一度に縫う長さも長く、緊張が続き、簡単な直線の部分でもずれてしまったり、しわがよってしまったりしました。また、別々の布を重ねて縫うということも、エプロンをつくったときにはない作業でした。重ねて縫う作業の中でも、パジャマを立

体的にするために、縫う部分の形が違う布を合わせて縫うという作業が、一番、エプロンとの違いを感じ、一番難しいと思いました。

他にも、はじめて使う道具もあり、完成するまでには、とても長い時間がかかりました。そして、その間に数え切れないほどの失敗をしました。

でも、途中であきらめることなく、最後までやりきることができました。苦労することは、もちろん多いのですが、それ以上に、うれしいことがたくさんあるからです。

最初のうちは上手にできないことや、時間がかかっていたことでも、何度も繰り返しやっていると、少しずつうまくなったり、手早くできるようになります。すると、その作業をすることが、楽しくなりました。作業が進み、パジャマの形ができてくると、自分でもつくれるのだ、という実感がわきました。失敗したことも、自分でもなんとか修正できると、うれしいことに変わります。そして、ついに完成したときは、今までにない達成感を得ることができました。この達成感は、完成するまでに、色々な苦労や多くの失敗があり、それをのりこえたからこそ、大きなものになるのだと思います。これは、実際にパジャマをつくらなければ、わかりませんでした。

また、エプロンをつくったときは、達成感をあまり感じなかったのは、自分から挑戦するという気持ちになかったからだだと思います。それに対し、今回のパジャマづくりは、自分で授業を選択することで、自分から挑戦するということを強く意識することができました。

私が今までつくることが苦手だと思っていたのは、そう思

い込んで、何にも挑戦していなかったからだと思います。パジャマをつくることは、このことに気付くきっかけにもなりました。だから、パジャマづくりを体験できて、本当によかったと思います。

私は今、家庭科の授業で、保育について、学んでいます。その中で、幼児のおもちゃをつくることになりました。そこで私は、着せ替え人形をつくっています。これをつくることにしたのは、やはり、パジャマをつくったことの影響が大きいです。つくる服のサイズは小さくなりますが、基本的なつくり方や手順などは同じです。だから、パジャマをつくった経験を生かすことができる場面が、たくさんあります。

つくるものが小さいということで、本物の人が着るものをつくるのは、また違った難しさや苦労があります。しかし、それには、今までとは違った喜びや楽しさ、そして達成感がついできます。

パジャマづくりに挑戦したことで、ものをつくることの良い部分を多く学ぶことができました。だから、これからは、裁縫以外のことにも挑戦して、色々な喜びや達成感に出会いたいと思います。



物づくりから学んだこと

新宿区立西戸山中学校 三年

林 礼 奈

私達は、沢山の物に囲まれて暮らしています。私は中学校に入るまで、できあがっている物を使うことがあたりまえだと思っていました。しかし、中学生になり技術や家庭の授業で物づくりについて学び、実際に物をつくることで物や物づくりへの考えが変わりました。また、それによって多くを学びました。

技術ではペン立てやラジオを、家庭ではファイルカバーやエプロンをつくりました。どれも身近な物なので、つくることはそう難しくないだろうと思っていました。しかし、それは大きな間違いでした。材料の長さを測り、切断し、つなぎ合わせたりとそれぞれが細かく、大変な作業でした。しかし、大変だからと言って手を抜いてしまうとすぐ使えなくなってしまうたり、壊れてしまいます。物づくりとは一つ一つの作業がとても大切で、何か一つでも手抜きがあると結果に出てしまうほど正直で、努力と根気が必要なものなのだと思います。まるで、日頃の勉強とテストのようだとも思いました。

苦労した甲斐あって、素敵な物ができました。売っている物のように正確な美しさは無いのですが、どこか温かい雰囲気や味のある物ができました。それが、手づくりの良いところだと私は思います。

つくっている時に、ふと思ったことがあります。それは、

少し先の未来の私が、そのつくっている物を大事に使い、つくって良かったと思いたいということ。きつと、そういう気持ちで物が温かさや趣を与えるのだらうなと思いました。また、誰かに贈るものをつくる時、相手が喜んでくれるといいなと心から思うことでより良い物ができるし、相手ももらった時に感動を与えることができるのだと思います。やはりもらった方も手づくりだと、とても嬉しいだろうし、その物に込められた思いを感じとり、喜びや感謝の思いを強くすることができるとは思いません。それが、手づくりの一番良いところではないかと私は思います。また、物づくりとはこんなにも奥が深いものだと気が付きました。

昔は何もかもが手づくりで、温かさがあふれる物に囲まれていたことだと思います。しかし今は、大量生産が主流です。そのため、物に温かさや趣が無いように私は思います。大量生産では人の手ではなく、機械で行われています。なので手づくりの温かさや込められた思いなどは一切ありません。そのためなのか、物を使う人々に物を大切にしようという思いが見られないような気がします。

現代では、物が簡単に、大量につくることができてしまっています。沢山の物に囲まれているうちに、物の大切さを見失ってしまっただかと思えます。思いや温かさの無い物には大切にしようとする思いが生まれないのだと思います。私自身もそうですし、多分、ほとんどの人があてはまることだと思います。

何故、物を大切にできないのか考えてみました。まず、一つ目に手間がかかっていないからではないかと考えました。

手づくりでは長い時間をかけ、一つの物を丁寧に丁寧に仕上げます。しかし、機械では短い時間で大量に色も型も同じ物ができてしまいます。やはり人が一生懸命つくったものならば、その苦勞を思いやり、大切に使用して行こうと思いません。ですが機械でつくられた物にそんな苦勞はありません。だから粗末に扱うことに何の抵抗も無いのではないのでしょうか。

二つ目は、いくらでも代えがあるからだだと思います。先程も言ったように、同じ物がいくつもあるため壊れたりしても代えることができます。昔の人々はそう簡単に物を代えることができなかったため、修理をして大切にしていました。現代では物が沢山あり過ぎるから大切にできないのだと思います。私にはそれがとても悲しいことに感じられます。

それどころか、物を大切にしないために環境破壊を引き起こしています。本当は、この大量生産と大量の消費やそれに伴う廃棄を無くすべきだと思います。しかし、一度楽をし、それを覚えてしまった人間は大変な方へは戻りません。

物づくりの様々な技術や知識を学んで、物に対する思いがこんなにも多くの問題に影響しているということに気が付きました。それらをふまえ、私達がこれからやって行かなければならないことは、物づくりとうまくつき合っていく事だと思えます。そのためには物を大事に使い、一つ一つの物に感謝の念を抱くことが大切なのだと思いました。

物づくりを通して、こんなにも大切なことに気付けたということ、私がこれから歩む人生に大きな影響をもたらしたと思えます。物づくりを学ぶことができて、本当に良かった

です。

将来の夢に向かって

文京区立第八中学校 二年

伊東沙都美

私の将来の夢は、警察官になることです。なぜかというところ、小さい頃から、人を助けることに、憧れの思いがあるからです。幼稚園のときからこの夢を持ち、剣道を始め、テレビで見たり、本を読んでいくうちに、これだけ本気になれる夢は無いと自分の中で思いました。

小学一年生のとき、テレビで警察官の本気の顔を見て、「すごい！」と心をうたれると同時に、「これだ、私の夢は！」と感じ、圧倒されました。また、仕事のときはまじめに、遊びは笑顔で、このような区別ができる、そんなところが「かっこいい」と感じました。今まで、人の役に立てるような職業につきたいと夢を描いてきました。

そこで、今回の職場体験で、自分の夢に一步でも近づけるよう、少し警察官とは違いますが、一本堂千駄木店での体験を希望しました。大人とのアポイントメントの取り方や対応など、初めてのことが多く、とても緊張しました。でも、自分の夢を実現にする為には、その職業を見てみたい、やってみたい、多くの人と関わってみたいという思いのほうが強くなっていました。そのため、私の緊張した思いも、やる気に

大きく変わっていきました。

私が、一本堂千駄木店で体験させてもらった仕事は、二つあります。一つ目は、品だし。内容は、送られてきた品物を出す仕事です。二つ目は、袋づめです。内容は、レジの横に立って、品物を袋につめる仕事です。その二つの仕事で、私が一番印象に残っていることがあります。それは、袋づめの仕事です。一見簡単な仕事だと思われがちですが、やってみるととても難しく大変です。一つ一つ丁寧にやり、なるべく四角形になるよう、気をつけながらやりました、そして、一番大変だったのは、「挨拶」です。なかなか声が出ず、何でこんなにも、声が出ないのかと、自分を責めました。そんな、声が出ない私に、店長さんが言ってくれた言葉があります。それは、「少しずつで良いから、挨拶をすれば、お客様は私達を信頼して、お店に来てくれる。」こんな言葉を聞いてその通りだなと思いました。それから、少しずつですが、挨拶ができるようになってきました。この言葉が無ければ、このまま挨拶は、できなかつたと思います。だから、体験学習が終わった今でも、このことは、一番の思い出として、心の中に残っています。

体験学習が終わってから、徐々に自分の変化に気づきました。今までは、初対面の人に対して、笑顔で話したり、接したりすることががなく、人見知りをしてしまったり、言葉をかけることが恥ずかしかったりして、人との関係がつかれないでいました。でも、短い日数ではありましたが、今回の体験学習を通して、お客様と話したり、接したりすることで、笑顔で接している自分に気づきました。また、コミュニケーション

ンの大切さにも気づきました。人と話をするのが苦手な私でしたが、体験学習の終わった今では、自分からいろんな人に話をするようになりました。コミュニケーションのおかげで、人との関係を前以上に、たくさんつくることができるようになったと思います。

この体験を通して私がやりたいことは、自分の将来の夢に向かって、知識を高めていき、でも、一番大切なことは、自分も人と関わることと積極的にになり、表情豊かに、コミュニケーションをとることだと思います。これからの中学校生活の中で、笑顔で挨拶することと、人との会話を大切にすることをしていきたいです。後は、地域で行っている様々なボランティア活動にも、積極的に参加していきたいと思えます。

様々な人と関わりを持ち、ふれあい、私の心を豊かにしていき、そうすることによって、相手に対して心から優しく接していけると思います。

今回、このような、体験ができ、一步将来に近づけたのではないかと思います。そして将来の夢の実現を目指して、これからがんばっていききたいと思えます。



働く大変さと喜び

墨田区立両国中学校 三年

青木亮哉

七月十八日と十九日の二日間夏祭りの手伝いをしました。母の実家は、おじいちゃん、おばあちゃん、卓司叔父さんで、酒屋さんをしています。夏祭りは商店街の人たちみんなが、焼きそば、たこ焼き、金魚すくい、そのほかたくさんのお店を出してやります。あわ踊りの人たちが来たり、カラオケ大会があったり、とても大勢の人が来て盛大に行われます。だから準備も大変です。

うちでは、生ビールとラムネを売ります。ぼくはいとこ達と一緒に、ラムネを売るように、卓司叔父さんに言われました。夏祭りが始まる何時間も前から、準備を始めなくてはなりません。生ビールの樽やラムネは、前の日から大きな冷蔵庫に入れて冷やしておきます。それを、お店の前に置いた大きなケースに氷といっしょに入れて、売る準備をします。母と父も、生ビールの機械をセットしたり、紙コップやつり銭を用意したり、準備は皆でするのですが、やるのがたくさんあって時間がかかります。

夏祭りが始まるとすぐに、たくさんのお客さんが来ます。ぼくと、いとこが手伝っているラムネのところには、中学生や小学生や小さな子供達がいっぱい買いに来てくれます。お店の手伝いをする時、いつも母はこう言います。「相手が子供でもお客様なのだから、ちゃんとした言葉遣いで、そして、

ありがとうございます。と言っていました。あと
言われる事は、「お金を受け取る時は忙しい時でも、お金を
取るようなもらい方ではなく、いただくように受け取りな
さい。お客さんにもその気持ちは、必ず伝わるからね。」と注
意されます。普段の生活では、お金を払って買い物をする方
ですが、お金をもらって、物売る方の気持ちや態度が、商
売するには、とても大切な事を教わり、大変さに気が付き
ました。

お客さんが来ない時は、大きな声を出して、「生ビールに
ラムネはいかがですかー。」と、買ってもらえる様に歩いて
いるお客さんに呼びかけます。すると、お客さんも足を止め
て買ってくれます。

途中でラムネが少なくなってくると、また奥の冷蔵庫から
重いケース入りのラムネを出して、補充します。ただ補充す
るだけでなく、何本売れて、何本補充したか、叔父さんに報
告しなくてはなりません。最後の売上計算でも大切にな
るからです。

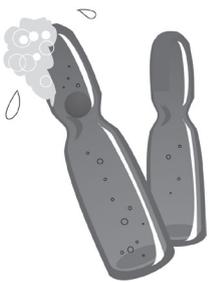
父と母が売っている生ビールも列ができるほどで、すぐに
樽を交換しなくてはなりませんでした。僕も、たまに生ビー
ルを注がせてもらいました。

夜、九時にお祭りは終わります。でも大変なのがこれから
です。道の通行止めも終わり自動車や、オートバイが商店街
に入ってくるので、急いでビールの機械や、ラムネのケース
を片付けなければなりません。それが終わると、ゴミの分別
もします。特にラムネは大変で、プラスチックのボトルと中
に入っているビー玉を分けて捨ててはいけません。おば

あちゃんに「売っただけではなく、その後も売ってゴミになっ
た物にも責任をもって片付けなさい」と言われ、分別をし
ました。売る側の片付ける責任と、リサイクルの責任を教え
てもらいました。

最後の仕事は売上の計算です。父と母は、現金の集計、僕
といとは、夜店券の枚数を数えます。夜店券もお客さんが、
一枚五十円で買った券なので、お金と同じなので間違えられ
ません。何回も数えなおし、いとこと確認をして、母に報告
して、僕達の仕事は終わりです。でも、この後も酒屋のお店
を閉めたり、翌日のお店の準備をしなければならぬ叔父さ
んはもっと大変で、十二時近くまで働いていました。その姿
を見ると、お金をもらう「商売」の大変さと、責任を身近に
強く感じました。

二日間の「夏祭り」が終わり、夜、いとこ達と家で遊んで
いると、おばあちゃんが、お店から上がって来て、「二日間
おつかれさま助かったよ。ありがとう」と、お金をくれました。
た。いつももらう、お小遣いではなく、お祭りの手伝いをし
てもらった、「アルバイト代」です。僕は、働いて、お客さ
んからも感謝され、おじいちゃん、おばあちゃんからも感謝
され、お小遣いまでももらえ、この二日間で、働く事の大変さ
と、喜びなど、たくさんのお話を、教えてもらいました。



職場体験で学び得たもの

墨田区立両国中学校 二年

増子健太郎

「今日から三日間よろしくお願いします。」七月七日、僕は保育園の中にいた。学校から職場体験という貴重な体験が出来る、三日間という時間をもらった。僕は子供が好きなため、保育園を選んだ。そのときの僕は、これから始まる三日間が楽しみでしかたがなかった。

園長先生、そのほかの先生方にあいさつをしたとき、気が付いた。職場で、いろいろな人にあいさつをすると、全員が笑顔で、声を返してくれた。そう、自分が笑顔で、元気にあいさつをすれば、相手も笑顔になって元気も出る、ということが分かった。気付けば僕はたくさんの人にあいさつをしていた。

打ち合わせの結果、僕は二歳児を担当することになった。そして初めての園児との対面で、僕はさっき気が付いた「あいさつ」を、園児のみんな一人一人にした。するとやはりにっこり笑って「こんにちは」と返してくれた。それを聞いたとき、体の中がうれしきで溢れだしそうだった。

給食の時間、僕は素晴らしい光景を見た。それは一言で言う「連携プレー」だ。一人の先生が園児達に絵本を読み聞かせている間に、もう一人の先生が机を拭いて、食器を並べて、料理を盛る。僕はあまりのすごい連携プレーに感動して、そこにつっ立ってしまっていた。そこでまた気付くこと

があった。保育園では、先生方が団結して行動しないと一日、いや一瞬も成り立たないということ。一瞬の気の緩みもいけない、そして何より、保育士という仕事は、一人の力では出来ない仕事なんだ。と感じた。そしてその時、自分も仕事をどんどん手伝っていかうと思った。

保育園にいるときは時間が過ぎていくのがあっという間で、気付いたら午後だった。

午後は、園児の午睡の準備や手伝いで、背中をたたいて寝かす、という仕事だった。僕は最初、とても簡単な仕事だと思っていた。けれど、実際はとても難しく、園児達が寝ないのに、とても苦労しました。後から先生がやってきて、「子供の隣に寝てみなさい」とアドバイスをしてくれました。あまりに寝ない園児達を見て、半信半疑でみると、いままでの苦労は何だったのか、と思わせるように、園児をすやすや寝かせることが出来た。その時、やっぱり先生は「すごい」と改めて感じた。

こうして一日が終わり、最初に思っていた「楽しみ」という気持ちはなくなった。

そして翌日、翌々日も初日と同じ仕事の繰り返しで、とうとう三日間が終わった。三日間という短い時間の中で、かけがえのない事をたくさん学んだ。先生方の姿を見て、今後に生かそうと思ったこともあった。

まず、保育士の人達は、一つ一つの取り組みに、一生懸命子供達のために精一杯の努力を積み重ねているということ。それと、一瞬入魂していたということ。そして、他の人の考えている事を察知して、すぐ行動する。幼児の目線に対応す

る、などの事をとでも良く学べた。

そして何より“仕事の大切さ”“仕事の大変さ”“仕事をしてくれる人の大切さ”の三つが一番良く分かり、しっかり心に刻まれた。この三日間で学んだことを今後の学校生活、私生活で生かしていきたいと思う。

「充実した三日間、どうもありがとうございました。」こうして僕は保育園を後にした。



将来の夢にむかって、今できること

品川区立浜川中学校 二年

大 島 琴 海

私の将来の夢は、ベビーシッターになることです。

ベビーシッターは保育士と少し違います。

保育士は保育園で子ども達と遊んだり、外へ散歩に連れられますが、ベビーシッターは保育園に行くのではなく、依頼者の家に出向いて母親がいない間、子どもに寂しい思いをさせることなく過ごすのが、仕事です。契約内容によっては、

食事やお風呂、習い事の送り迎えなども行い、働く母親をサポートする専門職です。

私がベビーシッターという仕事を選んだ理由は、小さい子が好きだし、保育士とは少し違う働き方にひかれたからです。現在、私のいるところは保育士をしています。毎日とても忙しいので、ベビーシッターとは働き方が違うけれど、すごくいい見本になります。幼児の抱き方、オムツの取り替え方、遊び方、接し方など、たくさんのことを教えてくれます。

やっつけて大変だった話から、うれしかった話、楽しかった話など話してくれて、大変だった話は、やっぱり幼児の世話をする人しか体験できない話ばかりでした。

オムツを取り替える時に、大声で泣きわめいて暴れて、オシッコを引っかけた話、逃げてしまったという話を聞いて、改めて幼児の世話は大変だなあと思いました。

うれしかったという話は、今まで全然しゃべれなかった子が、その時初めて「せんせ。」と呼んでくれた時だと言っていました。

私はその話を聞いて、それは保育士の話だったけれど、自分も同じような体験をしてみたいと思いました。

ベビーシッターになるためには、ベビーシッター協会主催の研修を終えなければなりません。高校は普通に通って、大学は保育学科のある大学へ進学しないと、ベビーシッターにはなれません。

保育学科のある大学へ進学するのに、今からこれといったものは勉強しなくても何とかなるかもしれませんが、この中学校生活で友達から少しでも多くのことを学び、友達との関

係はトラブルなく過ごしていけば、今のところは大丈夫かな
と思っています。

しかし、生活態度は今から少しずつ変えないといけないと
も思っています。

今の私は、何をやるにしても、やったらやりっぱなし、家
事の手伝いはやらない、言葉遣いは悪くて、直そう直そうと
思っても、それができなくて、将来の夢について考え直
した時に再び思い出す状態で、このままでは夢をあきらめる
ことになると思います。

手伝い、片づけをしないと、将来の自分のためにならない
し、親にもたくさん迷惑をかけることになるので、今から少
ずつできることから始めて、最終的には高校卒業までに自
立できるくらいの人間にならないといけないと考えています。
小さい子の世話をするのに、自分の言葉遣いが悪かったり、
やりっぱなしだったりしたら、依頼者からの信用もなくなる
と思うし、小さい子にも悪影響なので、気持ちをきちんと入
れ替えてやっていきたいです。

また、生活態度だけでなく、行動も変えないといけないと
思っています。

私は普段、よく分からない行動をとったり、すぐパニック
になってあせってしまうので、このままの状態でいくと、た
だ子どもを不安にさせてしまうだけなので、これからは何事
にも落ち着いて行動していける人になってから、ちゃんとし
たベビーシッターに向けての勉強をしていきたいです。

もし、ベビーシッターになれたとしたら、私はずっとベビー
シッターの職に就いて、最終的には保育士、ベビーシッター

を目指している人の指導にあたって、たくさんのことを教え
てあげたいです。

この先、自分に何かがあるか分からないけれど、最後まで夢
をあきらめずに努力して、小さい子が喜ぶこと、楽しいと思
うことをたくさんしてあげられるベビーシッターになりたい
です。

働くことの楽しさ

大田区立南六郷中学校 二年

望 月 志 保

私は職場体験で花屋に行きました。花屋では接客業や花束
作り、花に水をやる、そのほかもたくさん仕事を体験させ
てもらいました。その中で私は働くことの楽しさ、そしてや
りがいを感じました。特にやりがいがあったのは仏花作りで
した。私は花の茎を切り、花の配置を考える仕事を任せられ
ました。この仕事はかなり大変で手を切ってしまったこともあ
りました。そのくらい仏花作りは大変でした。その時初めて
花屋特有の苦労を味わいました。その後も花の配置を考えたり、
想像以上に難しく、仕事の大変さや、この仏花をお客様
に売るといふプレッシャーも感じました。やっとの思いで一
束を完成させ、店頭で並べられました。問題はお客様が買っ
てくれるかどうかです。私はすごく不安でした。でも不安も
ありましたが期待もしていて、私が一生懸命頑張って作った

仏花を早くお客様に買ってもらいたいという気持ちもありました。するとお客様が店に入ってきて私達が作った仏花を手にとって、その仏花を見つめてから私に笑顔で

「これを下さい。」

と言ってくれたのです。私はお客様が笑顔で買ってくれたのを見て、本当に嬉しかったし頑張った分、とてもやりがいがあり、印象に強く残りました。

二つ目は接客業です。接客業で苦戦したのが鉢植えものの花を袋に入れることと、レヅ打ちです。どちらもスピード重視なのですが慣れないこともありどうしても遅くなってしまいました。でも、そんな時に一番に応援してくれたのはお客様でした。いつも笑って、

「何事も経験だからゆっくりでいい。」

と声をかけてくれました。私はその度に、すごく嬉しくなりました。私が計算を間違えても怒ることなく優しく教えてくれました。その時に私は仕事がすごく楽しいと実感しました。この接客業で楽しいと思った場面はここだけでは無く、お客様との会話もその一つでした。お客様は私に、明るく話しかけてくれて、最初あった緊張感もだんだん薄らいで、最終日にはのびのびと仕事ができました。明るく接してくれたお客様には本当に感謝しなければならぬし、見習いたいと思いました。

将来、私は何の仕事に就いているかは今、全く分かりませんが、どんな仕事に就いたとしても、今回の職場体験をさせてもらった、花屋のようにやりがいを見つけ精一杯、頑張ろうと思えました。今回の職場体験は四日間だけでしたが、将

来私が就く仕事は四日間だけではなくずっと付き合い続けることに、なると思います。そんな時はちゃんと頑張っているか、楽しみながら仕事できるかなど、今から心配なことはたくさんあります。でも職場体験で店員さんから教えてもらった教訓やお客様からもらった優しさや明るさを、思い出せば平気なのかも知れないと、思いました。先のことなどまだ、分かりませんが、職場体験で学んだ精一杯頑張る気持ちを大切に、これから未来へ向かって歩いて行きたいと思いました。

白い箱

大田区立馬込中学校 三年

岡田 稚菜

「馬込中学校二年一組五番岡田稚菜二〇〇九年二月六日……」
そう長々と書かれた白い箱の中には、あの素晴らしい五日間の思い出と可愛らしい歯のシール、そして大きな歯型が入っている。その歯形は、まるでここが自分の家だと言うように、どっかりと今もそこに座っている。

冬。先輩が受験シーズンを迎えているときに我が大田区立馬込中は職場体験を行った。五日間、という長いようで短い時間の中を、私は「山崎歯科」という歯医者で過ごした。歯医者を選んだ理由はとても単純で、ただ単に、めずらしかったからだ。理由にもなっていないような理由だが、私は山崎

歯科さんを選んで良かったと思っている。お手伝いだけじゃなく、数々の貴重な体験をさせてもらってとても中身の濃い、充実した五日間を送ることができた。

最終日、「歯型をとろう」という山崎さんの一言で、私はイスのそばで立っている。山崎さんというと、奥の台所のよな部屋でピンクの何かを練っていた。どうやらあれが歯型とりの道具らしい。

「大丈夫かなあ。」
言っておきながらも心のどこかでは、余裕だと思っていた。人の口の中に手を入れたこともないのに。

「できたよ。」
山崎さんは銀色の器具に、たつぷりとピンク色の物体を乗っけて笑った。私は、銀色の器具を山崎さんから受け取って、石谷さんの大きく開けた口に入れた。が、思うように入らなかった。器具が大きかったのだ。焦った私は指を使って口をもっと大きく開けさせようとする。が、それも失敗。見ていた山崎さんは、私の焦りようを感じ取ったのか、銀色の器具に手をかける。

「これは、横に入れるんだ。」
そう言いながら山崎さんは、器具を横に向けて口の中に入れた。するとどうだろう。私のときとは違ってかわって、すんなりと口の中へ入ったのだ。さすがプロ、とでも言うべきか。手際よく、あっさりと終わらせた。

「さあ器具をおさえて。これで終りじゃあないよ。」
私はゆっくりと、石谷さんの口の中に手を入れた。
あとどのくらいで固まるのだろうか。私は口の中に手を入

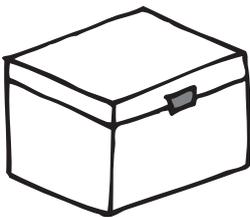
れられたまま、視線を壁から窓へと移す。空が見える。少しさみしい気分になる。

(あっという間だったなあ)
視線を石谷さんへとずらす。目が合った。石谷さんが笑った。私も笑った。

「もうそろそろ外していいよー。」
奥から山崎さんの声が聞こえる。山崎さんの声を聞いて石谷さんがペリペリとピンクの物を外した。

時計を見ると、もう十時半。「三十分後にはできる」らしいので、十一時頃には完成しているだろう。口の中には、まだ変な感触が残っている。十一時になっても、まだこの感じ、残っているだろうか。ゆっくりと、でも確実に時は流れる。待ってなんてくれない。記憶は段々と薄らいでゆくけれど、思い出すことはできるだろう。完成した歯型を見て、この五日間を思い出している私を想像した。

少し記憶は薄くなっているけれど、まだ私は覚えている。山崎さんの慣れた手つき、患者さんの笑顔、院内に流れていたのは優雅なクラシック音楽だったはずだ。思い出すだけで自然と笑みがこぼれる。静かに箱のふたを閉め、引き出しの中にしまった。あの五日間の思い出と共に。



一日は一生

大田区立馬込中学校 三年

小楠由起子

二〇〇九年二月二日～二月六日、こごえる寒さの中、私は花屋の「花モト」へ職場体験をしに行った。

はじめは、学校にやらされた感があつて正直、やる気はなく、お店に行く足どりも重かった。でも、そんなものは店長さんの優しさに消えてしまった。

そして、足取りは軽やかに職場体験は二日目に。

この日は火曜日で、お客さんはほとんど来ない。つまり、とても暇な日である。

せっかく職場体験に来てくれたんだから、と、フラワーアレンジメントを作る体験をさせていただけるらしい。パートさんも今日はお休みでないのに、大丈夫なのだろうか。なんて心配はいらなくて、月、火曜はとても暇だから、一人でやっつけていても大丈夫、とのことだった。

納得して店内につっ立っていると、奥から店長がバケツを持ってきた。中には三十センチほどの大きさの「オアシス」という深緑の塊を二つほど持ってきた。

フラワーアレンジメントは、そのオアシスに水をふくませ少しだけやわらかくし、花の茎を切ってそのオアシスにさすのだ。そのためにはオアシスを半分に切って、フラワーアレンジメント専用のかごに丁度入る大きさにしなくてはいい。

店長は、定規を使うことなく、長年の勘だけでぎっくりと包丁でぴたり半分に切った。地味かもしれないが、これは職人技だ。

フラワーアレンジメントには、売りものの花を使うが、体験、ということ、売りものにならなくなった花を使うのだが、売りものの花とあまり変わらない。色もきれい、張りもあり、植物らしいみずみずしさもある。

さて、この花たちをどうレイアウトしようか。

私は、花のレイアウトを考えるだけでワクワクする。学校には行かず、ここで働いていることが楽しくてしょうがない。このまま、ここで働けばいいのにね、と口からほろりとこぼれた言葉。店長は、その言葉を聞きのがさなかった。

「一日は一生。」

って、言うでしょう、と。

店長は楽しそうに笑いながら話しはじめた。

人の一生は、長いようでとても短い。でも、セミは一週間しか生きられない。それは人から見たら一瞬の命かもしれない。しかし、セミから見たらとても長い。さらに、虫の中には成虫になると一日しか生きられない虫だっている。

人間はいつ死ぬかなんて分からない。だからこそ、一日を一生分生きる。一日、一日を大切にしない、と。

私はびたり、と手が止まっていた。花を手を持って立ったまま、感動していた。

フラワーアレンジメント完成後、写真を撮って、家へ帰る。家路をたどる足は軽く、胸の中はどこかふんわりあたたかかった。

職場体験二日目。職人技と職場を知ること以外のあたたかなものを得た日だった。



自分の仕事に誇りを

大田区立馬込中学校 三年

根 岸 汀

二月二日から二月六日までの五日間、自分たちが選んだ職場でお世話になり、実際に仕事を体験する職場体験がありました。職場の選択肢は、保育園や図書館、飲食店やスーパーなど幅広くありました。

その中で私は、自動車の販売や整備を主な仕事とするトヨペットへ行くことに決めました。選んだ理由の一つ目は、私たちにとっても身近な接客業を体験してみたいと思ったことです。もう一つは、私の家はトヨペットで車を買っていて、車を買う時や買い換える時、私の両親とトヨペットの人が話

し合っているのを見たことがあります。その時、トヨペットの人が私の両親と同じくらい真剣に、私の家族のための車を考えてくれていた姿を見て、こういう人たちが働く職場を実際に見にいきたいと思ったことです。

職場体験初日、私は早くもトヨペットの人たちの仕事に、感動しました。その日は、トヨペットの川崎さんが、私たちに主な仕事内容などを話してくれました。川崎さんは、棚にずらーっと展示されているパンフレットを私たちに見せ、「このパンフレットに載っている車全部を、ここで働いているほとんどの人が覚えてるんですよ。」

と言いました。私は自分の前にある、大きな黒い車の名前さえも分からなかったのもとても驚きました。

「トヨペットに入社したら、覚えなければいけないのですか。」

と私が聞くと、

「強制ではないけれど、お客様に合った車を、他の車と比較しながら薦められるように、入社してから、トヨタの車も他社の車も、皆覚えられるように努力するんです。」

と川崎さんは言いました。私達が感動していると、「だからほら、あの道路を走っている車の名前も当てられますよ。」

と言って、今度は窓ぎわへ行き、川崎さんは窓の外を走る車、一台一台を指で差しながら、名前を当ててみせてくれました。最初は、川崎さんの指が差す車を見ながら、車の名前を聞きとるのに私は夢中でしたが、ふと川崎さんの方を見たら、川崎さんは本当に車や自分の仕事が好きで、またそれに対して

誇りを持っているのが伝わってきました。そして、川崎さんが言っていたように、仕事のためになら努力を惜しまない、トヨペットの人たちの仕事に対する思いや姿勢に感動しました。

他にも、車の点検や洗車をする人や、工場で車の整備をする人など、トヨペットに関係するたくさんの人に、仕事の話や聞いたり、実際に仕事をしているところを見せてもらったりました。私には、どの人も自分の仕事に誇りを持っているように見えました。きっと、自分の仕事に一生懸命になれる人は、自分の仕事を楽しいと思えたり、誇りが持てるようになったりするのだらうと思いました。

今回の職場体験で体験させていただいた仕事は、仕事全体のほんの一部でしかないのかもしれませんが、働いている人たちを間近で見て、仕事の大変さや、その人たちにとっの仕事の重みを改めて知りました。

将来、仕事についていたら、その仕事のために努力を惜しまず、一生懸命働いて、自分の仕事を楽しく思えるようになりたいです。そして、今回出会ったトヨペットの人たちのように、自分の仕事に誇りを持てるようになりたいです。



一生懸命

大田区立馬込中学校 三年

山田実優

平成21年2月2日(月)～6日(金)までの五日間私たち馬込中学校2年生は20数個の班に分かれて、職場体験を行いました。保育園や幼稚園、児童館といった子供と関わる事業所、食に関する事業所、ガソリンスタンドや品物の検品をする事業所など、いろいろな分野の方々が協力して下さい、充実した職場体験をさせていただきました。

私は中学校のすぐそばにある幼稚園でお世話になりました。特にお世話になったのは年長のはと組。はと組のみんなはとても元気でにぎやかな子たちばかりでした。わりと人見知りをしてしまう私は、最初自分から話しかけることができず、戸惑ってばかりいました。そんな中、他の教室にいた友達にすぐに打ち解けたようで教室だけでなく、園庭にも出て遊んでいました。そんな光景を見てどんどん焦ってしまいました。朝礼の時間になり、みんなと外に行きました。そして自己紹介も兼ねてあいさつをしました。そこでようやく自分から声をかけていこうと思えました。私はいつも元気で明るいイメージがあるといわれます。けれど実際それは慣れてきてからの話であって、慣れるまでは本当に人見知りです。自分でも嫌になるほどです。教室に戻るとすぐに年長全員オペレッタの練習のためホールに移動。なんと私たちが職場体験をした翌週は幼稚園の文化祭だったので。なので練習と

いってほぼ完成に近く、最終調整をしている段階でした。少しずつ慣れて園児とも仲良くなって積極的に動けるようになってきたと思ったら、もう最終日。最終日は外で遊ぶことなく一日中オペレッタや合奏の練習でした。

一日おきに行われたオペレッタや合奏の練習。私はホールの後ろの方でその練習風景を見ていました。朝会った時や遊んでいる時とは全く違う園児の姿。パンチやキックをしてくる子、泣き叫ぶ子、すぐ話しだす子。いろいろな子がいました。けれどみんな、何があっても練習を投げ出さず一生懸命歌い、踊っていました。その様子は疲れ、眠い目をこする私に頑張ること、努力することを教えてくれているようでした。

最終日も後ろの方で園児を見ていた私は、「もうこの幼稚園に来ることもなくなるのかな。せっかく慣れたのに残念だな。」
と書いていました。しかし園児のみんな、先生方も口をそろえて

「また遊びに来てね。」
と言ってくれました。私が特にお世話になったはと組の何人かから手紙ももらいました。とても嬉しかったです。百回以上大縄を跳ぶことができた子や、おにごっこを一緒にした子たちの笑顔が頭の中でよみがえりました。現実に戻ると先生のかれてしまった声が聞こえ、園児たちの大きな歌声も聞こえてきました。

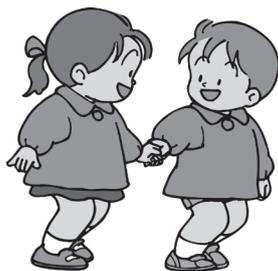
今回の職場体験で学んだことはたくさんあります。人と接することの大変さ、小さい子とのコミュニケーションのとり方など、改めて学んだこともたくさんあり、また新しく学ん

だことも本当に数多くありました。

私は今、オーケストラに入っています。そこには小学校4年生から高校3年生までが所属しています。そんな幅広い年齢の中で真ん中あたりについて自分より年下でも先輩だったり、年上でも後輩だったりする人はたくさんいます。とても不思議な感じはしますが、コミュニケーションをとることで友情は深まるし、音楽もよりおもしろいものとなります。そのために人見知りはしても頑張って自分からも話しかけてみよう

と努力しています。
今回学んだことを今後さらに活かして何事にも果敢に挑戦していきたいと思っています。あいさつは基本、そこに笑顔や態度がプラスされて大きなもの、人間としての芯が通るということを常に頭において周りの人ともうまくやっていけたらいいと思います。

職場体験を通して思ったことは人それぞれだと思います。しかしみんな有意義な五日間を過ごせたと思います。協力して下さった多くの方々に感謝の気持ちを忘れずにいたいのです。



先生と園児のあいだ

大田区立馬込中学校 三年

横 関 美 保

今回、私が五日間お世話になったのは自分が卒園した南馬込保育園。選んだ理由は二つあり、一つ目は、小さい子が好きだから。私自身、少し歳の離れた弟が二人いる。今では大きくなり、だんだん生意気になっているが小さいときは本当に可愛く、片時も側を離れなかったのを覚えている。小さい子が好きという理由は本当に単純かもしれない。しかし私はそれがとても大切なことだと思う。

そして二つ目の理由は、保育の仕事に興味があるということ。前までは祖母と母が美容師ということで、美容の方に興味があり、将来は美容師になりたいと思っていた。

しかし、いつからだったのだろうか、保育の方に強く興味を持ったのは。元々、保育の方にも少し興味があった。しかし、そのときはまだ、私の中では美容の方への興味が強かったのだ。

今回の職場体験、美容も保育もあったが、保育を選んだことで、自分が今、どちらに強く興味を持っているのが分かった。

そして迎えた職場体験初日。私は緊張よりも不安でいっぱいだった。その中でも一番不安だったのは、皆がなついてくれるかということだった。

しかしクラスに入るなり園児の皆が元気に寄ってきてくれ

たことでその不安はなくなった。

お世話になった五日間、全て違うクラスの担当になれるようにと園長先生が考えてくれた。三才、二才、一才、五才、四才と担当していく中で私は最終日ある女の子と出会った。

その子はとても人なつっこくて、劇の練習中もずっと私のひざの上を離れなかった。そんな中、ある女の子が「ちゃんとやってよ。」と私のひざの上に座っている女の子に言いに来た。するとその女の子は注意しに来た女の子にけりなどを入れた。最初は「何でけるの?。」などと話を聞いたが、その女の子は「だって嫌いなんだもん。」としか言わなかった。その後もつねったりや、たたいたりなどを止めない女の子に私はとうとう怒ってしまった。「謝まりな。」もう暴力ふるう子はひざに乗っけないよ。」などと言い。すると女の子は「もうお姉さんも嫌いだー。」と言い、たたいて何処かへ行ってしまった。

そんな時、放っておくのが一番なのかもしれない。だけど何処かへ行ってしまったその女の子がやっぱり気になってしまい捜した。女の子はとなりの部屋に一人でいた。そしてその子と二人で話した。さっきの喧嘩のこと、された方は痛いのだということ。しばらくして、私はその子と約束をした。「ちゃんと謝って劇もちゃんとやったら、またひざに乗せてあげる。」と。すると女の子は嬉しそうに「本当?。」と言いき、クラスへもどっていった。

それからのその子は劇の練習もしっかりとやり、友達に謝っていた。これで良かったのだろうか、と思ってしまうが、きっと良かったのだろう。

私は今回の事を良い体験だと思っている。しかし弟がいて慣れているのか、普段の様なあつかいを女の子にしてしまった。先生が気づいていない場面で出しゃばってしまったことは反省しなければと思う。しかしまた、先生では気づけなかったことに深くかかわれたのは、職場体験という立ち場であり、中学生であったからだと感じた。

中学生であったからだというのはこんな理由だ。それは、先生と園児との中間的存在にある、ということだ。なぜなら中間にすることで先生の気持ちも園児の気持ちも分かる。先生からでは遠い園児の事でも近くで感じとれることが少なくはなかった。

これらの事が今回の体験での私の収穫となった。その他学べた事はまだあるが、全てを今後に生かしこれから過ごしていきたいと思う。

すみれ組の先生

大田区立馬込中学校 三年

池野 遙

私たちは、平成二十一年二月二日から六日までの五日間、職場体験に行った。私が職場体験させていただいた先は、南馬込保育園だった。

なぜ保育園を体験先に選んだかという点、私は子供が好きだから。まだ私も子供だけだと、この場合は、小さい子の面

倒を見たり、一緒に遊んだりすることが好きということだ。特に、赤ちゃんは見ているだけでも自分が癒されてしまう。

とは言っても、小さい子たちとの接し方、叱り方、お世話の仕方などの本当のやり方のようなことは全く知らない。私には妹がいるが、二つしか年がはなれていないため、普段小さい子と関わりとしたら公園ぐらいだ。このことも、保育園を選んだ理由となった。

さて、南馬込保育園には五つのクラスがある。一才はチュールリップ組、二才はすみれ組、三才はさくら組、四才はコスモス組、五才はキク組、となっている。五日間あったので、一日目から、コスモス、さくら、すみれ、チュールリップ、キクの順で回った。

職場体験三日目、すみれ組担当の日だった。

「職場体験には他にどんなところがあるの？」

「花屋とか歯医者とか、あとは…」

「えっ?! 歯医者さんもあるんだあ。」

すみれ組の先生は、そんな話で私の緊張をほぐしてくれた。他のクラスの先生は、仕事のアドバイスはたくさんくれたが、あまり会話はなかった。そのため、すみれ組の教室に入る前はとても緊張していた。

そんな私の様子がわかったのか、先生は、自分が中学生の頃の話や、保育さんになろうと思ったきっかけなど、いろんな話を話してくれた。しかも、休憩時間ではなく、子供達のお昼ご飯の時間に。子供を見守るだけでなく、私への気遣いまでしてくれたのだ。

もちろん、おしゃべりばかりしていたわけではない。先生

からはアドバイスもたくさんもらったし、私も、子供の着がえのお世話など、やることはやっていった。

この忙しい中、気遣いまでしてくれるのはとてもありがたかった。

先生のお話で、とても驚いたことがある。それは、

「私、中学生の頃は保育さんになりたいなんて思ってたなかった。職場体験だって、保育園とはほど遠い場所を選んでたんだよ。」

と言っていた事だ。あんなに楽しそうに子供と遊んでいる先生が、昔は保母さんなんて職業は頭の中のどこにもなかったのだから。自分も将来、想像しなかったような仕事をしているのだろうか。それは美容師だったり、飲食店の店員だったり……。いや、今現在、名前も聞いたことがない知らない職業に就いているかもしれない。

先生からは、アドバイスや昔の話など、本当にたくさんのこと聞いた。そして、仕事のことだけでなく、他にもたくさんのお話を学ぶことができた。それは、他人への気遣いだ。きつと、これは、保母さんになった時だけではなく、他のどんな職に就いても、あるいは仕事の場合以外の普段の生活の中でも大切なことだと思う。だから、私は、ここで学んだことを最大限に生かして、南馬込保育園で出会ったすみれ組の先生のように、他人への気遣いができるような人になりたい。

『小さな小さなものづくり』という ボランティア活動を知って

大田区立大森第六中学校 三年

藤 平 理 沙

私はこの夏、ものづくりの喜びを知る講習会に参加し、ものづくりの楽しさと、その大切さを実感しました。

そのテーマは『小さな小さなものづくり』

私達と、ほぼ同じ歳の女子生徒達が、ものづくりを通じた人間的な成長を遂げていくという実体験を聞く講習会でした。講習会に参加する前、ものづくりに全く興味のなかった私は、女子中高生が機械や電気をあつかう工業系の作業に没頭しているという話に、半信半疑でした。しかし、大田区にある〇学園の女子生徒の活動の話を聞くと同時に、実際のものづくりへの取り組みを知りました。

その活動の一つが、幼稚園や保育園の児童が持ってくる、こわれたオモチャの修理をボランティアとして直してあげるという作業でした。

普段、学校で学んだ電気や機械技術の知識をもとに、ゼンマイ仕掛けのオモチャから電動式の複雑なゲーム機に至るまで、皆が苦心して元通りに直してあげる真剣な姿に感動すると同時に、この女子生徒達が、ほぼ私と同じ年代の生徒だということに、大変な衝撃を受けました。買い換えれば、すぐに手に入るそれほど高価ではない小さなオモチャの一つ一つを、真剣な眼差しで何人もの生徒が知識を出し合い、苦心し

て直していく姿は、アルバイトでは味わうことの出来ない素晴らしいボランティアだと思いました。

私はこの夏、商店街の子供縁日『ジャンボのり巻き大会』のスタッフとして二日間、地域の幼稚園児や保育園児、小学校低学年の世話をするボランティア活動に参加させていただきました。そこで百人以上の幼い子供達を相手にイベントを運営する、普段体験できない貴重な経験をしました。このボランティア活動を通じ、子供たちが喜び歓声を上げる姿は、今も大きな感動と共に、夏休みの良い思い出として、頭に焼き付いています。

また私は先月、ある私立高校の幼児教育科の体験入学に参加しました。

様々な幼児達との関わりの中で、子供達に喜びや感動を与えることの大切さは、これらの経験から理解しているつもりでした。

しかし、今回のものづくりを通じ、子供達に喜びを与える女子学生のボランティア活動を垣間見、ものづくりという私の知らない分野で、子供達に愛と感動を与えることが出来るという、今までに思ってもみなかった子供との接し方を学びました。

小さな小さなものづくりは、そればかりではありませんでした。体の不自由な方々や高齢者の方々のための、車椅子の修理事業も、その一環としてこの女子学生達が、積極的に取り組みんでいます。

今まで私達がボランティア活動として思い浮かぶものとしては、全て地域清掃等の、校外活動や福祉事業とっております。

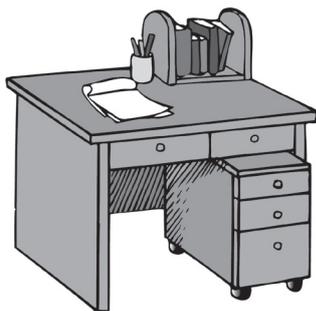
ましたが、学んだ技術や知識を生かしたボランティア活動、会ったこともない人たちのために、その人の喜んだ顔を思い浮かべながら、油まみれになって黙々と行うボランティア活動に、ものづくりの素晴らしさを実感しました。

私は今、塾の夏期講習に参加する受験勉強の真っ最中です。偏差値や順位を競いあうより、本当の自分の生き方、自分の進むべき道を選択する上でも、今回の小さな小さなものづくり講習会への参加は、私の将来の生き方を考える意味でどれ程の刺激となったことでしょうか。

『ものづくり』今、私はこの言葉を自分の中にしっかりと受けとめて、これからの高校生活に生かしていきたいと、真剣に考えています。

最後に、ものを作るということは、その人の魂がその物に宿り生き続けるということ、それは作り手の優しさから生まれるものだとこのことを学びました。

今まで全く興味のなかった工業という分野でしたが、これからは『ものづくり』という私にとって新しいジャンルの引きだしを、頭の中に加え生活していきたいと思えます。



職場体験で

世田谷区立駒留中学校 二年

北岡 樹

職場のことを、僕は「お金を稼ぐ」場所だと思っていた。また、仕事のことを家族や自分の生活のためだけのものだと思っていた。そこで、この「職場体験」は考えを変える良い機会になったと思う。

僕の体験した職場は児童館だった。いつも利用しているの、馴染みのある職場だ。仕事内容は他の職場と比べると随分違う。仕事をするにあたって不安はあった。大人と同じ事がこなせるであろうか。怒られたりしないだろうか。色々あった。しかし、油断の方が大きかった。子どもと遊んだり話したり、楽な仕事だと思い、それほど重労働もないので疲れなだらうと思っていた。そのうえ、公務員だからこの時世でも大変ではないだろうと、勝手に想像し甘く見ていた。

しかし、僕の勝手な想像は始まりから覆された。まず、グラウンドの清掃から一日は始まる。僕は、この時初めて裏の仕事の存在を知った。いつも、グラウンドがきれいであることも、職員の方のお陰だということに感謝した。次に、朝の会がある。学校で言う朝学活だ。僕はこれに一番驚いた。それは、一日の仕事内容や昨日の反省、子供の様子について話し合うものだった。その時、職員の方の考え、仕事量を聞いて甘く見ていた自分が馬鹿らしく思えたりした。そして、一日の終わりに帰りの会がある。内容は殆ど、朝の会と同じ

だった。

そして、職場体験の二日目。任された仕事に僕は耳を疑った。「お話し会」だ。未就学児から小学校低学年迄を対象とした定期的に行われる催しだ。自分にそのような事ができるであろうかと不安だった。不安を抱きながらも準備を進めた。物語を選び終わり、一度目の練習の様子を見ていた職員の方の顔には不安の色があった。そして、最後の練習。時間の流れのはやさを感じながらの三回目だった。ここで、やっとの合格が出た。

子供達が次々に部屋に入ってくると共に、僕の鼓動が速くなる。子供たちの拍手や歓声と同時に読み始めた。子供たちの目が一瞬にして真剣になる。そして、読み終えた時の子供達の反応は想像を遥かに超えていた。

ある日の帰りの会、僕はこんなことを耳にした。

「もっと、子供達に楽しんでもらいたい。」

職員の方の言葉だ。僕らが楽しく、快適に利用できるのは、陰で支えている職員の方の姿があるからだと思った。僕は、この仕事は楽しいか、と館長さんに聞いた。すると何の躊躇いもなく

「楽しいし、やりがいがあるよ。」

と答えた。僕が「お話し会」が終わった時に感じたことだ。そして、この時に「仕事を楽しむ」ことを学んだ。仕事を生きがいと感じ自分の能力を最大限に活用する。「お金を稼ぐ」のではなく「仕事を楽しむ」という考えが見えてきた。そして、館長さんは言った。

「未来を担う子供を見ることは楽しい。そしてその子供たち

に遊びの保証、提供するものが僕らの仕事だ。」と。

この言葉から「人のために仕事をする」事を学んだ。医者、警察官も人のために仕事をしている。世話になった人からの「ありがとう」が「やりがい」につながっているのだと思う。利用者、労働者が共に喜べるような社会になれば良いと思う。

自分のやりたい仕事に就くことは難しいと思うけれど、そのような仕事に就くことができた人達はとても生き生きして活気にあふれていた。僕にも、将来の夢がある。その夢も「未来を担う子供達」を見ていく仕事だ。それが叶ったら、このような姿で仕事をする事ができるのだ、と思うと胸が躍る。将来についてとても役に立ち、職場、仕事に対しての考えを変えた。今の僕には、特に大きな意味を持ち、驚きや発見の多い「職場体験」だった。



技術を通して学んだ事

葛飾区立立石中学校 三年

青山健一

僕が技術の授業や校外学習を通して学んだ事は大きく分けて二つあります。

一つはものを作る楽しさやそれを安全に使う方法をしっかりと学べた事です。実習では初めて電気関連の実習をして、はんだの扱い方や、部品の取り付け方などを実際に手で学習することができました。実際にやっている時は、失敗しないように気を付けながらやろうとしても、うまくいかなかったりと苦労しましたが、とても楽しんできましたと思います。完成して使えるかどうか確認する時は、かなりドキドキして、接触不良などが不安でしたが、幸い特にそのような事はなく、無事完成させる事ができました。

技術で実習する意味は、手で学習することの他にも、作った後の達成感や、作ること自体の楽しさを身をもって実感することだと思います。習うより慣れよ、という諺があるように、実際にやってみると、言葉や文章だけでは分からない技術を身に付けられると思います。

また、授業を通してものを安全に使うということを学びました。何気なく使っている延長コードなども、決められた定格値を超えてしまえば火災の原因にもなってしまうので、安全に使うための学習というのは、非常に大切だと思いました。普段、身の周りにある半分くらいのは電気は動いてい

るので、電気で動くものの仕組みなどを理解することはとても重要だと思いました。

もう一つ僕が学んだ事は仕事をすることの喜びを学んだ事です。二年生の時に職場体験で博物館での仕事をしました事がありました。そこでの経験はとても新鮮で貴重でした。

普段は提供される側ですが、提供する側になってみると、裏での会場準備の大変さや、細かい仕事の連続など、仕事の苦労がよく分かり、身を持って苦労を実感できました。しかし、終わった後の達成感などは、なんとも言えない心地良さがありました。

将来は自分の好きな事を精一杯やりたいと思っていますが、何の仕事にしても、その仕事に対して必ず何らかの幸せや喜びがあるとします。一つの作業が終わった達成感や、自分が出した意見が通った喜びや努力した分結果がついてきた幸せなど、それらを得るために人は働くのではないかと思えます。理由は何にせよ、働きたいという気持ちの中に最後に残るのはきつとそれだと思えます。

日本国憲法にも、「すべて国民は、勤労の権利を有し、義務を負う。」と記されているように、将来必ず働かなければなりません。もし、仕事がつらくなったり、いやになったりした時、中学校時代の職場体験での初めて仕事をした時の感動や喜びを思い出して、新たな気持ちで頑張っていけたらいいなあと思います。

技術や家庭で学び得た事はどの教科よりも生活に役立つと思います。授業数が少なく、わき役に見られがちですが、内容は実に深く、また実際に役に立ちました。今年受験の年

ですが、実技教科もしっかり力を入れていきたいと思っています。まだ中学校生活は半年残っているので、これからも、全ての教科に全力を注いで、今までの積み重ねや、学んできた事を無駄にしないで頑張っていきたいと思っています。

将来の自分が今を後悔していないように、今を、そしてこれから精一杯努力して頑張っていきたいと思っています。

技術と日常の関わり

葛飾区立立石中学校 三年

菅原 大暉



私たちの日常で使っている機械や物は様々な技術を使って作られています。「技術」と一言で言っても、「作る技術」「コンピュータ技術」などなど。現代の技術は数えきれない位多岐にわたっています。難しいこともいくつもあるはずですが、普段使っている物の中で「どうしてこうなるんだろう?」「なぜこんな作業ができるんだろう?」と思ったことはありませんか。自分もこんな経験があります。技術の授業中、基盤と線を組み合わせた時、「どうして基盤の中で電気が伝わ

り合っているのだろうか？」と思ったことがあります。5×6 cm程の正方形の薄い板の中で、電球を発光させる為の電流が流れているのではないかと考えました。その時作っていたのは、電気スタンドでした。理科で習ったことも踏まえて、伝わる大よその仕組みは分かっていました。でも、どうしても不思議に思ったことがあります。物理的に「狭い」とは例えられない、導線の奥の中で物音ひとつ立てずに電流が流れています。こう言われると不思議に思う人も出てくると思います。でも、電気は普通の「物」ではないから、どこに現れても、導線を走ってもおかしくない。こう例えることもできます。昔の人々はこの原理を色々な方法で見つけ出しました。もし、この方法が見つからなかったら今の生活はできていないでしょう。昔の研究者・発明家たちの発見がスタートです。少しずつ手を加えたり、形を変えてみたりして、現代に使われている物の原形ができて……今日こんにちに使われている物が正に発明の集大成と言えるでしょう。昔の研究者・発明家がいる前までは、一般の人々が考えを出し、物を作っていました。少しでも生活を楽にしたい、豊かにしたいという思想が強かったと思います。物を大切に作る気持ちが生まれて来たのも、この頃からです。

私達の生活は今本当に豊かになりました。多くの物や機械に囲まれて恵まれた生活が送れています。その豊かな生活を送っていくうちで何か忘れてしまったことがあると思います。自然への影響、物の大切さなど忘れてしまっただけではありません。日本は今から約45年程前、高度成長期という山を迎えています。その時、当時の人々は誰もが、日本の進化と発展

を望んでいたと思います。新たな技術の幕開けとも言うべき時代だったと思います。交通網が発達し、自動車が行き交い、高層ビルが建てられて行く、本当に戦後とは思えない位進化してしまっただけで語り継がれています。しかし、公害などの問題が起ってしまったのも高度成長期時代と言われています。当時の人達は高度成長の誘惑に乗せられて、環境のことを充分に考えなかったのが原因だと思っています。進化は名譽な話ですが、公害問題が起きてしまったのは残念なことだと思います。今度は私達が問題を起さないように、自然を守っていかねばなりません。技術は活用していくのもひとつのためになります。でも、自然とうまく付き合って行かなければならない。このことを教えてくれました。

これで技術は活用しても、活用のし過ぎは駄目だということが伝わりました。現在世界中で問題になっている「地球温暖化」……。技術の発達のうちで我々が起こしてしまった現象です。問題が大きくならないうちに、技術の力で喰い止めた問題です。必ず技術の力は役に立ってくれるはずですが、危機がせまっているということを忘れてはいけません。自然との対話が難しくなって来ているようです。

自然と向き合う数が減ってしまったのではないか。意識していないものもなかなかうまくいかないと思われている問題……。必ずしも技術が全て良いと言わなければならないと思います。明るい未来を築いていく上で、誰もが持って欲しい目標のひとつ「技術は自然の中での力、自然との自然な感情を持って欲しい」技術は日常の中で数え切れない程あると書きました。是非、数え切れない程の自然とも暮し合って欲しいと思います。

す。都会では味わうことのできない自然を探してみても下さい。技術と自然のふたつをバランスよく組み合わせた時、驚く程素晴らしい日常が——必ず見つかります。人の楽しみ方、人生観を変えてくれます。技術の本当の素晴らしさは便利だけではありません。発見する喜び、作る(造る)喜びがつまっています。これは数えられます。技術の素晴らしさ、目の前に——。

職業体験で学んだこと

江戸川区立小岩第四中学校 三年

大賀 美 優

私は「老人ホーム」に職業体験に行きました。いつもは全然興味が無い分野なのですが友達に誘われたので「たまにはいいかな」という軽い気持ちでした。だって何よりも一人で職場を体験するよりも、友達と居た方が変に緊張しないし、五日間楽しくできると思ってたからです。でも実際は、そんなに甘いものではありませんでした。

初日は何も分からないまま職場体験へ行きました。友達はこのように仕事に将来、就いてみたいという感じで私とは正反対でした。だからやる気もあつたみたいで。

私はそんな友達を横目に、早く五日間終わらないかな。なんて思っていました。

その日、担当する階について話されました。そしたら二人

は同じところが担当だったので安心しました。その日は仕事の前に他の階を見せてもらいましたが、他の階はトビラが普通でなかったり、働いてる人が大変そうに思いました。その時、こんな私がこのような場所に居ていいのか。と思うこともありました。あんなに軽い気持ちで仕事をあまく見ていた私が……。

でも手伝っていくうちに楽しくなってきましたし仕事にも慣れました。デイケア体験をした時は車や徒歩での送迎も体験できて良い経験になったと思います。

適当にやれば良いと思っていたので金魚のフンみたいな感じで友達について行ったのも、後では自分から話しかけたり、積極的に仕事を探したりもするようになりました。一人一人の状態を理解することや、職員の方の注意やアドバイスを、話も真剣に聞くようになりました。

この職場体験は私の中のなにかを変えてくれた気がします。まったくと言っていいほどの仕事に関心の無かった私が、後半三日くらいになると、自ら積極的に仕事をするまでも変わりました。

五日間が無事終わって、最後の日。片付けをしているときにやりきった感とまだやりたいという気持ちと同時に後悔も出てきました。なんで一日目からしっかりやらなかったんだろう。もっと早く気が付けば良かったと思いました。

今では自信を持って言えます。「この職業体験のおかげで成長できたし、将来はこういう仕事にも就いてみたいと思う。」と。

ホントにたくさん事を学びました。軽い気持ちではこの

ようなお年寄りなどを相手にする仕事はできないということ。この職場は介護をするのは当たり前だけど、それと同時に命までも預かっているということ。こんなことを思っているのは私だけかもしれないけど、私は命も預かっていると思いましたが。

将来、このような仕事に就いたとしたならば、私は絶対にこのことを忘れないで、いつも心のスミにでも置きながら仕事をしたいです。このような仕事に就かなくても、違う意味でこの経験を生かせたら良いと思います。

今回の職場体験で学んだことは、人と人との関わりを大切にする。ということ。友達は慣れてて、一目からお年寄りの方々と楽しそうに話してました。けど私は、笑顔もひきつっていたと思うし、初めての経験でとまどっていました。話していてもすぐ、会話が途切れちゃったりして、全然しゃべったりもできなくて、不愉快だったらどうすればいいんだろうとか思っていました。

私は学校では話に詰まったりとかはあんまりないけど初日は緊張しすぎて何もできませんでした。

何が変わったのかは自分ではわからないけど、この体験で何かを学んだから終盤は積極的にできたんだと思います。何が変わったのかがわかる日が来れば、それはこの仕事を本当に理解しているということだと思うので、早くその日が来るといいと思います。

私の夢と希望

愛国中学校 一年

メントネ ソフイー こころ

私の夢は、小さい時から変わらないうまま。

その夢は「ピンクさん」になること。「ピンクさん」とは病院に入院している子供たちの面倒を見る保育士のことである。私は、年長さんの時に紫斑病になり入院した。その入院した病院には「ピンクさん」という人たちがいた。入院している子供たちの病室に、土日以外は毎日来てくれた。

私は、いつもそれが楽しみであった。一緒に折り紙を折ったり、うちわを作ったりしていたのを覚えている。私は、大部屋で周りの子供たちと話さずにいた。そこで、ある日ピンクさんが「一人でいてもつまらないでしょ。話しかけてみたら。」と言った。ピンクさんが隣の女の子と話していたのを見て、一緒にと試してみたものの自分から声をかけるというのは無理だった。

ある日、私は個室にうつることになった。

移動が、はじめた時に隣の女の子が、「バイバイ」と声をかけてくれた。その時、私の頭の中にピンクさんの言った言葉が、よぎっていった。その一言だけだったがうれしかった。次は自分から声をかけて友達をつくらうと思った。

その日、母と二人で広場へ行った。その時、後から元気の良い明るい声があった。「一緒に遊ぼう！」その日から、その女の子と仲良くなった。プレゼント交換したり、人形遊びを

したり。彼女といると楽しかった。私は三週間ほどで退院することになった。彼女は笑顔で見送ってくれた。しかしその後、すごく悲しいことが起きたのだ。彼女が亡くなったのだ。彼女の病気は、白血病。私が退院した後母から聞いていた。幼い私はそのことをあまり理解できなかった。お葬式へ行くと、その子の顔は白くなっていった。お化粧をしているのかと思った。周りの人の目は涙でいっぱいになっていた。まるで目の中に海ができたかのように。

その後何年かしてその女の子のことを思い出すことがあった。いつも明るくしていたがどこかぎこちなかった。彼女は、自分の病気を知っていたのだろうか。治療は、苦しくなかったのだろうか。誰か友達はいたのだろうか。いろいろと考えてしまった。彼女のような入院している子供を少しでも元気に明るくしてあげられる仕事に就きたいと思った。そのことを母に話すと「ピンクさんになれば。」と言われた。それが私の将来の夢になった。

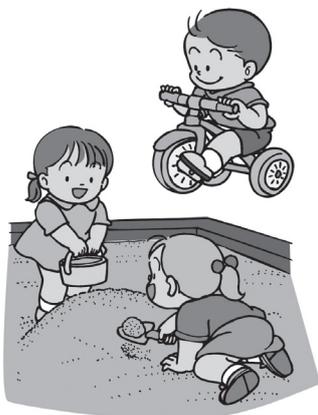
この職業に就くには、一生懸命勉強をしなければならぬ。それだけではなく子供たちとふれ合うことも大切だ。幸い私の周りにはいつも小さい子がいるため、ふれ合うことはできる。弟が二人、小さいいとこもたくさんいる。そして何よりも私は小さい子の面倒を見るのが大好きだ。私には、保育さんのような職業が合っていると思う。保育士の資格はかならず取りたい。また、病気の子供たちを見るのだから看護師の資格もほしい。

そこでこれから先の計画を立ててみた。まず、一生懸命勉強して、高校の衛生看護科に進みたい。さらに専攻科に進み

看護師の資格を取得したい。そして、保育専門学校に入学して保育士の資格も取りたい。卒業して病院に就職。入院している子供たちを心身ともに元気づけてあげられる「ピンクさん」になる。

書いてみるとたったの七行だけど、大変な努力が必要だ。それでもさらに夢がふくらんでいく。日本で五年ぐらい仕事して、アメリカに行き病院に勤めたい。そのためには、苦手な英語も勉強しなければならぬ。にげないでがんばりたい。そして次にフランスの病院でも仕事をしてフランスに住みたいと思う。

私の父は、フランス人と日本人のハーフである。いつか父の母国で生活したいと最近思うようになった。私の夢は、日本の子供たちも、アメリカの子供たちも、フランスの子供たちも、世界中のどこの国の子供たちも支えてあげられる「ピンクさん」になること。この計画を実現させたい。そのため、これからがんばっていききたい。



私の将来の夢

愛国中学校 三年

鈴木沙耶香

私の将来の夢は、看護師になることです。

その理由として、私の母が看護師だからというのもあるのですが、もう一つ理由があります。それは、家族でデパートに出掛け、廊下で倒れている男の人を見かけた時のことです。その人は、大量の鼻血を出していて、とても辛そうでした。初めは、その場所を通り過ぎたのですが、母と父が何かを話した後に、またその場所に戻り、二人でその人に応急処置を始めました。救急車が来た時には、その場所に母と父は、いませんでした。見つけた時には、二人とも何もなかったかのように、普通に買い物をしていました。私は、母に「よかったね。」と言うと、「何が？」ととぼけて言いながら、食材を見ていました。

私は、応急処置をしている時の母と父の必死な姿を今でも覚えています。その時から、私も母と父のようになりたいと強く思うようになりました。

ある日、父に

「沙耶香の将来の夢ってなんだ？」

と聞かれて、私は

「看護師だよ。」

と答えました。父は、さらに

「何のだ？」

と質問してくるので、私は戸惑いました。

『何の？』看護師という仕事は一つしかないのではと思い、

「えっ、お母さんと同じの…。」

と答えました。しかし父は、

「沙耶香は、小さい頃から『お母さんみたいな看護師さんになる。』って言ってたな。お父さんは、沙耶香が看護師になってくれたらとても嬉しいよ。だけど、本当に看護師でいいか？看護師の仕事を詳しく調べてから、将来を考えてもいいんだぞ。看護師はそんなに甘い仕事じゃないんだから、少しお母さんとは切り離して、真剣に考えてみなさい。」
と言いました。そして、私は、改めて看護師について考えてみました。

私は、小さい頃から看護師になることだけを考えていたので、今更、夢を変えようとは思いません。ですから、看護師の仕事について調べてみました。その中でも、父に言われた『何の？』と言う言葉が気になったので、そのことについて、調べてみました。

まず、看護師の仕事についてです。病気の人や怪我をした人の世話をし、健康になれるように手助けします。医師の指示を受けて、診察や検査の手伝いをしたり、入院している人の一日の様子を詳しく記録して医師に知らせるのも大事な仕事です。

病気の人や怪我をしている人は、体も心も弱くなっています。そのような患者さんに優しく接して不安をやわらげたり、励まして勇気づけてあげたりすることが、大切だと思います。そして、患者さんが回復して元気に退院して頂くことが、看

護師の一つの喜びなのではないかと思いました。

その他にも、急患やナースコールに瞬時に対応したり、夜勤もあってハードな仕事ですが、医師と患者さんの大切なパートナーとして、とてもやりがいのある仕事だと思いました。私も、医師と患者さんに信頼して頂けるような看護師になりたいです。

看護師になるための条件、適性としては、人を思いやる心が強いこと。患者さんの体を支えたり、もち上げたりする体力があること。夜勤の時でも元気に頑張れること。いざという時の冷静な判断力が養われていること。つねに勉強を心がける姿勢も必要であるということが分かりました。これは、大人になってからではなく、今から少しずつ努力して身につけることだと思いました。

また、看護師の免許を持っていたらどのような場所で働けるのかを調べてみたところ、病院や医院、診療所、福祉施設、リハビリセンター、助産師、学校の保健の先生、訪問看護（訪問診療）など、様々な場所で活躍することが出来るということが分かりました。私は、色々な免許を取って沢山の場所で活躍したいです。そして、多くの人々を救っていききたいと思いました。

看護師という職業を改めて見直してみて、私の知らなかったことが沢山ありました。きっと父は、そのことを私に知ってもらいたかったのではないかと思いました。

私は、自分のため、家族のためにさらには社会のために立派な看護師になりたいと思います。



高等学校の部 最優秀賞

看護とは何か

愛国高等学校 三年

神山未樹

もし、「あなたにとっての看護とは何ですか？」と聞かれ
たら、以前の私ならきつと答えることは出来なかったことと
思う。それは看護に関する知識や経験が浅いからだけではな
く、看護に対してきちんと向かい合っていなかったからだと思
う。

看護師になりたい、という強い思いから私は衛生看護科に
入学した。看護の知識、技術が日に日に身に付いていくこ
と、看護師への夢へ近づいていく感じがたまらなく嬉しくて
楽しかった。高校二年生の終わりには、病院実習へ行き、実
際に看護の場に触れた。初めて受け持つ患者様、初めての看
護、医療現場というものを実際に学んだ。この実習で私は看
護の大切さ、難しさを感じた。それと同時に、継続して同じ
看護ケアを患者様に行うこと、すぐに看護ケアの効果が見ら
れないことに対し、この看護ケアを継続して行う意味は何だ
ろう、このケアを行って意味はあるのだろうか、と初めて「看
護」に対する疑問を持った。

その疑問は高校三年生となり、成人・老人実習が始まって
も続いていた。今思い返してみると、この時の私は患者様で
はなく病气、つまり疾患の看護をしていたのである。患者様

の個別性を尊重せずに、疾患だけを見つめていた。同じ疾患
でも個人差があり、教科書通りの病態経過ばかりではないと
いうこと。そのような重大なことを当時きちんと理解できて
いなかった。私は何かはつきりしない感情を抱きながら、前
半の病院実習を終え、夏休みを迎えた。

この夏、アメリカへ海外研修に行き、ホームステイを経験
した。そこで私は貴重な体験をすることができた。私はいま
で当たり前のように話をし、言葉を使ってきた。言いたいこ
とも言うてきた。海外へ行き、日本語の通じない場所へ行っ
て、初めて言葉の大切さ、言いたいことが言えることのすば
らしさを知った。また、言葉が通じないことの大変さ、歯が
ゆさを感じた。そんな時、ふと思った。患者様は、もちろん
自分の思いをハッキリと伝えることが出来る人もいる。しか
し、病院実習中、疾患や疾患の後遺症、障害が原因で声を出
すこと、つまり話すことが出来ず、自分の思いを率直に伝え
ることの出来ない患者様を沢山目にしてきた。その患者様に
対し、私は今思うと一方的に話をし、また接していたと思う。
「何てことをしていたのだろう。」と今更になって思うが、私
は患者様の気持ちを理解し、患者様の立場に立てていなかった。
話すことが出来ず、すぐに伝えることの出来ない患者様
は辛いだろうな、と知識の上だけで患者様の気持ちを理解し
た気だった。患者様は私に何か訴えていたかもしれない。ど
んなに患者様が訴えかけても私には通じていない。患者様は
どんなふうにも思っていたのだろうか。そう思うと、「今までの
実習で自分は何をし、何を学んだのだろうか。」と急に恥ずか
しくなった。

私はアメリカに行ったことで、言葉が通じず、思いが伝わらないことから、一生懸命思いを伝えること、伝えようとするこの大切さ、かけがえのなさを学んだ。病気による痛みで、話すことさえ辛いと感じる患者様もいるだろう。そんな時、看護師が寄り添い、温かい手、目、心で患者様に接することが出来たら、患者様はどんなに心強いだろうか。アメリカの家族は、私が話したいこと、私が話している下手な英語を理解しようと耳をずっと傾けてくれていた。最後に私の手を握り、目を見て、深く頷いてくれた。本当のところを理解してもらえたかは分からないが、なんだか心が温かくなった。患者様が伝えようとするとき、一方的ではなく、その伝えたい思いを理解してくれる人がいたら、患者様はどんなに安心するだろう。看護師は、患者様の立場に立ち患者様の思いをくみ取りながら、患者様が訴えかける何かを理解しようとす姿勢、そして洞察力が大切である。私はこんな当たり前のことに初めて気が付かされたのだ。

また、私のホームステイしたアメリカの家族の母の妹は、耳が不自由であり、言葉を話すことが出来なかった。家族とは手話で会話をしてきた。その方は、私に伝わりやすいように簡単な単語を紙に書き始めた。私はそれを辞書で訳して読んだ。そこにはこう書かれてあった。「私は日本語はもちろん、自分が生まれた国の言葉さえ話すことが出来ない。手話が通じない時、私は自分の気持ちを相手に知って貰うことが出来ない。私は話したいことがあってもどうにもならない。あなたはアメリカに来て色々大変かもしれないけれど、話す力を持っている。」

私はその言葉に「はっ」とした。ホームステイの中で、英語が苦手だからという自分のことだけを考え、話そうとしない自分を正当化していた。目の前にいる人は自分と違う人であり、その相手を思う気持ちが全ての出発点なのだということとを、アメリカの地で改めて考えさせられた。

看護の「看」という漢字の一部に「手」が使われているのにも意味がある。手は、看護の技術を発揮する時だけではなく、相手の気持ちを理解する時にも使われる。しっかりと自分の目で患者様を見つめ、理解していくことが大切だからなのだろう。私は改めて「看護とは何か」を考える機会を与えられた。

もし今、「あなたにとって看護とは何ですか？」と聞かれたら、私はきつとこう答えるだろう。

「患者様の思いを知ること。」と。



高等学校の部 優秀賞

農業体験で学んだこと

東京都立園芸高等学校（定） 三年

阿 部 巧

私は都立園芸高校に将来農業に従事したいという理由で入学しました。

学校で募集していた農業体験に夏休みに参加し、農業について勉強をしに行きました。この体験を通じて自分が想像していた農業と、本物の農業の違い、苦労、やりがいを実際に体験し、知りたかったからです。実際に農業を体験できるのは今しかないと思い、少しの不安と共に、お世話になる宮城県板倉農産に向かいました。

実際に本物の農業を体験してみると、やはり私が想像していたものとは全く違っていました。作物を作り、収穫し、販売する、これだけでは農業はやっていけないと思いました。直販所ではその日の朝収穫し、袋詰めした野菜を並べますが、並べ方にポイントがありました。

野菜を並べているときに、袋に赤、青、黄色のテープが貼ってあることに気づき、何だろうと疑問に思い、受け入れ先の社長に質問してみたところ、三色のテープの色で時間が少し経過した野菜を判断し、手前に並べ、その日に収穫した新しい野菜は奥に並べていくということでした。確かに新鮮な採れたての野菜ばかりお客さんが買ってしまってしまうと、時間

が経った野菜は売れ残り、処分しなければなりません。少し時間の過ぎた野菜からお客さんに買ってもらうことで、その日の状況に合わせて無駄の無いように販売できるという工夫を知りました。

さらに直売所では、この時期トウモロコシを中心に販売していましたが、これについても販売の際、工夫がありました。収穫したトウモロコシをそのまま売るだけではなく、収穫後皮をむき、茹でたものを販売するのです。こうすることでお客さんにすぐ食べてもらえるようにという工夫です。茹でたトウモロコシの売れ行きは良く、少し小さめの茹でトウモロコシを試食してもらったり、たくさん買っていたいただいたお客さんにはトウモロコシやその他の野菜を一袋おまけしたりとお客さんに喜んでいただけるようなサービスが多々あり、「すごいな。」と思いました。

ある朝、野菜の収穫の際、ビニールハウスを見た時に気になることがありました。ハウス内の地面に何かが敷いてありました。社長に聞いてみたところ、籾殻を敷いて雑草を生えにくくしているとのことでした。確かに籾殻を敷いた地面にはほとんど雑草が生えていませんでした。また、他の雑草に拮抗作用がある雑草を利用するという興味深い実験もしているとのことでした。色々な工夫をして、なるべく除草などの手間がかからないようにする農家の知恵を感じました。

初めてアイガモ農法を見ることができたのも、この農業体験を通してでした。社長が口笛を吹くと一斉にアイガモ達が足元に集まってくるのを見たときには、ちゃんと人を判別しているのだと感心しました。餌には販売に向かない等級の

トウモロコシを与えていました。私も何度か口笛を吹いてみると、十羽程ですが集まってきてくれて、その可愛らしさに愛情が湧きました。しかしそのアイガモ達が冬になると人の手によって食用にされてしまうということを聞いたときはショックを受けました。でもしかたないことでもあるとも思いました。私がいつもスーパーで買っている肉はすでに加工されています。でも、どこかで牛、豚、ニワトリなどと畜され、人の食料として販売されている。アイガモの話を知った時、改めてそう考えると「命を頂いているんだ」と深く感じる事ができました。

私にとってこの二週間の出来事は色々な気付きと、驚き、そして何より私の農業に対する考えが大きく変わるきっかけになりました。

この体験を通して、私は農業という仕事を知らな過ぎ、甘く見ていました。全ての作業、収穫や販売、接客も自らが正しい、作物を管理するために植物に合わせた生活を送る。休みも無く、言葉では言い表せないほど大変な仕事だと思えました。また天気によっても収穫や利益に影響が出、多くの他の仕事とは違う苦勞が絶えない難しい仕事でもあると思えました。

しかし、受け入れ先の方々の日々の工夫や、直売所でのお客様達の活気を見て、農業はやりがいを感じられる、難しそうだけれども目指したい仕事だと思いを強くしました。

今の私には農業をしている未来の自分が想像できません。だからこそ、今は農業についてたくさん勉強していかなくてはならないと思います。生産技術だけでなく、流通や販売、

経営のことも勉強する必要があります。そして私は将来、趣味で行う園芸ではなく、「農業に生きる」と新たな決意を胸に励んで行きます。

私の進むべき道

愛国高等学校 三年

飯田さゆり

私の将来の夢は看護師になることです。そのため今は衛生看護科三年生で毎日看護の勉強に励んでいます。

私が看護師になると決めたのは、祖母の死がきっかけでした。小学校五年生の時、祖母はたった一人で天国に行っていました。小さい頃から可愛がってくれた祖母の顔は白く、握った手は氷のように冷たく、とても驚いたことを今でも覚えています。そして何よりも、色々と面倒を見てくれた祖母にこれから沢山恩返しをしたかったのに、何も出来なかったことを悔やみました。その時に「もし、私が看護師だったら、祖母に何かしてあげられたかもしれない。」と思いました。それが看護師になろうと思ったきっかけでした。

衛生看護科では二年生で約一ヶ月間の基礎実習、三年生になると約五ヶ月間の成人実習があります。病院実習では三週間を一クールとし、色々な病棟を回り、実際に一人ずつ患者様を受け持たせて頂き、実習を行っています。

私は成人実習の二クール目で初めて全介助の患者様を受け持たせて頂きました。認知症が進み、ほとんど言葉を話すこともできず、合併症から多くの疾患を抱えていらっしゃる方でした。コミュニケーションを取る事が難しく、その時の私は、今後受け持ち患者様にあった看護をどうやっていけばいいか全く分かりませんでした。それでもとにかく、まず自分ができることをしっかりとしようと思ひ、毎日患者様の身の回りの清潔ケアや食事介助を行いました。毎日一緒にいる時間が増えると少しずつ患者様の些細な行動に気が付くことが出来るようになりました。私が病室を出ようとすると患者様は強い力で手を握ったり、白衣を握ったりしてきます。その表情は、私に「いかないで」と言っているように思えました。他にも私が「あ」という言葉を口にすると、患者様も真似して「あ」という言葉を口にします。私が「あいうえお」と言うのと患者様も一生懸命に「あいうえお」と声を出そうとします。その様子を見ていた指導者さんから、

「口頭だけで話すことがコミュニケーションというわけではないんだよ。たとえ言葉が話せなくても、認知症で名前や言葉の意味を覚えることが出来なくても、手を握る感覚は分かるし、ただ側にいることで安心につながっているはずだから。寄り添う看護というのもあるからね。」

次の日から私は毎日患者様の正面に座り、毎朝必ず自己紹介をし、日中も常にベッドサイドに足を運び、患者様に話しかけることにしました。

ある日、いつもの通り患者様のベッドサイドに行き、

「Aさん、私の名前分かりますか？」
と話しかけると、大きな声で

「飯田さん！」

という声が聞こえました。私はとても驚いて思わず拍手をしてしまいました。今まで私がしてきた声かけも少しは患者様の耳に届いていたのだなと思うとても嬉しかったです。それから、何も話さずいつも手を握っているのも寂しいからということも分かりました。健康な人にとってはこんなことと思うかもしれませんが。しかし私の受け持ち患者様にとっては意思表示をできるということが次への大きな一歩につながるのです。そして私自身にとっても同じで、患者様の少しの変化は私の励みになります。どんなに疲れていても患者様に、

「ありがとうございます」

と言われると、疲れも吹き飛びます。看護は人と人との関わりが強さを教えてくれるような気がします。しかしその分責任は重く、勉強もとても難しいです。今までの学校生活の中で何度も挫折そうになりました。そんなとき支えになってくれたのは、同じ夢を持ったクラスメイトのみんなです。衛生看護科は二クラス五十九名しかいません。その分絆が強く、「絶対みんなで立派な看護師になろう。」

と今まで乗り越えてきました。来年の三月には絶対に一人も減ることなく、この五十九人で卒業したいです。そして天国の祖母が自慢できるような立派な看護師になります。

今私は、看護という道を選び、歩んでいることを誇りに思っています。

悔しさを振り返って

岩倉高等学校 三年

小向和樹

私の通っている岩倉高等学校は、鉄道科目を持つ数少ない学校の一つです。鉄道業界への就職を目指す友人と一緒に、三年目を数えるようになりました。この学校の特徴として、鉄道実習と呼ばれる独特のカリキュラムがあります。実際に駅に立ってその仕事内容を体験するものです。私も昨年、千葉県の駅にお世話になりました。

窓口で岩倉高校の生徒だと申し出た私達はすぐに中へ通されました。つい数分前に眺めたときと雰囲気が違うと感じたのは、今思えば、自分でも気がつかないうちに緊張していたのかもしれない。朝礼にあわせて自己紹介を済ませた私達は、社員の方と乗り換え改札口に立って、実習に臨みました。「すみません。F駅に行きたいのですが…どの電車を使えばいいのでしょうか。」

乗り換え改札に立って五分もしないうちに、お客様から声をかけられました。急いで聞かれた駅を地図で探すと、オープンキャンパスが行なわれている駅に近い、他社線の駅でした。続けて電光掲示板に目を移すと、後発の快速電車が先に着くと書かれています。

「F駅には、手前のホームから出る快速電車をご利用下さい。その隣から先に出る各駅停車よりも先に着くことができます。」

緊張が一気に高まってしまい、何度も嘔みながら早口でしゃべってしまいました。お客様にしてみれば相当聞き取りにくいものだったでしょう。言い切ってしまったから、何をやっているのだと内心で罵っている。

「ありがとうございます。」

と言ってくれました。つられて笑った私は緊張を解かれたように、その後の対応はスムーズに行なうことができました。ある程度パターンとして慣れてくると、余裕を持って対応できるようになってきました。時には外国人のお客様に慣れない英語で対応したり、遠く離れた駅へ行きたいと言われて社員の方に助けを求めたりしたこともありました。より分かりやすく、素早く、正確に案内したい。そう思いながら様々なことを学び、過ごしているうちに、実習期間も残り半分を切っていました。

猛暑が続いたある日、電車が止まってしまいました。落雷のために架線が切断されてしまい、さらにその手前の区間が大雨で、ダイヤが乱れているということでした。時間帯は夕方、帰宅する人や花火を見に行く人などに直撃し、あっという間に駅はごった返してしまいました。振替輸送が始まるのと同時に、その場にいた全員が汗をぬぐう暇もなく、ただひたすら迂回できるルートを案内しました。私達実習生も余裕のない状態で、ざわめきに負けないようにと大声を張り上げていました。次の電車は四十分後です。振替輸送を実施しているのでT線へ乗り換えください。その駅でしたら奥のホームの電車をご利用ください…。

「もう五時だからあがっていいよ。」

改札口に走ってきてそう言った社員の方も汗だくでした。そんな、もう少しやらせてください。内心に溢れた言葉が、口に出ることはありませんでした。そんな飛び交う案内や構内放送を背にして、私達は控え室に戻りました。疲れだけではなく、悔しいと思う気持ちも口を重くしていました。まだできることがあるのに。それは他の実習生も同じ気持ちだったようで、

「何か、できないのだろうか。」
と、同じクラスの実習生が悔しさをにじませて言いました。それに対して私は

「この状態じゃ、どうにも……」

と答えるしかできませんでした。何もできなかった。その一言だけが、その日眠る瞬間まで頭の中を駆け巡っていました。それから数日は何事もなく、鉄道実習は無事に終わりました。この実習は、想像以上に様々なことがあり、とても貴重な経験であったと言えます。この機会に改めて様々なことを広く深く学ぶことの大切さ、人に感謝されるこの仕事の喜びを実感しました。

しかし、それ以上にあの時何もできなかった悔しさが、強い印象として残っています。私はこの秋、鉄道業界への就職試験に臨みます。進みたい理由の中に悔しさを加えたいと思います。何もできなかった悔しさは味わいたくない、満足のいくサービスを追求したいと改めて考えたからです。

高等学校の部 佳作

将来の夢

東京都立農産高等学校 一年

柏木 亜美

私の将来の夢は、花屋になることです。花屋を営む祖父母を幼い時から見ていました。私の家は花屋です。私は生まれ頃から、いつも植物と一緒にでした。今は祖母が花屋を営み、祖父は配達をしています。私も花屋の仕事を手伝う時があります。母の日やお正月などは花を買いにくるお客さんがたくさんいるのでとても忙しくなります。祖母と、花市場に行くことがあります。市場では本当に色々な花を見ることができ、そこでは祖母は花や木の名前を教えてくださいます。植物の名前や特徴を覚えるのは楽しくもあり、嬉しいことです。時折、花屋でアレンジをさせてもらうこともあります。初めは、余ったオアシスに小さな花をさすことくらいしかできませんでした。花屋でつくった作品を部屋に置いたら、父と母がとても喜んでくれました。また、ほめてもらうのがとても嬉しくてたまりませんでした。その後、小学校で『こどもいけばな教室』に通い、中学校では華道部に入り、いけばなとアレンジの基礎基本や応用を学んだ後に、花屋でも本格的にアレンジをさせてもらえるようになりました。今年のお正月には花屋に商品として置くこともできたのでとても嬉しかったです。花屋で手伝うこと全てが本当に楽しいので、祖母の

花屋を受けつぎたいと心から思っています。

一昨年の母の日のことです。お母さんにあげるためにカーネーションを買いに来た小さな女の子がやってきました。恥ずかしかったのか、一人での買い物に緊張しているのか、何色のカーネーションが欲しいのかを言えずにいました。でも祖母は急がすことなく女の子の返事を待っていました。しばらくして、女の子は無言でピンクと白のカーネーションを指差しました。祖母はよしきたと言うように腕まくりして、「よしっ決まりだね。」と言ってカーネーションを取り出しました。お母さんが好きな色なのか、女の子の選んだ赤色のリボンをつけました。合計で三百円。女の子がずっとにぎりしめていた手の中にあっただのは百円玉二枚でした。「足りる？」初めて口を開いた女の子は、とても不安そうな顔でした。私はとてもあせりました。「足りない」という一言で、女の子はどんな気持ちになるか、どんなに悲しむか。まだお母さんがいれば足りない分を出してくれるかもしれないけれど、今日は一人だから頼れる人もいません。だけど祖母は「お姉ちゃん買い物一人でえらいからおまけっ。」と言って笑顔で花を手渡しました。女の子はさっきまでの不安そうな顔がまるで嘘のような笑顔で帰っていきました。祖母もまた喜んでいました。

自分が作ったアレンジや、あの女の子の場面を考えると、植物はとてすごい力を持っていると思います。つくりや仕事がすごいというのではなく、どんなに花が小さくても、アレンジをした自分や女の子もそうだったように、皆を笑顔にさせてくれます。花の色や種類によって効果は違ってくるか

もしれないけれど、私たちによるこびを与えてくれます。

植物を通して、あの女の子のような笑顔が生まれるのなら、元気をさせてくれるのなら、私はこの植物のもっている力を、多くの人に広めていきたいと思えます。そして多くの人にもこの力を知ってもらいたいと思えます。

今年も花屋で母の日の手伝いをしました。今年は今までに比べて、自分一人の接客時間が長かった年でした。昔はラッピングやレジ打ち、花屋のそうじなどで、接客といえば花を買いに来てくれた友達くらいしか出来ませんでした。接客をするなど言われたわけではありません。会話があまり得意ではなく自分から進んで接客しようと思わなかったからです。でも今年はずがいました。友達はもちろん、子供からお年寄りといった幅広い人たちに接客できました。接客は思っていたよりも難しくはなく、とても楽しいことでした。お客さんの環境にあわせられるように「花びんがないのならアレンジはどうですか？」といった風に自信をもって勧めたり、予算などがあらかじめ決まっているのならお客さんの好みや要望などに合わせて自信を持って花を決めたりすることができました。相変らず会話や世間話は苦手だったけれど、とても楽しかったです。ただ、植物の種類や名前、育て方などはまだ分からないので、お客さんに尋ねられても答えられないこともありました。これからは、そういった質問にも答えられるようになるため、多くの事を学びたいと思います。

そのための第一歩を、この農産高校で踏み出したいと思えます。花や木や野菜の名前はもちろんのこと、その植物の性質などを知るために、こつこつと勉強していききたいと思いま

す。机で学ぶだけではなく、実際に植物にふれて、その植物の特徴、育て方を自ら積極的に勉強していきたいと思えます。本校で幅広い知識を得ることを目標として、実習を通して栽培技術を学んでいきたいと思えます。

そして、祖母のように皆を笑顔にする力を持ち続けたいと思います。花はきれいでも、花を渡す側が暗い顔だったら、とても快い気分を持って帰れないでしょう。ただこの問題の改善点は『笑顔で接する』それだけです。ただ自分が接し方を良くするだけでも相手は良い気分になってくれるでしょう。だからこそ、祖母のような笑顔で居続けたいと思います。また、笑顔だけではなく、相手の話にも耳を傾けて、悩みにも答えることが出来て意見が言えるような人になりたいと思います。そしていつの日か、あの女の子のような笑顔をつくる花を手渡して行って、皆に植物の持っているすごい力を知ってもらいたいです。

だから私の将来の夢は、笑顔を生み出す花屋になることです。そのためにも、農産高校で園芸に関する知識や技術を積極的に学びたいと思えます。



技能習得型インターンシップとともに 挑んだ電気工事士の資格取得

東京都立練馬工業高等学校 二年

二宮 早紀

夏季休業期間に実施された技能習得型インターンシップに参加し、十日間の企業での就労体験に参加しました。この技能習得型インターンシップに挑み、自らの進路を決定するステップと考え参加を決心しました。

当初、このインターンシップに参加することがとても不安でした。それは、私が女子バスケット部に所属し、八月に公式戦が控えていることです。また大きな問題は、取得を目指している国家試験の第二種電気工事士の実技試験とインターンシップが重なったことです。このスケジュールをしっかりと管理し、体調を崩さずに行うことが出来るか心配でした。

この同時に三つの事をやり遂げるには困難があると思ひ、なかなか一步が踏み出せませんでした。しかし、バスケット部のメンバーに相談したところ「怖がらなくても、やって見た方が後悔しないで済むんじゃないかな。」と助言があり、この言葉で私は決心することが出来ました。この体験の内容は、私が目指している電気工事の職種であり、是非やってみたいと言う気持ちの方が沸き上がりました。

いよいよ技能習得型インターンシップに行く事が決定し、進路指導部の先生からの事前説明を受け資料を頂いたり、提出書類を揃えるなどの大変な日々が始まりました。

共に、電気工事士の資格取得を目指している同級徒と一緒に、電気工事会社でお世話になることになりました。この期間で、どれだけ、技術を習得することが出来るのかとても楽しみと緊張で一杯となりました。

インターンシップ第一日目は、大遅刻の大失敗をしてしまいました。会社に定刻までに行き、現場に移動する予定でしたが、待ち合わせ場所を間違え、出発を二時間も遅れさせてしまいました。社員の方々は、怒ることなく笑ってくれましたが、私は大変申し訳ない気持ちで一杯になりました。作業開始前に、労働安全衛生に関する説明を受けて、本格的な体験に入りました。私達を指導して下さる担当者の紹介があり、その方の指示に従い、作業サポートに従事することになりました。

現場は、高層マンションでの各住戸へのセキュリティ配線工事作業をすることが私達の仕事です。このマンションの防災システム管理室に案内され、各住戸と配線制御盤に接続することで機能するケーブルを通すという作業内容の意義を知りました。

第二日目からは、現場事務所に直接向かい始業時間前に到着し、朝礼後に、ケーブルの配線作業の事前指導を受けました。現場の作業は、住民の方の都合で、現場事務所で待機する時間が時々あり、この時間に、会社の方の理解もあり私達の種類電気工事士に向けて頑張るように、電気工事用の配線材料など揃えて頂き、実践的な練習をすることが出来ました。このインターンシップに参加することで、実技試験に向け練習が十分に出来ない大変不安でしたが、この配慮で不安が

無くなってきました。第三日目からは、各住戸のケーブルの通線作業に従事しました。

ケーブルを、天井から各住戸に繋がるパイプの中にある仮の配線を通し、寸法を測ったケーブル本線と接続のねじり止めし、本線を住戸のモニター基盤に接続する配線作業に従事しました。配線作業は、各住戸の中の配線作業者と、住戸入口の天井配線作業者との配線の送りの声掛けのタイミング合わせが難しい作業でした。また、私達は配線ケーブルのサポートの他に工具の整理、事務的な仕事やビラづくり、お知らせビラ配りなどの経験もさせて頂きました。

そして第四日目、この翌日に実技試験が控えた帰り際、会社の皆さんから「頑張ってこいよ。」と応援をして頂き、とても緊張感が取れました。

第五日目の第二種電気工事士試験日は、休ませて頂き、私達は、電工道具を持ち試験に臨みました。机の上に、電気工事用の配線機材が用意され、周りの人達は社会人が多く、また、私の会場は女性が二名でした。

私達二人は、制限時間の四十分前には、課題作業を終了することができました。これも、会社での実技練習への配慮とインターンシップ終了後に学校に戻り、夜、学校での講習の取組みの結果であると感謝しています。

第六日目に現場に来ると「どうだった。」と実技試験のことを聞かれ、落ち着いて、実技作業に取り組めたことを伝えたと社員の方々が「お疲れ様。」と言ってくれました。

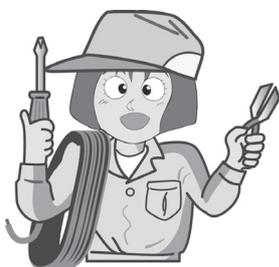
第十日目の最終日。最後と言うことで、ケーブルの通線を今までの体験をもとに自分達の力で全部の作業を試してみるこ

とを指示されました。この作業までは、自分達が最後までやり遂げることはなかったので緊張をしました。「これ一本が通ることでは色々な物が動くんだよ。」と言われ、それを自分達が行った工事でシステムが機能し、住んでいる人の安全な生活に自分達が造ったものが役立ち、ここに残ることにすこい遣り甲斐となるものを感じられました。

海が真下に見える高層マンションでの夏の作業は、天井裏の熱気、風通しの無い廊下の作業はとても蒸し暑い作業でした。この体験は短い間でしたが、年上の方々が、親切に電気工事の作業を教えてください、まして私達が、目指していた電気工事士の実技試験の支援もして頂き、総合的な技能習得の機会となり、とても有意義な経験となりました。

実技試験の結果は、私達二人とも合格することが出来ました。これも技能習得型インターンシップで、会社の方々に親身に教えて頂きながら電気工事の本物の技術の一端を身に付けることが出来たからだと思います。

この経験を活かして、さらに、自らの確かな職業選択に向けて、技術の習得や資格取得への挑戦をしていきたいと思えます。



私の在り方

東京都立小金井工業高等学校 三年

加藤 将 一

私は今年、高校三年生になりました。つい最近、中学校を卒業し、高校に入学したばかりのはずでしたが、気がついてみると、いつの間にか高校三年生になり、進路について悩む時期になっていました。

入学した当初は、楽しい高校生活が待っているんだと、わくわくしながら学校生活を過していました。が、一学期が終わり、二学期、三学期と時が流れると、親しかったクラスメイトはだんだんと減っていききました。

この時はただ、授業を受け、テストや学校行事や休日を過していました。今、振り返るからこそ気付いた時間の長さ。一体、これだけの三年間という時間の中でどれだけの事が出来たのでしょうか。そして、出来ていたのでしょうか。そう考える様になった私は、少しずつ今までの生活を振り返りながら、反省をする様になりました。以前よりも大人になったからなのでしょう。それとも、今まで意識しなすぎたのか。どちらにしても、今までの時間には後悔しかありません。例えば、「この高校三年間の中で何かしてきた事は何ですか？」と質問された場合に、すぐに答えられるものが見当たりません。この高校生活は私にとって、どの様な成長が出来たのか。

入学当初は、たくさんの資格を取得するという目標を持つ

ていました。がしかし、実際の生活では、楽な方へ楽な方へと流れてしまい、委員会なども、積極的に参加する方ではありませんでした。生活態度や成績も、とても良好とは言えるあり様ではありませんでした。

そんな私ですが、当時はこの様な事すら考える事はありませんでした。しかし、二年生で体験させて頂いたインターシップをきっかけに、働くとは何か。自分は将来、働いて家庭を持ち、家族を支えていかなければならないんだと考える様になり、少しずつ、自分の未来を見ずえてみました。

インターシップ先の会社での社員の方々の目には、気だるさは見当りませんでした。それどころか、楽しんでいる様に見えました。担当して下さった方が、商品について、設計の方や、上司の方と相談する姿は、どこか格好良く、たくましく、強く印象に残っています。

このインターシップの三日間で私は仕事でのやりがいを感じました。短い期間でしたが、働くという事は、こういう事だと実感しました。アルバイトとは訳が違う事も、働く姿勢や心いきがまるで違う事を学びました。

自分の父親もあの様に働いているのかと思うと、とても誇りに思うようになり、同時に尊敬の気持ちも持つようになりました。いつか自分も、こうして働くのだと思った時に、今まで自分がどれだけの事をして、そしてこの先、どれだけの事が出来るのだろうかと考える様になりました。

この様に考えているうちに、過去にやらなかった事は、今さら悔いても仕方がない。「やらなければならないのは今だ」と、ここでやっと気付きました。それからは、今までの自分

からでは考えられない程、授業の内容は頭に入る様になり、テストも以前と比較すれば、比べものにならない程良くなりました。

しかし、それでもまだ、人並みのレベルに追いついた訳であり、決して優秀とは言えません。

いつの頃から自分はこの様になってしまったのかを考えるよりも、それでも自分のこれから出来る事、やるべき事を考える様にしています。が、まだその答えは見つかっていません。何をしたら良いのか、自分は将来どう在るべきで、そのためにどんな道に進んだら良いのか。この事に限っては、自分自身で答えを見つけなければなりません。

人という字は、人と人が支え合っているのを表わした文字と、よく言われていますが、私はここ最近では、この様に考えます。人というのは、どの道をたどって来ても、最終的には、答えは同じ所にあり、一つのものに行き着き、自分という人間が出来るのだと。それには何年かかるか見当もつきませんが、今の私は、自分の道を手探りで進んでみようと思っています。

夢は無い訳ではありませんが、人に言える程、立派なものではありません。その夢に近づくには、この先、何通りもの選択肢が待っているはずで、夢だけでは、どうにもなりません。現実を見れば、辛い事も恐らくたくさんあるだろうと思います。

しかし、自分が父親になった時、私が自分の父親に感じた様に、私が自分の子供に同じ様に感じてもらえるように、又、自分自身にも誇りが持てる様な大人になりたいと思いました。

この様に高校生活を振り返り、実際に行動が出来た事に対して正直、私自身が驚いています。これまで生きてきた中で、これ程深くいろんな事について考えた事はなかったと思います。

つまり、今までの生活の中で、自分でも気付かないうちに、少しずつ変化があり、人生の一つの節目を向えようとしている今、それに気付けた事は、これからの大きな糧となってくれると思います。

したがって、これからの生活の中では、節目を自分でつけ、その度この様に反省し、そして目標を立て、それに向かい頑張っていくと思います。

私は、その節目、節目を大切にして、成長出来た自分に誇りを持ち、自分らしく真っ直ぐな大人で在りたいと思います。その為に、今を大事に過して行きたいと思います。



マーケティング部で学んだこと

東京都立江東商業高等学校 二年

山本華己

私は、東京都立江東商業高等学校に入学しました。それは、高校を卒業してから、すぐに働きたいという理由からでした。そのため商業高校はどのような授業をしているのかを詳しく知らないまま入学してしまいました。そのような考えで、初めての授業を受けた私は、簿記などをしてとても難しく、「これだったら普通高校の方が良かった」と思うようになってしまいました。しかし、先生方の熱心な指導により少しずつ授業がわかるようになり楽しくなってきました。

私が商業科目の中ですごく楽しいと思ったのは、ビジネス基礎の授業です。その授業では商品は私たちに届くまでに、たくさんの人から伝わって来ているのだと知りました。そしてたくさんの方のことを学んでいくうちに私も実際に自分で商品を作ったり販売をしたりしてみたいと思うようになりました。しかし、授業では実際に体験できず諦めていました。そんな時、ビジネス基礎の先生でもありマーケティング部の顧問でもある先生から「マーケティング部に入らないか」と誘っていただきました。先生から詳しい話を聞くと私がやりたいと思うようなことが実現できる夢のような部活でした。そのため私は、そのマーケティング部に入部しました。

はじめは、江東区の地場産業を生かした新商品を作るというところで市場調査（校内アンケート）を行い、江東区名物の

亀戸餃子を使った中華まんを作ることになりました。はじめは、インターネットのレシピを参考に作ってみました。蒸しあがったときにアクが多く出てしまい失敗してしまいました。そこで商品開発は難しいことだと感じました。そのため、亀戸商店街の餃子専門店のお店の方にご協力していただきました。そして自分達で販売価格も決め年間利益額なども計算しました。そしてネーミングも「亀戸ぎょうざマン」と決めました。さらに試作品をたくさんの方に食べていただいで市場テストも実施しました。

そして、ついに私たちの考えた「亀戸ぎょうざマン」が完成したのです。自分の考えたことが商品という形となり、実際に販売できることは普通科では体験できないことです。しかし、私は完成したら終わりだと思っていまいましたがこれからが大変だったのです。まず、このままではなかなか売れないためPOP広告やチラシ等を作らなければいけないと知りました。これは、顧客への商品アピールをし、期待感と値ごろ感から購買意欲を刺激することができず。さらに、テストマーケティングによる口コミの広告効果も期待できません。最後は、実際の販売活動だけです。今から販売を楽しみにしています。

今回改めて商品を開発することの難しさを知ることができました。また、地域の方のご協力によってこの商品が販売できる喜びと嬉しさは他の高校生活では味わうことができないと思います。私はこのようにマーケティング部に入りたくさんのことを学ぶことができました。人と人とのふれあい、相互扶助の大切さ、企画力の重要性、そして商業教育の素晴らしさ。

しき。私は、これらの部活で学んだことや授業で学んだことをこれからの自分の進路につなげていきたいと思っていました。そして今は、商業高校に入っても良かったと思っています。これからも、たくさんの方を学び地域の方と協力していきたいと思っています。そして、残りの高校生活を充実させていきたいです。

江東商業に入学して

東京都立江東商業高等学校 二年

横尾有紗

去年の四月、江東商業に入学して早くも二年経とうとしています。江東商業に入学したことは、間違ってたなかった今でも思っています。

それは、私が中学二年の夏休み後半から進路について考え始めた頃でした。私は、どの高校に進学したいのか、まったく考えていませんでした。そこで高校案内の本やパンフレットなどを見て自分のいきたい高校を二つくらいにしばって決めていました。私はその時決めた三つの高校は、どれも普通科の高校で、今通っている江東商業とはかけ離れている高校を選んでいました。中学三年生になり進路活動が本格的になったとき、担任の先生から「商業科の高校に行くつもりはないか？」と薦められました。その時はまだ、商業系の高校に興味なんてなかった私は、その場で考え込んでしまいまし

た。すると先生は、「じゃあ、一度でもいいから、見学してくるといいよ。絶対自分のためになるから」と言われたので、母と一緒に見学に行くことになりました。複数の商業科の高校を見学しました。私の目にはどの商業科の高校も新鮮に映りました。中学では絶対に習わない商業科目、その商業科目を勉強する教室などに興味がわきました。その中でも、見学をした商業高校の中で一番印象に残ったのは、江東商業でした。この時、「商業科の高校に行こう。そして、入学するならば、絶対江東商業だ」と思いました。江東商業に決断した私は、最終的に合格でした。その時のうれしさと喜びは今でも忘れません。江東商業に入学し、部活にも入り、資格もたくさん取得できました。資格を取得したときは飛び上がって喜びました。体育祭や文化祭もすごく楽しめました。一年過ぎるのは本当にあっという間でした。今では二年生です。勉強内容が難しくなり始め、一年の頃に入学した簿記部には後輩が入り、二年の当初に入学したマーケティング部では、自分たちで考えた企画や大会に向けての準備を進めたりと大変でした。しかし、後輩が入ってきたことによって自分が先輩の立場になったことも実感でき、部活で取り組んでいることを責任もって行動しなければならぬという思いももてました。そして簿記部、マーケティング部では、様々な出来事がありました。

今年、簿記部では、全国大会に出場しました。ほかにもIT大会や江戸川大学簿記コンクールなど様々な大会に出場しました。IT大会では賞を受賞しました。全国大会にいくたことは、いい経験になったと思います。今後も、今までの経

験を生かし、頑張っていこうと思います。

マーケティング部は、二つの企画を立て、担当を決め、それぞれ企画を進めていきました。私は、アイデアコンテストの企画を担当しました。このコンテストは江東区の小・中・高を対象に開催します。アイデアコンテストを開催するまでに、いろいろ準備をしました。まずコンテスト名は、「江東夢 アイデアコンテスト」です。また、コンテストの内容を決め、ポスターも作りました。そして、そのポスターを江東区の小・中・高にも配布しました。このコンテストもいよいよ十二月には表彰式です。それを考えると、とてもわくわくします。普段、授業では絶対にできない経験をし、様々なことが学べました。企画の内容などを考える発想力や、責任の重さ、協力性、人に対する思いやりの心やつながりなど、どれもこれから必要なことばかりであり、それをとてもうれしく思います。あのまま普通高校に入学していたらできなかったことでしょう。私は、この企画で学んだことを生かした次の新しい企画につなげたいと思っています。それにマーケティング部は、企画に取り組んだだけでなく、都大会に出場しています。私たちが取り組んでいた二つの企画のことを発表し、私たち江東商業は都大会で二位になりました。全国大会にいけなかった悔しさは今でも忘れませんが、今回の悔しさを胸に、次の大会は絶対優勝できるように頑張りたいと思います。

私は、先輩から部長を引き継いで、簿記部、マーケティング部の部長になりました。後輩をちゃんと先輩たちのように引っ張っていけるのか、部活をまとめていくことができるの

かなど不安なことはたくさんありますが、これからも頑張っていこうと思います。私は、改めて江東商業に入学して本当によかったなと思います。一年が経過するのはあっとい間なので、残りの高校生活でもたくさんの思い出を作りたいです。また、この江東商業は私の夢を実現させるのに必要な道なので、しっかり学んで前進し、最後には、商業科を卒業して良かったと思えるような学校生活にしていきたいです。

作る喜び、作る楽しさ

東京都立忍岡高等学校 三年

寺 澤 美 咲

私は幼い頃から縫いものや、お菓子作りが好きでした。初めは母の見よう見まねで、やっていたが次第に自分から進んでやっていました。そして小学六年生頃から「私は本当に家庭科が好きなんだ。」と実感し、高校は家庭科を専門に学べる学校に行きたいと、強く思いました。

そして私は高校受験をし、みごと忍岡高校生活科学科に入学することができました。

一年生の頃すべてが新鮮で基礎から身につけていきました。私は入学前被服も食物も両方同じくらい興味があり、好きでした。しかし学んで行く中で、私は被服の素晴らしさを改めて実感し、高校では被服中心に勉強して行こうと思いました。

二年生になり、ファッションデザインという授業を取りました。授業ではワンピースを作ることを目標に授業を進めて行きました。課題はワンピースでしたが、先輩の中にドレスを作製した人がいたと聞き、「私もドレスを作ろう。」と思いました。それはなぜかと言うと、中学生の頃高校に入学したら「ドレスを作りたい。」と思っていたのと、昔から負けず嫌いで、人より難しいのを作るといふ思いがあったからです。

しかしドレスを作る事はそう簡単ではありませんでした。思った通りには上手く行きませんでした。でも確実に技術の腕は上がったなと思いました。その後他の授業でも作品を作って行きました。

そして、今高校三年になり、課題研究という授業でまたドレス製作に挑みました。二年生の時の失敗をふまえチャレンジしました。

しかし今回もまたつまづいてしまいました。フリルをスカートにつけるのにも、スカート全体に均等のフリルをつけることが出来なかったり、縫ってはいけないところを縫いこんでしまったりと、たくさんつまづきました。作っていて始めは楽しさでいっぱいだったのに、上手くいかないと、次第にいらだちへと変って行ってしまいました。そしてやる気をなくしてしまいました。「何で思い通りに行かないんだ。」自分じゃまだ技術がたりないんだらうか。「もうやめてしまおう。」と何度も思いました。しかし私が立ち直り、再び頑張る事が出来たのは、友達、家族のおかげでした。みんなが励まし応援してくれたので頑張れました。そして自分の負けず

嫌いが良かったのか中途半端で終わらせる事は出来ませんでした。再び作り続けて行くと、「もう被服なんかやりたくない。」と思っただけに、「もう一度新たな物を作りたい。」と思えるようになりました。

そして完成した時は、作り上げた達成感と嬉しき喜びが込み上げてきます。だから私は作る事が好きなのです。たくさん辛いこともあるけれど、それ以上の事が後にあると思うとやめられないです。

三年前、私の夢は舞台衣装を作ることでした。今でもその夢は素晴らしい夢だと思います。しかし今、三年経ち私の夢は再び変わりました。高校に入り、たくさんキレイな物を見てきて、色のキレイさに興味を持ちました。そしてドレスを二つも作ってきて、ドレスの素晴らしさ、奥深さを改めて知ったのでこの色ドレスに関わる事のできる職種、ウェディングドレスのコーディネーターになりたいです。そしてたくさんの人を幸せにしてあげたいです。

この高校に入学して本当に良かったと思います。たくさん技術、たくさんさんのキレイなものを教えてくれた先生、いつも私を影で支えてくれた家族、そして同じ事をやり、おたがいを励まし合ってきた友達に感謝しています。

私にとって被服とは、とてもやりがいのある大好きなことです。

今後はブライダルを学びつつ、作る事の喜び、作る楽しさを忘れずに、いつもチャレンジ精神を持ち続けたいと思います。

私を変えてくれたもの

愛 国 高 等 学 校 三 年

鈴 木 千 晶

「いよいよ始まる。」三年生になりいよいよ成人看護実習が始まりました。

病棟の看護師の方々に挨拶をすませ、病棟の説明を受けました。「患者様へ挨拶に行きましょう。」指導者の方から声がかかり、私はどのような患者様なのか、早く会いたい、お話ししたいという気持ちと同時に、受け入れてもらえるのかという不安な気持ちを胸に抱えたまま、患者様のいる病室に足を踏み入れました。「鈴木さん、あなたの受け持ちの患者様です。」患者様は車いすを使用していました。そのことは事前に知っていましたが、顔が下を向いていたので、目線を合わせるため、しゃがみながら改めて「三週間実習させていただきますます鈴木です。よろしくお願ひします。」不安な気持ちを取り払う思いで、精一杯の笑顔とはきはきした言葉遣いを意識して挨拶をしました。「・・・。」患者様からの返事はありませんでした。

初日は、患者様と挨拶を交わしたのが唯一のコミュニケーションでした。私は基礎看護実習では、お話を自ら進んでいていただけの患者様、自立していて穏やかな患者様と、至らない点が多くある私を暖かく迎え入れてくださいました。しかし、今回は介助を多く必要とし、また、初日からあまり言葉交わすことができなかったという、前回とは全く違う環

境の中で、「不安だ。行きたくない。」こう感じてしまいました。

二日目からは、患者様のリハビリテーションに付き添い、見学させていただきました。私は少しでも患者様のことを理解しようとして、理学療法士や作業療法士の方へ、患者様について分からないことなど積極的に質問しました。その中で首が下がってしまふのは、以前から持っている癖であること。骨折によるコルセット着用時の痛みがあること、また患者様には調子がよい日、悪い日ははっきりとしていることなど様々なことを知ることができました。また食事は見守りながら行うことなども看護師の方から教えていただきました。日々のコミュニケーションでは、最初は何を話したらよいのかといろいろと考え込んでしまっていました。「好きな食べ物がありますか。」と問いかけて、答えていただいてもその後コミュニケーションがうまく続いています。トイレに行きましよう。」と声をかける時間など、なかなか掴めずにはいませんでした。

しかし、二週目に入ってくると、お互い緊張感も少なくなり、トイレ介助や食事介助、コミュニケーションも円滑に行えるようになってきました。そのときに感じた感覚の喜びは、今も心の中に鮮明に残っています。ある日、患者様の前髪が伸び、リハビリ中にも目をつぶりながら、表情をしかめていました。そこで私は、挟むだけでかんとんに留めることのできるピンを患者様にプレゼントしました。すると、患者様は、今まで一度も見せることのなかったとびっきりの笑顔で喜んでくれました。看護師の方や、グループの友達から、そのことで声をかけられると、患者様はうれしそうに私も見たこと

のないような笑顔を見せていました。

その日をきっかけに、「食事の時、スプーンを持つ手が辛そうだな。」と持ちやすくなるよう、スプーンを太くする器具を用意したり、病室やロビーで使えるリハビリを考え、実践してみたりと、患者様が目標としているところへ少しでも近づけてあげたい、患者様をもっと知ってよりよい看護を提供したいという強い思いが生まれてきていることを自分自身強く感じるようになっていきました。そして一方的な看護ではなく、患者様とその日トイレの便座への移動が行えなかった際は、声かけをしながら、極力自分の力で動いていたいただき、退院後の生活を少しでも支障なく過ごせられるようにと、すべてに手を出してしまふのではなく、見守っていく看護の大切さにも思いを巡らせることもできるようになっていきました。また高齢の方でしたが、好きなタレントがSNAPだったり、やはり女性、容姿、おしゃれに心配りをしたり、好きな食べ物肉類だったり、私たちが日頃抱いている高齢者のイメージとは全く違って、人にはそれぞれ価値観があり、思い込みが正しい判断を曇らすことも学びました。本当に様々な面で多くのことを学ぶことのできた実習だったと思います。

実習最終日、私はこれで実習も終わりだという安心感がわいてきませんでした。まだまだ私にはしなくてはならないことがあるという思いでいっぱいでした。私は、この成人看護実習を通して、焦らず見守る看護もあるということ、ありのままの自分で、正面から患者様と向かい合い、信頼関係を築いていくこと、小さな発見、気づきが大きな成果やより良い

結果に結びついていくこと。そして、何よりも今回の実習で、患者様の存在そのものが自分自身に大きな価値をもたらしてくれることを実感できました。この実習で得た学びを大切にするとともに、これからも患者様との出会いを一つ一つ大切にしていきたいと思えます。私自身を大きく変えてくれた実習だったと思えます。



忘れてはならないこと

愛国高等学校 三年

関谷梨沙

私たち高校三年生の衛生看護科は、資格を得るために必ず通らなくてはならない臨床実習があります。高校二年生の時に行った基礎実習とは違い、看護科の先生方が付きっきりで指導してくれるわけではなく、各グループに分かれ、そのグループメンバーと協力し合い、実習を行っていきます。実習では実際に患者様を受け持たせて頂くのですが、一人に対し一人の患者様を受け持つので、その患者様に関連した内容

患者様の疾患や行った検査、現在行っている治療、服用している薬などの勉強をしたり、コミュニケーションを図ったり、患者様に必要な清潔ケア（清拭やオムツ交換など）の計画をたてたり、患者様のニーズに合った方法を考えたりと、あらゆる面を一人で行っていかなくてはならないこともあります。不安もありましたが、私は幼い頃から看護師になるのが夢だったので、実際に病院へ行き、本物の患者様とお話ができたり、お世話が出来たりするので、看護師に近づけるような気がしたため、とてもわくわくした気持ちでいっぱいでした。そして、臨床実習が始まりました。私は、初めに整形外科で実習させて頂きました。ここには自立した患者様が多く、コミュニケーションも普通に行える方ばかりでした。整形外科では、受け持ち患者様の手術の見学をさせて頂いたり、検査を見学させて頂いたり、とても貴重な経験をすることが出来ました。患者様が自立している方だったので、清潔ケアも準備を行うだけで良いので、とても楽しく、あっという間に三週間が過ぎてしまいました。

そして、二クール目。内科での実習です。この病棟では手術以外の治療を目的にしています。私は、人工呼吸器を装着した女性を受け持つことになりました。この患者様は、人工呼吸器装着の為に気管を切開しているのです、声を出すことが本当は出来ないのですが、気管に挿入しているチューブから空気が漏れ出てしまっている為、声を出し、会話をすることが出来ました。本当はあまりよいことではないのですが、状態が悪化するということもないので、今のままで様子を見ていました。ですからコミュニケーションを図ることが出来ま

した。私の受け持った患者様は六人部屋でやや重症の患者様の入る病室に入っていました。本当に明るく、私がベッドの上に落ちていたゴミを拾っただけでも、「ありがとうございます。」

と言って下さり、とてもやさしい方です。

私は、患者様に会うのが楽しみになりました。患者様も私のことを待っていて下さるようで、私が病室に入り顔を合わせると、満面の笑顔を見せてくれるようになりました。

一週間が過ぎ、土・日・月曜日と休みがあり、久し振りに病室へ行き、いつものように患者様に会いに行くと、いつもなら笑顔で迎えてくれるはずなのですが、その日はとても暗く、声をかけても返事さえ返ってきませんでした。この日は、病室のスクリーンが全部閉まっています、看護部はいつもより慌ただしく動いていました。そして、やっと私にも状況がつかめてきました。私が受け持たせて頂いている患者様の向かい側のベッドの患者様の病態が急変し、危篤状態になっていたのです。そして、数時間後。私が患者様に清拭を行おうと準備をし、病室に向かうと、

「・・・分、お亡くなりです・・・」

という声が聞こえてきました。私は背筋がぞっとしました。この時初めて、「そうだ、病院ってこういうところなんだ。全員が全員、元気になって退院できる訳じゃないんだ。」と実感しました。私は、正直、少し怖くなりました。

しかし、一番「恐怖」を感じているのは、医師でも看護師でも私たち学生でもなく、患者様だと思います。いつもは明るい患者様ですがこの日の患者様はいつもとは違い、顔をし

かめ、自分の腕をぐっと握り締めたり、ベッドを叩いたりしていました。手を胸の前で組み、小さい声で「怖い・・・。」と何度も繰り返していました。私は患者様の身体をさすることしか出来ず、何を言えばいいのか全く分かりませんでした。数日後、患者様も落ち着きを取り戻し、徐々に笑顔も見られるようになってきました。しかし、時折、ふっと何かを真剣に考えている表情をも見せるようになりました。私は出来るだけ明るく接しようと心掛けるようになりました。その時の私には、それ以上どうしたらよいか分かりませんでした。私が出来ることの精一杯のものでした。このような状態の中、二クール目が終了しました。

私は、この実習の中で直接ではありませんでしたが、「死」と向き合いました。初めてのことでしたので、全身が震えるほどの恐怖感を感じました。将来この職に就くことになるとしたら、何度も同じような体験をすることになります。今の私には、どうしたらよいか、その時にどう声をかけたらよいか分かりません。もしかしたら看護師になったとしても正しい答えが見つけ出せるか分かりません。しかし、「患者様の役に立ちたい。支えになって笑顔になってほしい」と強く思います。

この経験は辛く悲しいことでした。私は、今の思いを忘れず、看護師になった時に生かしていけたらと思っています。



大切なもの

愛国高等学校 三年

田中 小麦

「コミュニケーションを取りなさい」
人と会話をするのが得意ではない私。そんな私へ指導者の方からこの御注意がありました。その時の私の心の中にはこれから行われていく実習に対しての緊張と不安が渦巻いていました。

先輩方から「実習はとても厳しいもの」というお話は聞いていました。記録物を書いたり、事前学習をしたり、毎日の睡眠時間が十分ではないことや、指導者の方が厳しいという話があり、私の中では「実習にいったらうまくやっていけるのかな」という思いはありましたが、まさかこんなに早く現実面に直面するとは思いませんでした。しかし、いつまでも不安にとらわれていても仕方ありません。自分の目の前には患者様がいらっしゃいます。「さあ、実習だよ！とにかく頑張ろう！」と何度も自分自身に言い聞かせていたことを今でも良く覚えています。

私たちは緊張の中、指導者さん等に挨拶をし、その後病棟の説明や患者様の説明を受けました。右も左もよく分からないうち、実習初日が終わりました。家に帰ってから、その日の記録を書いたり、明日からの実習のことを考えたりと、いつもとは違う環境にとても疲れを感じていたのを覚えています。そして翌日は看護師の後に付き、役割を知ることが一日の

主な流れとなり、その二、三日後にはもう受け持ちの患者様を決めると指導者さんに言われました。まだ一週間も経っていないのに患者様を受け持つなんて自分に出来るのだろうかと思いました。その後すんなりと、それぞれの受け持ちの患者様が決まりました。

決まった受け持ちの患者様のところへ行き自己紹介をすることになりました。病室へ入り、患者様のベッドまで行き、私は今日から受け持たせて頂くということと、自己紹介をしました。患者様の反応は、目は私を見ていたのですが、何も言葉を発してくれませんでした。私は、今日は少し体調が優れないのかなと思っていました。

私と患者様が一番初めに話せる機会は朝の血圧測定をする時です。血圧を測りながら調子を聞いたりしたのですが、前日と同様、黙ったままでした。ある時病室で声をかけていると患者様が口を開け、何かを喋ろうとしていることに気がつきました。「あ・あ・」と何度も繰り返していました。その時、私は初めて気がつきました。患者様は話が出来ない状態にある方なのだと。そのことに気付いたのは、患者様の開いた口の中がひどく乾燥していてかさぶたが多くできていたからです。「口の中があんな状態なら、会話なんて痛くて出来ないだろうな。」と思いました。

その後、指導者の方に提出する記録に、「会話があまり出来ないのでコミュニケーションの取り方が分からないです。」と書きました。翌日、その提出した記録が返ってくると、そこにはこう書かれていました。

「会話もコミュニケーションですが、コミュニケーション

を取るといふのは何も会話だけではなく、患者様の表情を読み取って、少しでも言葉に反応してくれるなら、それもコミュニケーションになりませう。」

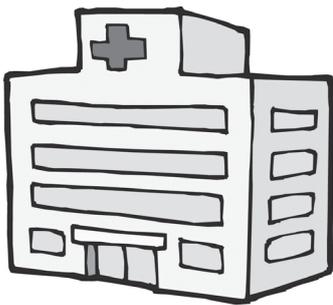
私は言葉を交わすことだけがコミュニケーションなのだと勘違いしていたことに気が付きました。それと同時になぜか自信が湧いてきました。それはきつと指導者さんのコメントに勇気づけられたからだと思ひます。

次の日、ケアをしながら患者様の様子を観察してみました。お互いの会話がなくても、私の声かけに反応して、閉じていた目を開けてくれたり、少し頭を起こしてくれようとしたりと様々な動作が私に対して行われていくことに気が付きました。そのように徐々にではあります、患者様との「コミュニケーション」が取れてくると、私の受け持っている患者様やグループのメンバーが受け持っている患者様のことが気になり、早く実習に行きたいと感じるようになりました。そして私が実習に行くのは、火、水、木曜日なので、金曜日や休日になると少し寂しい気持ちになりました。

そして実習二週目、いつもと同じように病室へ行き、患者様の血圧を測っていると、急に患者様の手が私の腕を掴み、「あ・あ・」と声を出したので、「どうしましたか。少し痛かったですか。」と問いかけてみると、また少し口を開き「あ・あ・ありがとうございます」と患者様はおっしゃいました。私はその言葉が嬉しくて患者様の手を握り、「いえ、こちらこそありがとうございます。ございます。」と笑顔になりました。「ありがとうございます」というたった五文字の言葉の中に普段私の生活の中で感じたことのない思いを感じることが出来ました。「どんな思いで私にその

言葉を言ってくれたのだろうか？」学生の実習ということではケアをさせて頂いていて私の方がありがとうございますという感謝をする側なのだと思います。言葉だけがコミュニケーションではないのだと分かっていても、やはりその言葉は嬉しいものでした。

そして実習最終日を迎えました。初めは患者様を受け持つことが不安でどう関わればよいのか分からず悩んだこともありましたが、辛いことも沢山ありましたが、実習に行きたくなかった日は一日もありませんでした。挨拶のため、患者様のところへ行き、お礼を言うとハッキリとではありませんでしたが「ありがとうございます」と言ってくれました。患者様と関わっていく中で、耳に聞こえる言葉だけではない、様々な「言葉」を聞くことで、本当に沢山のことを学ぶことができたと思います。自分を成長させてくれる、自分を取り巻いているものに感謝を忘れず、これからまだ続いていく看護の道を歩んでいきたいと思ひます。



人のため、そして自分のために

愛国高等学校 三年

三浦 舞

私は幼い頃から憧れていた看護師という職業を目指すために本校の衛生看護科に入学しました。初めは、ただただ看護師になりたいという気持ちでいっぱいでしたが、疾患のことや看護技術などを学ぶにつれて、「自分は本当に看護師になれるのだろうか。」と不安を抱くようになりました。看護教科に加え、普通教科まで学ばなくてはならない。普通の学校に通っていたらこんなに大変な思いはしなかったのではないかと思います。入学する前に「高校から夢を決めていいの？」と両親に聞かれ、「絶対看護師になりたい。」と言った時のことを何度も思い出しました。

しかし、そんな不安な気持ちを晴らしてくれたのは母でした。入院していた頃の祖父の写真を私に見せてくれました。その隣には、アイスを食べている私の姿がありました。母が、「おじいちゃんは、いつも舞に励まされていたんだよ。舞といる時は、いつも笑顔で楽しそうだった。舞もそんなおじいちゃんといたからこそ看護師になりたいって思えたんだから、看護師になっておじいちゃんに見せてあげたら？」と言ってくれました。その言葉で私は、改めてがんばろうと思いました。それから私は、今まで以上にがんばるようになりました。その日の授業でやったことを家に帰ってからノートにまとめ、少しずつ頭に入れるようにしました。今までだったらテスト

一週間前にノートを見直し、テストに臨んでいましたが、一日一日こつこつとやるようになりました。その結果、とてもいい成績を残せるようになりました。私もやればできるのだという自信を持つことができました。しかし、思う通りに全てが進むわけではありません。自分では分かっているけれどもなかなかできないこともあります。そして、この先のことや不安になることもあります。

このような状況の中、私のやる気を引き出してくれているのは、実習でお会いした患者様の笑顔です。まだ何も知らない私たちを、いつも笑顔で迎え入れてくれました。人見知りをする私は、初めての实習の時、どう話しかければいいのか分かりませんでした。その患者様は、ターミナルケア目的の患者様で、痛みをなくすための薬を服用していて、その副作用で、私が話しかけても全く反応がありませんでした。私はどうしたらよいか分かりませんでした。しかし、受け持たせていただいて三日目、その日は痛みがなくていい表情をしていました。私が、自己紹介をすると笑顔で「よろしくね」と言ってくれました。その日は一日ずっと趣味や特技について話していました。笑顔を見られたことで少し安心感と嬉しい気持ちでいっぱいになりました。しかし次の日、受け持った患者様はいませんでした。ベッドが整えられていました。私は涙をこらえました。どうしたらよいか分かりませんでした。そんな時に先生は、「とてもいい経験になったと思うよ。患者様ともしっかり話すことができたし、このことは忘れちゃいけないよ。気持ちを切り替えてがんばろう。」と助けてくれました。とても勇気づけられました。そして看護師の

世界を歩んでいこうと改めて強く思いました。

三年生になってからの実習では、色々な病棟に行かせていただきました。その中で、現在看護師がとも少ないために一人一人の患者様とゆっくり話しながらケアしてあげられないのが現状だと看護師の方が言っていました。「患者様とゆっくり話しながらケアをしたりするのは今だけだと思い、これをチャンスだと思い、患者様に関わってあげて」と聞いたときは、少し辛かったです。仕方のないことかもしれませんが、自分が看護師として働いたときに、今のようになり一人一人の患者様にケアをしてあげられることができなくなるのは嫌だなと思いました。しかし、どのような状況の中でも、自分が中心の看護ではなく、患者様中心の看護をするということをお忘れずに看護していきたいと思えます。

私は高校に入学してから、とても沢山のことを学んで、成長できていると思えます。普通科に通っていたのなら絶対に学ぶことのできなかつた専門教科、実習を通してのチームワークの大切さ、命と関わる情報の大切さ、患者様とのコミュニケーション、信頼感でつながれた関係、そして人を思い遣る気持ち、その一つ一つ、どれを取っても看護師となるのには、いや人として大切なことを学んでいると思えます。実習に行くと、患者様と関わるようになってから、祖父や祖母への接し方が変わってきたような気がします。実習に行くまでは、相手のことを考えず、強い口調で話してしまうことがよくありましたが、実習に行くようになってからは、「寝てばかりいちゃだめ」とか、「お酒は飲み過ぎないで」とか、「煙草はやめて」など、体を気遣う発言が多くなったような気がします。

す。これも実習に行くと、たくさん病気を調べたり、患者様を見てきたりしたからだと思います。祖父や祖母は、「がんばってね。そして老後よろしく」と言っています。祖父や祖母だけではなく、父や母、そして友達や近所の人たちも私のことを応援してくれています。そんな期待に応えられるようにがんばりたいと思っています。そして、この道を選んだ良かったと思えるように、二学期からまた始まる実習や看護師資格試験に臨んでいきたいと思っています。そのためにも事前学習を毎日こつこつとやって、資格試験に向けて問題集も少しずつ進めていきたいです。

来年、資格試験に受かったら祖父や祖母、そして両親に感謝の言葉を贈りたいと思っています。

見られるということ

岩倉 高等学校 三年

佐藤 剛

働くスタイルというのは、その職種により大きく変わってくる。例えば、直接お客様と係わる仕事とそうでない仕事があるが、この二つの仕事の違いは、お客様に見られるという点にある。見られる仕事といえればテレビのアイドルが思い浮かぶかもしれない。しかしアイドルのように華やかではないけれども、見られる仕事というのは、身近な所に多数存在する。それではお客様に見られるという事は働くうえでどんな効果

があるのだろうか。

きっかけは、西日本へ旅行に出掛けた時に乗った電車だった。その電車は運転室と客室を仕切る窓が大きく、私は「眺めをよくするため」などと単純な理由で窓を大きくしているのだと考えていた。

しかし、その窓の隅に掲げられた名札を見た時、その考えが実に浅いことに気が付かされた。つまり、窓が大きいのは、単純に眺めを良くするためではなく、乗務員の働く姿をお客様に見てもらうためでもあったのだ。

私が普段、通学する時に乗る電車は、運転室と客室の間に窓はあるものの、運転席の背後には窓がなく、その列車の乗務員がどんな人なのか把握しにくい。確かにこの方が仕事には集中できるだろう。しかし、仕事を見られていないという安心感から気の緩みが生じてしまう可能性があるのも事実だ。逆に、名古屋にある鉄道会社には、車掌室に仕切りすらい車両があるという。その車両についての記事を読んだ時、インタビューに答えた車掌さんは「お客様が常に私の方を見て乗っていらっしゃいますので、緊張感が高いですね」と言っていた。

乗務員の仕事をお客様に見せ、名前まで掲示するということは、乗務員に責任感や緊張感を持たせるうえで、非常に効果のある手段だと思う。自分が背負っているお客様がすぐ後ろにいる。それを自分の目で認識する事で仕事に対する責任、そしてやりがいを感じる事ができるからだ。

また、お客様が見えることで、お客様との距離が近づくと
いう効果もある。乗務員からお客様の状態を把握しやすい

うえ、「こんな人がこの列車を運転している」という事が分かるだけでも、お客様に安心して乗車してもらえることにつながってくる。このような距離感の近さがきめ細かなサービスにつながっているのだと私は考える。乗務員が見えるだけでも、感じる責任や、お客様に提供できる安心感というのは大きく変わる。

これはなにも鉄道会社に限ったことではない。例をあげるなら名札だろうか。コンビニエンスストアの店員、さらには宅配業者のトラックにまで名札が付いている。最近はどうな職種でも、社員に名札を付けることを義務付けている企業がほとんどだ。名札というのは、単純に名前が分かるようにという理由だけで付けているわけではない。誰がその仕事を担当しているのかを示すことで、お客様に安心していただき、社員自身もそれを自覚し、責任をもって仕事に取り組んでもらうために名札を付けていると私は考える。言うならば責任をもって仕事をしている「証」として、名札を付けているのではないだろうか。

仕事を充実させる手段としても、見られるということを意識したい。働き手として身だしなみを整えるのはもちろん、自分の仕事が見えれば、やりがいを感じる事ができるし、やりがいという達成感を感じることができれば、また次の仕事をする意欲につながるはずだ。普段、生活する中ではなかなか気づくことはないが、自分の働いているところを見られるということを自覚することで、その仕事に対する意識が変わっていく。

責任を持つと聞くと、重苦しく感じるかもしれないが、仕

事にやりがいを感じるための大事な要素でもある。見られる中で仕事をするということは、やりがいを感じるための、有効な手段ではないだろうか。

マイ・ドリーム

岩倉高等学校 三年

中川拓也

都内の私立高校に通い始めて二年が過ぎ、高校三年生になりました。私は今、進路を選択する大切な岐路にたっています。私は小学生の頃からある夢を持っています。それは鉄道員になることです。何故、鉄道員を目指すのかというと、一番の理由は子どもの頃から地元私鉄をよく利用していたことです。私は兵庫県に住んでいて、父や母の実家は電車で三十分程の私鉄の沿線にありました。したがって実家に行く際はほとんど電車を利用していました。また、家のベランダからは常に電車が見えていたので、私にとって鉄道というのは幼い頃からずっとなくてはならない存在でした。

私は東京都内にある私立の岩倉高等学校に通っています。この学校は日本全国でも二校しかない鉄道の専門教科がある高校の一つです。卒業生の半数以上は鉄道会社やその関連企業に就職していて、鉄道業界では有名な学校です。私はこの高校の機械科に進学しました。他にも運輸科、商業科、普通科がありますが、いろいろな技術を身に付けたいと思い機械

科を選びました。一年生は一般科目の五教科に加え、工業科目や鉄道科目といった専門的なことも勉強していきます、鉄道や工業の基礎を固めていきます。二年生になると大手鉄道会社や実際に研修で使用している教材を使い、運転の際に必要な知識や法令、鉄道の信号機、事故の処理など専門的な知識を学んでいきます。さらに機械科は工業関係の資格を取得する生徒が多く、実習の授業で学んだことを生かしてガス溶接やアーク溶接などの資格を取得することができました。三年生になると鉄道のエネルギー源である電気の知識を学び運転実習と呼ばれる授業では、本物の運転台を使ったシミュレーターを使って座学だけではなく実際に動かすことで、より知識を深めることができます。シミュレーターは文化祭でも開放され、一般の方でも自由に体験することができ、とても人気があります。授業は科目、実習の数が多いのですが、カリキュラムが充実しているので、全ての教科を満遍なく学習することができそうです。

私は工作研究部に所属しており、三年生からは部長を務めています。工作研究部では、国鉄時代最後の蒸気機関車として設計されましたが、製造されることがなかった幻の蒸気機関車といわれるC63という蒸気機関車を約二十年前から工作研究部の先輩方が製作を始め、それが継続されていき、私が入部した一年後に走行することができるようになりました。一つのものを作るのにも、耐久性や耐熱性を考慮したうえで、材料や寸法を決めます。寸法は設計図を書かないと大きさが合わなくなり、間違った場所を切断する恐れがあるので設計図を書き、部品を一つひとつ確実に製作します。授業でも製

図という科目の授業があり、設計図を書くときにとっても役立つことを覚えていきます。しかし、いくら設計図を書いても人の手で加工するので失敗することもあります。ですが部員と協力することで、その失敗も少なくなります。さらに工業用の機械を使用する場合は細心の注意を払わなければなりません。故につながりかねないのでお互いの服装をチェックするなど、とても気をつかいます。また、使用する機械の点検も大切です。部員と協力して一つのを作り上げたときの達成感はとても大きく、完成したときはとても感動しました。蒸気機関車を走行させるのにも一人ではできません。何が始めるにも、まずは部長である私が動くことが大切だと感じました。蒸気機関車の運転方法は部員同士で教えあい、今では部員全員が運転方法を覚えていきます。走らせた後は後片付けが待っています。この作業も部員で手分けをして行います。私は指示を出しますが指示を出して終わりではなく、まずは自ら動くことを常に頭にいれてきました。そして、皆で協力することが大切だと感じました。鉄道員だけではなく、すべての仕事においてもチームワークはとても大切だと思います。また、一つひとつの物事を行うにも考えて行動することが大切だと思いました。高校で学んだこと、または身に付けた技術を生かせるような職に就き、縁の下の力持ちとして日本の社会に貢献したいと思います。

言葉よりも大切なこと

蒲田女子高等学校 三年

滝澤祥恵

昨今、介護に疲れ生活苦の末に追いつめられた家族による殺人・心中事件が相次いでいるという耳にしたくないニュースを聞くことがあります。介護疲れの大半は肉体的ではなく精神的な疲れです。そうやってしまうのは介護Ⅱ負担だと考えている人が多いからだと思います。

時代は少子高齢化。様々な障害を有する高齢者とその介護に携わる家族の負担をいかにして減らすかが焦点となっています。負担を減らしてくれるのは在宅での介護を手伝ってくれるホームヘルパーや高齢者が施設に入所して食事介助や入浴介助全てをまかせられる高齢者施設など多岐にわたります。福祉の仕事は大変だとよくいわれていますが、どれくらい大変なのか、どんな風に変なのかは実際に経験してみなければ分からないことだと思います。実際、私も学校の授業で福祉を教わっていますが、介護の現場へ実習へ行き初めて、その苦労を知りました。

私は主に利用者さんとのコミュニケーションを任せられました。重度の認知症の方が多くいらっしやったので会話はおろか、自分の言っていることも通じていない状態でした。そんな中で、職員さんに「通じるか通じないかではなくて伝わることが大切だよ。」と言われました。その言葉を言われた時に私は全く意味が理解出来ませんでした。通じるというこ

とは伝わるということなのだと思って生きてきたので、その理念を無理に覆されたような気がして、なんだかとても不安になってしまいました。もちろんこの実習にくる前に学校で、たくさん勉強をしました。食事介助や入浴介助、レクリエーションや声かけなど。しかし、利用者さんに気持ち伝わる方法は習っていませんでした。周りにいる友達、家族や先生と話をしている時には気持ちも伝えようと思って話さなくても言葉をつかって話せば気持ちも伝わっていると思っていたので、ここに来て初めて言葉以外のコミュニケーションの必要性を感じました。言葉以外のコミュニケーションとは何だろうかと一所懸命に考えましたが答えは出ず、折角施設に実習にきているのに無言で立ち尽くすまま一日は過ぎてしまいました。その日の実習が終わり、家に帰る途中に学校の先生に言われた言葉がふと頭に浮かびました。『福祉の世界では与えられることを待っているだけではだめだ。自分から気づき行動して、必要とされる人となるんだ。』という言葉です。今日の私はどうだっただろうか。自分から気づこうともせず、むしろ何もなければ平穩という考えだったと思います。言われたことをやって、職員さんが言ったことをメモに記しただけの一日でした。こんなことはただの事務で、誰にでも出来る仕事です。私はこの実習で何を学びにきているのだろうかをもう一度考えました。福祉を学んでいる人でなくても出来ることをしにきているのかと思うと、とても虚しくなりました。いくら虚しくても明日はやってきます。ホームヘルパーの資格を取得するためになんとかしてでもこの実習を意義のある形で終わらせなくてはならないと考えていました。

翌日、考え直したといっても実行するには勇気が足りず、解決策なども考えていなかった為、また途方にくれていました。このままこの実習は終わってしまうのかとも思いました。そんな時、職員さんが「今からみんなで一緒に歌を歌いましょう。」とカセットテープで音楽をかけました。曲が流れ出すと、今まで寂しそうな表情だった利用者さんが嘘のように元気になり、車椅子から立ち上がってしまうのではないかと思うほど、利用者のみなさんは陽気に歌い出しました。私は驚くばかりで、歌の力はすごいなあなどのんきに思っていました。すると、一人の利用者さんが私の手を握って「一緒に歌いましょう。」と言ったのです。初めて利用者さんの方から話かけてもらったので感動がこみ上げました。歌い終わっても笑顔で接してくれて、逆に私の方が元気をもらったような気がします。このときに「伝わる」とはこういうことなのだと思えました。きっかけは何でも、隣にいる人と自分がお互いに笑顔になったり悲しくなったり怒ったりする事。これは言葉よりも大切なことだと思います。

精神的に介護疲れをする理由はやはり気持ち伝わっていないからだと思います。介護をする中で辛いことや苦しいことは多いと思いますが、介護する方される方で嬉しさだけでなく悲しささえも全て分かち合えば、介護＝負担と思わないうで済む日がやってくるのではないかとこの実習を経て思いました。

私が福祉を学んできて

蒲田女子高等学校 二年

手塚 美香

「福祉」と聞くと皆は最初にどんなイメージを思い浮かべるだろうか。たぶん、多くの人は老人介護や障害者支援、老人施設などを思い浮かべ、あまり明るいイメージを持たないであろう。しかし「福祉」は老人介護や障害者支援だけではない。私たちの日常生活にも、ありふれているのだ。

福祉とは、漢字から見えてわかるように、幸福感や満足感を意味する。そう考えてみると福祉の要素は私たちが普段、生活する中にも含まれているのではないかと私は考える。例えば、心遣いやちょっとした気配りなども、考え方によっては、福祉と繋がる部分があるのではないだろうか。心遣いや気配りが出来ると出来ないのでは相手の幸福感や満足感も違うだろう。

先日、私はホームヘルパー二級の資格を得るために老人保健施設と同行訪問に行ってきた。ここでは、教科書や学校では学べない、たくさんのお話を学ぶことが出来た。施設では利用者さんとの声かけやコミュニケーションも大切だが、職員さんとの声かけやコミュニケーションも大切だなと実感した。また、やはり気配りが出来ないとこの職場では働けないなど痛感した。同行訪問では、毎日の生活の中にも、工夫して、どうしたら利用者の方に満足してもらえるのか、考える必要性があることを学んだ。やはり、ここにも気配りや心遣

いの大切さを感じた。実体験でなければ絶対に学ぶことのない体験だったため、少々きつい所もあったが、とても良い経験となった。

このように、福祉の中には様々な要素が含まれているが、その中でも心遣いや気配りなどはとても大切な要素となっている。また、福祉と聞くと暗いイメージのほうが強いが、これらのことを考えると、決して暗くはなく、どちらかといえば、ハッピーで明るいイメージではないだろうか。

私は、学校や施設などで福祉を学んできて『福祉』に対する考え方が変わった。以前は、皆と同じように、福祉は大変で、老人や障害者の方にずっと付き添ってなくてはいけないというように、どちらかというところと介護というような考えが強かったのだが、今は違う。確かに、介護や障害者支援は大変な仕事であるだろうし、まだまだ福祉に対して知らない事もたくさんある。しかし、こうは考えられないだろうか。「福祉」は、老人や障害者だけではなく、全ての人に「幸せ」を与えることができる、素晴らしいことに繋がっていくのではないかと。また、お互いに「ありがとう」と言ったり言われたりするこの出来る環境づくりにも福祉は大切になるのではないかと考える。人に幸せを与えることの出来る人が多い世の中になったら、とても穏やかな世の中になるのではないかと私は考える。実現は難しいかもしれないが、そのような社会を私は目指していきたい。

私は将来、大学に進んだ後、心理カウンセラーになりたいと思っている。福祉には直結しないかもしれないが、私は心理学に今、とても興味を持っている。この人とこう接してい

るとき、こんな発言をするとき、人はどんなことを考えているのだろうか、などと、他人と接していく中で自分は、あの人はどう感じているのかなどがわかるようになりたい。それだけではなく、どんなアドバイスをしたら、少しでも幸せな気持ちになってもらえるのかなども学んでいきたいと考えている。

学校や施設で学んだ福祉や介護技術は、将来の夢とあまり密接な関係はないが、私は決して無駄ではないと思っている。福祉を学んできたからこそ、その中からもっと詳しい専門分野に進もうという気持ちが生え、誰かのために頑張ってみようという気持ちを持つことができるようになったのだから。これからも、誰かの「幸せ」のために「ありがとう」の言葉を励みにして、たくさんの幸福感を味わってもらえるように努力していきたい。自分のためにも、皆のためにも。



専修学校の部 最優秀賞

体験で得た「ひかり」

青山製図専門学校 二年

藤田 紘子

私が建築の道を目指すようになる前、主婦として子育てをしながらカフェで働いていた。このカフェは、ランチも充実していて繁盛しており、私はやりがいを感じていた。美味しい料理を提供する・お客様を笑顔で迎え、送り出す。心地良い空間創りとは何か、常日頃考えていた。そして店舗改装の経過に立ち会い、空間創りの違う視点を体験し、建築に興味を持った。

私の父が建築士であった為、幼少期から憧れはあったが自分がその方向に進むのは無理なのではと思い込んでいた。しかし夫や両親に建築の勉強をしないと相談すると、熱意が通じ賛成してもらえた。そして喜びの気持ち一杯で青山製図専門学校・商空間デザイン科に入学した。

入学してすぐの頃は慣れるのに大変だった。建築についての知識は皆無、久々の数学、ハードな課題に苦戦していたが、線一本引くにも定規の持ち方まで決まっていたり、何もかもが新鮮なことばかりで楽しんでもいた。

ようやく慣れてきた五月のある日、校外学習で【江戸東京たてもの園】を訪れた。歴史ある建物が移築されていたり、商店が再現されている。次々と見学をしていくと、ある日本

家屋で担任の先生と一緒にになった。そして見学をしている私達を見てこうおっしゃった。「和室は座って生活するのだから、同じ視点になって周りを見てごらん」

和のデザインを納めようとデジタルカメラをいじっていたのを一旦止めて、その場に正座してみた。はっとした。木のぬくもり、座った角度からの景観、実用性、座っただけでいろんなことが飛び込んできた。充実した見学ができた。

移築・再現された建物は古いながらもインテリア、構造、細かなディテールが新鮮で新しいデザインを考えるヒントがいくつもあった。障子の格子から差す光のやわらかさ、鉄格子の一本一本のひねり、欄間の彫刻、瓦の配置、日本の文化が世界で通用するだけの繊細さがあると感じられた。私が今、数奇屋建築に興味を持っているのもこの日のことが原点であるし、見学によって創作意欲が湧き、明日から頑張ろうと思っただものである。

時には思うように描けなかったり、自分のデザインの欠点を先生方から指摘されて悔しい思いをすることもあるが、仲間達と一緒に乗り越えてきた。パソコンの操作を教えてもらったり、柔軟なデザイン力は刺激になる。年齢差を越えて切磋琢磨できることが嬉しいと思う。

充実した毎日を送る中で、私生活での心意気も変わってきた。私の住む墨田区は【ものづくりのまち】として栄え、産業が盛んである。町のいたるところに工場や工房、企業が立ち並んでいる。普段何気なく歩いてきた道も、ふと見ると「ねじ」の会社、「ばね」の工場などがあり、工業には欠かせない部品や道具類をこの町で作っていることに誇りを感じる。

町内会の試みで、町工場を利用した社交場「まちこうBAR」というイベントがあった。昼はガレージで演奏会があったり、子供向けに工具を使った工作教室、夜は大人が持ち寄りた食べ物をつつきながら酒を嗜む。町工場がこんな使われ方をするのは考えもつかなかった。以前は自分に余裕がなく、鉄を切る音をうるさく感じることもあった。今は「どうやって切断しているんだろう」と学校での授業を思い出して興味を感じたり、「今度この工場で老若男女交流があったら楽しいだろうな」というような思いで過ごしている。

学校や町での体験を通し、公私両面の充実を感じ、私は不思議な感覚にとらわれていた。幸せのような、それでいて胸が「きゅっ」として、見えない空気のような何かに包み込まれているような感覚である。言い表せないこの気持ちは後に、美術館をテーマとした課題の中でこう表現してみた。

—— ころの光合成 ——

「光合成」とは植物や藻類が光・水・二酸化炭素を得て反応を起し、糖分を合成し酸素を大気に排出する。光は主に太陽の光だが、人間の心にとってこの「ひかり」は

・知識を得たとき（わからない問題がわかった、知らない情報を得た）

・きれいな情景を見たとき（夕焼けに感動）

・人とのふれあい（温かさに元気づけられた）

・美味しい物を食べたとき

・ぼーっとしているとき

様々なひかりがあると思う。

この「ひかり」を感じることで、それまで意識していな

かった事が新鮮に思えたり、子供や友人と「疑問」に挑んだり、いろんなことが活性化されて、実生活に還元できてきている気がした。

植物が酸素を大気中に供給しているように、私が学習や体験から得たひかりは体で分解され子供や社会、そして次世代へと放出できるのではないだろうか。私は建築という分野でひかりを感じたが我が子はどんなことに「ひかり」を感じるのだろうか。そして光合成は世代を越えて繰り返し、小さな野花が何気なく咲くように、皆が幸せを感じられる世の中になっただけだと思ふ。

専修学校の部 優秀賞

仕事で得られるもの

ホスピタリティリズム専門学校 二年

関根沙記

生きるために仕事をしていく中で、それを楽しんでいる人はどれくらいいるのだろうか。

そもそも仕事とは楽しいものなのか。そんな私の疑問に答えをくれたのは、ホテルでのインターンシップだった。

宿泊、料飲、宴会と三つの部署の中、私は料飲部のブッフェスタイルのレストランに配属された。

私の仕事内容は、お客様を席までご案内すること。また、ホールスタッフとして飲物をサービスしたり、空いたお皿を下げたり、テーブルをリセットする事だ。

次々とお客様がいらっしゃる中で、これらの仕事をするのはとてもハードだった。しかし、それは「大変」や「苦しい」事ではなく「充実」という言葉に変わるのだ。

それは、「ありがとう。」「楽しかった。」そして、「また来ます。」という最高のご褒美の言葉をお客様からその場でいただけるからだ。一番嬉しかったのは「関根さん」と名前で呼んでくださるお客様がいたこと。これらの言葉には本当に元気がもらえるし、やりがいも感じられる。

また、私自身も幸せを感じられる出来事があった。とても仲の良さそうなカップルが女性の誕生日のお祝いで来店した。事前に男性の方から女性への誕生日プレゼントと手紙を預かっており、サプライズをしたいからタイミングをみて持ってきてほしいと依頼された。私も一緒にお祝いしたいと思い、何人かのスタッフでプレゼントと手紙をお持ちし、心からお祝いの言葉を贈った。すると、他のテーブルのお客様も皆手をたたき、笑顔で女性をお祝いしていた。そのエリアが温かい拍手で溢れていたのだ。女性は最初とても驚いた様子をしていて、目に涙を交えながら最高の笑顔で、

「今までで一番幸せな誕生日です。」

と言ってくれた。私にとって心に残るひとときだった。

それ以来、私は出勤前、とても楽しみに became。今日はどうなるかどんな目的で来るのだろうか。記念日で来店される方、そうでない方も思い出の時間をつくれたいな。と思うと

お客様と会えるのが待ち遠しくなった。

私はいつの間にかお客様には食事でお腹を満たすだけでなく、食事の時間を楽しんでほしい、来た時よりも元気になってほしいと思うようになっていた。

体力的にも決して楽な仕事ではないけれどホテルマンはサービスする人自身がそれぞれホスピタリティマインドを持ち接すれば、誰かに幸せを与えられる職業だと思った。

また、今日と全く同じ日はない。スタッフは毎日全員同じメンバーで同じポジションの仕事をするわけではないし、毎日違うお客様が来店する。お客様の目的や要望に合わせるので毎日違うサービスになる。だから毎日新しい出会いがあり、新しい発見があり、日々成長できる。そういう所もホテルで働く魅力の一つだと感じている。

ホテルでの就職も決まり、夢に一步踏み出す事が出来たので、これから残りの学生生活で語学の勉強をしたり、色々なホテルをリサーチし、素晴らしいサービスを見つけて学びたい。また、資格取得など今できる事を挑戦し続けたいと思う。仕事は楽しいものだ。

楽しいだけではないけれど、自分次第で良い結果が出せると思う。また、仕事は楽しいだけでなく、普段と違う新しい自分を見つける事ができ、目標を持ち続ける事ができ、成長させてくれる。同じ信念を持った上司や先輩や仲間にも出会え、一緒に頑張れる。そして何より自信と誇りとやりがいを持てると学んだ。

社会人として、ホテルマンとして立派な花を咲かせられる様、これからの道を張り切って歩んでいきたい。

専修学校の部 佳作

相手の立場に立つことの大切さ

東京エアトラベル・ホテル専門学校 二年

山下 奈都美

私は、アルバイトをして学んだことが三つあります。挨拶の大切さ、相手の立場になって行動することの難しさ、言葉が与える印象です。

初めて経験したアルバイトの研修中、従業員同士の挨拶に「おはようございます」という言葉を使うことに違和感を感じていました。ですから、「おはようございます」ではなく、「こんにちは」と普通の挨拶をしていました。仕事では「おはようございます」、仕事以外では「こんにちは」と、使い分けることに少し時間がかかってしまいました。しかし、仕事に慣れていくにつれ、挨拶を使い分ける意味を自分なりに考えるようになりました。「おはようございます」とは、従業員同士が気持ちよく仕事を始めるための挨拶です。その背景には「お疲れ様です」や、「今日も一緒によろしく願います」といった、相手への気遣いや仕事に対する気持ちも込められているのだとわかったのです。また新たな意味を発見するまで、今のところ、この考えを基盤にして働いています。そして「おはようございます」や「お疲れ様でした」の挨拶でお互いが気持ちよく仕事ができるように、笑顔の挨拶を大切にしています。

二つ目は、常に相手の立場になって行動することの難しさです。今働いているスーパールのレジのことです。レジを通し終わった商品は、かたいものを下に入れてやわらかい物を上に入れることが基本です。しかし、人によってはかたくても下に入れて欲しくない物があることに気付くことができませんでした。あるお客様のレジを担当し、人参はかたい物だから下に入れても問題ないだろうと判断し下に入れました。しかし、数日後に店長からその件で注意を受けました。「人参を下に入れたら傷んでしまう」というお客様からの投書があったからでした。お客様に申し訳ない気持ちと、そんなことにも気付けなかった自分への悔しさでいっぱいになりました。そして、いろいろな価値観を持つ人がいるのだと再認識させられました。それ以来、自分の価値観で判断するのをやめました。どんな価値観を持ったお客様がいらしても平気なように、なるべく商品を重ねないようにカゴを二つに分けて入れたり、お惣菜やお弁当などの温かいものその他の商品を一緒にしないようにしています。箸やストローなどの入れ忘れにも注意しています。すると、お客様から「わざわざ袋をわけてくれてありがとう」や「箸ありがとう」と言われるようになりました。ちょっととした工夫で、とてもやりがいを感じます。私自身とても嬉しくなります。様々な角度から物事を考えられるようにしています。

三つ目は、言葉が与える印象です。例えば、レジが混雑してお客様をお待たせしてしまったときは、「いらっしやいませ」と言う前に、必ず一言「大変お待たせ致しました」と添えるようにしています。たった一言でも、とても大きな意味

があるからです。ただ単に「いらっしやいませ」と言うだけでは気持ちは伝わらないことがあるからです。実際に一言添える前と後では、お客様の反応も違いました。一言足した方が、「ありがとう」と返してくれることが多くあります。丁寧な接客を心がけると笑顔も返ってきます。感謝の気持ちがお客様に伝わって、私に返ってくるのです。私にとってはこの言葉が支えとなり、どんな言葉よりも嬉しくやりがいを感じます。ですから、私が買い物に行ったらレジで並んだ時は必ず、「お願いします」や「ありがとうございます」と声をかけようようにしています。以前、私がスーパールで会計を済ませ、「ありがとうございます」とレジの人に声をかけたところ、とびきりの笑顔で「こちらこそありがとうございます」と言われました。私はその素晴らしい接客を受け、とてもあたたかい気持ちになりました。同じ仕事をしているからこそ、感謝される喜びを共感できたのだと実感しました。

私はこれからも、挨拶、相手の立場になって行動すること、一言添えて感謝を伝える心を忘れずに、やりがいと楽しさを感じながらこの仕事を続けていきます。



平成二十一年度 作文選考委員名簿（順不同・敬称略）

東京都立瑞穂農高等学校校長(高校・専修の部 委員長)	岡本利隆
東京都立府中工業高等学校校長	石井末勝
東京都立橘高等学校校長	中村謙一
東京都立葛飾商業高等学校校長	小山公央
東京都立江東商業高等学校校長(委員長代理)	金城和貞
東京都立城東高等学校校長	小峯健治
東京都立杉並総合高等学校校長	丹藤浩
安田学園高等学校校長	鈴木行二
京北学園白山高等学校副校長	杉原米和
国際理容美容専門学校校長	鈴木政信
大田区立大森第六中学校長(中学校の部 委員長)	税所要章
練馬区立上石神井中学校校長	小野雅保
江東区立第二大島中学校校長	倉持眞由美
清瀬市立清瀬第五中学校校長	千野和子
練馬区立豊玉第二中学校校長	長南良子
板橋区立志村第一中学校校長	松本洋人
北区立十条富士見中学校副校長	佐々木健一
渋谷区立本町中学校副校長	白倉昌裕
荒川区立諏訪台中学校 主幹教諭	出井玲子
練馬区立石神井中学校 主幹教諭	深井明美
指導部高等学校教育指導課指導主事	山田和人
指導部高等学校教育指導課指導主事	木田貴子
指導部高等学校教育指導課指導主事	平柳伸幸
指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事	和田栄治
指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事	山村智治

あとがき

「明日に生きる」第二十号をお届けいたします。会員各学校の先生方のご指導・ご協力、生徒・学生さんのご努力、選考委員の先生方のご尽力によって、ここに発行できましたことを感謝いたします。

本年度の応募作文の数は、中学校一六一編、高等学校九六編、専修学校九編、合計二六六編でした。昨年度に比べて中学生からの応募は増加しましたが、高校生・専修学校生からは少なくなり、全体で約六％減少しました。今後とも多くの生徒・学生さんからの積極的な応募を期待いたします。

入選者の表彰式は、昨年末の十二月二十二日に都庁内の都民ホールで本会役員・選考委員の出席を得て、多くの保護者と引率の先生方の参加の下で行われました。関係者の皆様に改めてお礼を申し上げます。

この入選作品集の編集に当たっては、人権に配慮し、若干の修正を行いました。明らかな事実誤認を除き「原文尊重」を基本としました。誤字・脱字は直しましたが、句読点等の使い方は統一されていませんがご了承下さい。

生徒・学生さんが就業体験やボランティア体験等を通して学びえた職業観、人生観や自己の生き方をこれからの生活等に活かし、活躍することを期待します。またこの作品集が会員学校はもとより、教育関係諸機関等において広く活用されることを願っております。

明日に生きる 第二十号

— 作文コンクール入選作品集 —

平成二十二年三月二日 発行

発行 東京都産業教育振興会

〒二三八〇〇一 東京都新宿区西新宿二一八一

東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内

電話 〇三―五三二〇―六七二九

FAX 〇三―五三八八―一七二七

印刷 昭和印刷株式会社